
とある管理者の外史物語

(「´ 0 `」)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある管理者の外史物語

【Nコード】

N8574W

【作者名】

(「、0、」

【あらすじ】

神の世界。そこは天国でもなければ地獄でもない、天国と地獄の狭間の世界、“神界”。世界を管理する場所でもある。その世界で管理者を勤める者が、異世界へと転生？する。

超注意事項

・作者は原作知識がほぼ皆無。(現在進行形で猛勉強中)

・ 作者が残念な故、駄文になる確率あり。

プロローグなんですよ。(前書き)

駄文を司る神様登場ですよ。 作者は作者なりに頑張りましたよ。

ブローグなんですよ。

白い空間、ただただ何もない白く、そして無限に広がる白い空間。

そこには、一人の少女と青年がいた。

少女は黒髪のストレート、そして天使が着ていそうな服を着ている。

青年は、ジーパンにコーンのポロシャツ。髪は自然体で、ピアスなどのアクセサリを一切まとっておらず、見た目おしとやかな雰囲気です。話しやすいそんな感じの人であるが、今の状況は少しかり変である。

少女は土下座をし、青年は書類を少女の前に突きつけている。

よくある二次の展開で神に間違えて殺され、神が謝っているところが想像できるが、これは色々な意味であり得ない。

青年は、かなり苛ついた感じで口を開いた。

「青年 side」

俺の名前は黒崎^{くろざき}霊^{れい}牙^が。今俺は少女、レーミに書類を突きつけている。レーミは土下座。そう、今俺はレーミに説教中である。

何故この様なことになっているかというところ...

「…レーミ、お前…これで何回目だ？人を殺したのは？まあ、転生させたから少しは許せるが…そいつがもし“物語”を壊してしまつたらどうするんだ？」

「う、ごめんなさい…。」

そう、人をミスで殺したからだ。だがミス程度で人を殺す程の事が出来るのか。それが出来る理由が…

「お前は…まだ入つて10年の新人だが、お前は神だぜ？いくら転生させられるからと言つても、こちらが大変なんだぞ？」

今俺が話したように、彼女は神だ。が、まだ新人。神は新人扱いから解放されるのは35年。いくら彼女が10年働いていてもまだ新人と同じ、名も知りわたっていない新人神だ。

「べ、別にいいではないですか。転生者は望んで“外史”へ行つたのですから。」

「だから、それが困るんだよレーミ。俺たち“外史の管理者”の仕事が増えちゃうんだぞ？ただでさえ今外史が“増えすぎて”人手が足りないのに。レーミとも一緒に過ごす時間が無くなるぞ？」

「それだけは…！」

レーミが俺に抱きついて涙を流している。はあ、こんな少女が神様なんてな。

見た目11歳の少女、レーミの頭を優しく撫でる。

「ふあ… / / /」

泣き止み、気持ち良さそうに目を細める。

説明が遅れたが、俺とレーミの会話で知らない単語があつた筈だ。
この世界について説明しよう。

まず、この世界は天国と地獄を管理している、つまり神が集い、ここで天国や地獄を管理したり、世界を管理している。この世界を“神界”という。俺は“仕事場”って呼んでいる。

神の仕事については、まずそれぞれの世界に正しい世界、“正史”というものが存在する。その“正史”を管理し、その世界での死者などを天国や地獄へ送ったり、などなどをしている。ちなみに、閻魔、天国と地獄、どちらへ送るかを決める役目の者。実は、それは最高神がやっている。

次に、“外史の管理者”についてだ。

“外史の管理者”というのは、正史から発生する世界、もしもの世界の事だ。そこを正しい終わりに導くのが俺達管理者の役目。

“外史”の事だが、簡単に言えば枝分かれ。では例で説明しよう。

旅人が旅を終え、村に帰る事になった時、二つの分かれ道があつた。旅人は右の道を進み、進んだ結果、無事故郷へ帰れた。この物語を“正史”とする。

では、あの分かれ道で、もしも旅人が左の道へ行ったらどうなっ

いたであろうか。さらに、来た道をいったん戻ったらどうなるのだろう。そういう物語を“外史”という。外史にはまだまだ別なものがあるが、これが一般的だろう。

それで、外史の管理者が一番困る仕事がもしその世界に転生者がいるこんだらという世界。その転生者が、正しい終わりに導く時に妨げになってしまい強制排除してしまう時もある。が、大抵の転生者がチート能力を持っていたりする。故に、神の座を狙う者も多い。そいつらを止めるのも外史の管理者の役目だ。だから転生者がいる世界が増えると、外史の管理者の人手が足りなくなり、さらに戦力を送る事が困難になる。

「さてと。仕事するか。レーミ、説教はまた後でだ。仕事がまだあるから。だが、終わったら…な？」

「勘弁してくださいー！」

因みに、ここ神界では俺は説教屋という異名を持っている。一時、説教で神が神でなくなりかけた奴がいたそうだが、俺の説教ってそんなに厳しいのか？ たった40時間の説教で？ とにかく、俺はこの空間から移動した。

これまた白い空間だが、ここは俺専用の空間。俺が生活に欲しい（ベッドや机など）が欲しいと望むだけで出現する。

それで、今机に座り書類を確認している。

「……この外史が今回の仕事か。しかし厄介だなこれ。」

書類に目を通して、これは最悪だと思った。

この世界での主人公が主人公の役割を果たさない物語だ。こういうのは俺が直接転生し、主人公をサポートするか、俺が主人公になるかのどちらかだ。まあ主人公のサポートが大抵だが、これはまずい以前にチート転生者が暴れまくった世界だ。なんらかに支障が生じたのか、何処かで主人公が死ぬ。この世界は、空間を司る有り得ないチートが暴れた。それを神と管理者でこの世界を転生者を封印させてから世界を修復し、時間も戻しはい終わり。

だがやはり修復しきれなかったところがあったのだろうか。どうやら俺自ら行って物語を完結させなくてはならないようだ。

「あれ？ 霊牙さん、転生するんですか？」

「うわ！？ ……驚かすなよ… 心臓に悪い。」

「いいじゃないですか、死にませんし。」

急に俺にのっかってきたレーミ。

「こらこら、お前は何歳だ？ いつまでも子供みたいにジャレてると、立派な神になれないぞ？」

「私は子供じゃありません、更に私は594歳です」

はあ、困ったものだ。

んで、俺はよくいろいろな場所へ転生させられている。俺はなんにせ、唯一異能を使わない管理者最強の者だからな。

ああ、何故管理者が転生したりしなくてはならないかというと、神みたいに強力な異能をもっていないからだ。つまり、管理者全員は肉弾戦を基本として戦う。だから肉弾戦はかなり強い。だが神には敵わない。その中で唯一、神と戦う事が出来るのが俺だ。

それはどうでもいいが、何故神ではなく管理者が転生するか。それは、神が行ったらず神の力でその世界は壊れてしまうからだ。それで管理者が転生した方がいい。さらにその中で一番俺が強いから、かなり便利だぜひゃつはーみたいになるわけ。

「それよりも、転生するのなら私も連れて行ってください！物語にはヒロインは存在するもの、なら私がヒロインにんむ！！？」

一緒に行きたい行きたいと言うレーミの口を塞ぐ。

「だめ。レーミはやらなきゃいけない事があるだろ？（仕事方面で）」

「え！？／／／そんな／／／確かにありますけど、大胆ですう／／／（性的な意味で）」

…なにをどう勘違いし、何を妄想しているのかわからんが、頬をそめて体をクネクネしているレーミ。意味不明。

さて、そろそろ時間だな。

「んじゃレーミ、俺は行くぜ。」

…まだ体をクネクネさせている。とにかく無視して行くか。

白い空間に穴が開く。そこに俺は飛び込んだ。

さあ、外史の管理者、黒崎霊牙の物語が始まるぜ。

転生？先（前書き）

頑張りましたよ。知識皆無が頑張りましたよ。

ふう。凄く心配ですよ。

転生？先

…目が覚める。

ここは…裏路地か？

薄暗く、なんとも今すぐにでも厄介な事になりそうだ。転生は…失敗だったのか？転移ってやつになっちまったのか？しかも転生しかけの。

つまり、今現在には赤子であって、なにも出来ない状態。はいはいも出来るかどうか。

俺はこの世界の事はあまり関わった事がない。転生者の暴走を止めた以来、もう関わっていなかった。町すらも見る事が出来ず、さらに書類で確認する暇すら無かった。ただ一つ、言える事はこの世界…いや、この町はかなりの技術を持っている。それしかわからない。

さて、今の状況をなんとかしなくては、厄介な事に「む？あれは捨て子か？」なってしまった。

今来た奴等は白衣を着ている。

「……………この……………」

「……………6を……………」

「……………やるか。」

なにやら白衣を着た男らは何やら話し合っている。

そいつらの人数は6人。しかも研究者みたいだ。なんだ？俺で謎の生物でも作る気か？

「……ばぶう。（おい。）」

「……………」

無言で抱き抱えられ、何処かへと行こうとしている。連れ去られるのって…嫌だな。気分的に。しかも俺自信、抵抗したいのに出来ないというね。

「ばぶう！！（おい！）」

「……………」

無言。酷い。

さて、と。向こうの世界に今後の事について説明をして貰うか。

俺ら神界にいる奴等は、転生した、または転移した時に向こうとテレパシーみたいに会話出来る。それで、世界を管理している故、今後どうなるかの事を聞き出せたり出来る。が…

《おい！俺だ！霊牙だ！反応しろ！》

《……………》

聞こえない。聞き出せない。どういう事だ？俺自信、この世界の知

識は皆無だ。故に困る。

何故？何故だ？そつだ。俺の氣で…？

俺は格闘技のみでは戦わない。氣という生命力の様なものを使い戦う。故に、氣というものは誰にでも存在する。その氣を放出、身体強化、硬化、さらに治癒にも使える。外史の管理者は全員が人外。氣の量は使っても使っても全然減っているのかすら分からない程度にしか減らず、さらに量が人外的に多い。その中の最強な俺は氣を使うと神にも勝るのだが……。

明らかに氣の量が少ない。人外から人中に格下げみたいな感じた。

どうなってるんだ？いや、まさかな。この外史は…

“もしも外史の管理者がこの世界の住民になったら”の外史…なのか？

—あれから10年後—

すまん。結構とばす。

軽く前までの事を説明しよう。

あの後、俺は何処かの研究所で育てられた。が、育て方が異常だ。頭にほぼ毎日変な機械を着けさせられるわ、そして外出許可が出ないと外に出してくれない。更に外出許可を貰える確率は1割にも満たないだろう。

時々、レベル6だの俺には意味不明な言葉が聞こえる。それについて研究者に問い詰めた。お前には関係ないだので殴られ蹴られの暴行を加えられたりしたが、氣で傷を治癒し、諦めずに聞き続けたらやっと教えてくれた。世の中の事を教えてくれないんだから知りたがるのは当然だろ？その時は5歳だった。5年間なにも知らずにいたんだぜ？俺は。それはともかく、軽く俺がまとめて説明しよう。

ここは学園都市と呼ばれ、人口の約6割…いや8割か？変わらないか。とにかく、人口の半分以上が学生だ。そして、この学園都市は科学の町…だな。簡単にまとめるとな。さらにここでは超能力という、なんか特殊な能力の授業を受けるらしい。魔法学校みたいなものだ。そして、この能力の強さは7段階で分けられているそうだ。その強さをレベルというらしい。

Level 10～Level 16までだ。

Level 10は雑魚。能力がない雑魚らしい。酷い言い方してご免なさい。

Level 11は雑魚と同じ。あまり日常的に活用されるほどのものでもない。スプーンを軽く曲げるくらいだ。

Level 12もほぼ雑魚。あまりLevel 11と変わらないそう。

Level 13はエリートの仲間入り…かな？生活でも活用でき、力もそれなりに強い。

Level 14はエリート。軍で戦力としても活用できるほどの力を持っている。

Level 15はこの学園都市でも10人満たない数しかない。一人で軍と戦える力がある。

そして、この研究者が作りたいのがLevel 16だ。まだ誰も到達した事が無い、絶対強者だ。それを作りたいそう。

そして俺には素質があるらしい。…けど、なんで酷い扱いされているのだろうか。

部屋を与えられたが、ベッドしか置いていない。大抵の時間は超能力を手にし、Level 16を誕生させるための研究だ。

それで今現在に至るが、俺は結果的にLevel 16相当の力は手にした。だが、負ける事はなくても、勝つ事も無理らしい。

能力も意味不明。ただ、あらゆる異能からの攻撃を防ぐ境界らしきものを出せる。負ける事は無いが、勝つ事もない。さらに言つと打ち消す事は不可。あくまで防ぐのみ。

Level 6なのにLevel 10みたいなものだ。まあ攻撃面は氣でカバーできるからいいがな。

「はあ…：どうなんだろう、俺。」

部屋で深い溜め息を出す。ベッドに寝転がる。

つまり、俺は邪魔者。Level 6相当の力はあるても防げるだけで、能力は強力で強さはLevel 10。つまり、お払い箱にされる確率が高い。

考えても仕方ない。寝るか。

そして、俺は目を閉じ、眠った。

奴隷、脱走、保護？（前書き）

原作キャラがついに登場します。キャラ崩壊になっていたらごめんなさい。

奴隷、脱走、保護？

目が覚める。だが寝ている体制がおかしい。立っていた。

そして体を動かそうとしたら、手が動かない。何かに繋がれているみたいだ。…鎖か？

辺りを見回す。ここは…牢獄？牢屋？どっちでも変わらないか。自分の服装にも気付く。

…汚れ、ボロボロな布みたいなもの。ああ、どうやら俺は売られたらしいな。まあこれが俺の人生となっちまうのはあれだが…食い物はくれるんだからいい方なんだよな？けどまさかこんな都会にもこんなところがあつたなんてな。少しくるいが生じたのか？まあ、知られざる裏の生活だな。

「キヤアアアアア！！」

！？

女の悲鳴。働かせるだけならこんな悲鳴は聞こえない筈だ。だとしたら…男は働かせ、女は…

判断は決まったぜ。

鎖に力を込め、鎖ごと抜く。

氣で身体能力を強化し、頑丈に作られているであろう鉄の扉を…

「オラアアア!!」

ぶっ飛ばした。

牢獄から出てみると…

「な、なんだ貴様!!」

ヤンキーみたいな奴らが集って女三人を…ね。

……怒ってもいいかな? どうせならさ、こいつらぶっ飛ばしたいんだけど。

ヤンキーみたいなのはざっと10人か。少ないな。

「へ! なにガキにビビってんだよ!」

一人の男が右手を上げる。すると男の手から火が出ている。

成る程、これが超能力ね。

「死ねえええ!!」

火が俺に向かい、そして当たる。

「は!!! これがLevel 13の力だ!」

が、普通に俺は無傷。能力を発動させ、火を防いだ。

「な!?!」

慢心していたのか？自分の攻撃を軽く防がれ後ずさる男。

「能力者よ。お前は威力だけはいつちよまえだが、自分の力を知らなすぎる。能力は力じゃない。理解する事が大切だと思うんだが…違つか？」

右手に氣を流し、放出させる。

「うわっ！！」

男は吹っ飛ばされ、氣を失う。

「大丈夫だ。手加減はした。さて、残りをかたづけなくてはな？」

「ひい！？」

「や、やめろ！！」

「く、来るな！！！！」

氣で身体能力を強化させ、右手を強く振るう。

突風がおき、ヤンキーらしき奴らは壁に頭をぶつけ、気絶。

さて、

「お前さん方、怪我は無いか？」

「あ、貴方は何者ですか？」

俺と同じ奴隷服を着た女三人の中の一人が聞いてきた。見た目は15歳だが、礼儀正しそうな黒髪の女。

「何者と聞かれては、こう答えるしかないな。化け物と。」

ここで再確認。俺はそれでも10歳です。精神年齢が異常なだけです。

「……。」

一人は先程話した黒髪。

一人はポニーテールにし、若干茶色い髪の子。年齢は黒髪と同年つぽい。

一人は大人びている黒髪で、年齢は17歳くらいだろう。

その子らが全員黙り込む。

化け物までとはいかない……か？だが、俺の力は間違いなく人中だ。人外の一步手前くらいだろうな。

「悪い。化け物は訂正だ。だからそんなに暗い顔するな。」

ニツコリと微笑む。

「……！？／／／」

うん？みんな顔が赤いな。どうしたんだ？

もう一度確認します。霊牙は10歳です。

「い、いや／＼それよりもなんでそんな口調なの？なんか私達の方が年下みたい！」

茶色い髪の子が話す。成る程、自由人か？

「いや、なんとなくだ。とにかくここから出るとしよう。奴隷服はなんか嫌だな。しかもこんな技術が発展していても奴隷服なんてあるんだな。しかも奴隷売買された…のかな？俺。」

あり得るな。用無しだから、ゴミはリサイクルショップに売って金にするかポイされるか。俺は売られたと考えられるな。

「とにかく、雑草（雑魚）だらけだから草むしり（雑魚処理）して道を作らなくちゃだな。」

氣で身体能力強化し、かなりの速さで移動した。

「ぐべえー！！」

「ぐぐぐわー！！」

「ぐほあ！！」

ふう、これで終わりだな。どうやらここはビルの廃墟らしき場所だった。迷惑な奴らを片っ端から片付け、だいたい100はいたであろう奴らはとても動ける状態じゃない状態にして、廃墟を去ろうとした。

つまり、今は出口にいる。が…

「アンチスキルだ！！おとなしく…は？」

兵隊らしき集団が銃を持ち、出ようとした場所から入ってきた。先にさけんだ男は、何がおこったのやらと混乱状態。まあ、そうだろう。中を見ると奴隷服を着た少年、そして俺の周りに邪魔くさくくびているヤンキー集団。

「……君がやったのか？」

恐る恐る兵士の一人が訪ねてきた。だから、満面の笑みで答えてあげた。

「雑草が邪魔して動けなくなっていた女達がいたから、俺が雑草を処分して道をつくってあげただけさ」

「……………（ポカーン）」

そうなるだろうな。

「それじゃ、俺はこれにて失礼させてもらおうかな。」

「ああ、おい！君！！止まれ！」

だが断る！！

身体能力強化でダッシュし、その場を速やかに去った。

まだ外は昼頃だった。

「…どうしようか。」

辺りは暗くなり、もう夜だ。

俺は好奇心で常時ハイスピードで学園都市中を走り回った。だが、流石に疲れる。氣を使うと、本来使う筈の体力の2倍以上疲れる。更に氣の使いすぎにより空腹でさらに眠氣が凄いことになっている。

ふらふらとした足でとあるかなり古いアパートの前で倒れる。

ああ、俺は死ぬのか。任務失敗の報告書、どうやって提出しようか。きっと上司（最高神）に怒られるな。

そんなことを思っていたら、誰かが来た。と思ったら俺より…年下

の女の子、ピンクの髪の子がやってきた。

「だ、大丈夫ですか！？は、早く病院に！」

病院だけは駄目だ！俺は空腹と眠気で倒れているだけだから！

恥ずかしい思いは嫌だと、力を振り絞り声を出す。

「は…腹…減った…。」

「……は？」

少女はポカーンとした顔で俺を見る。

「腹…減った…。」

「あわわわ！？わ、分かりましたから、取り敢えず家に！！！」

そして少女に肩を貸してもらい、アパートに入っていた。

小萌（前書き）

主人公の性格、早くも変わるかもしれません。そして原作キャラ崩壊の可能性あります。ごめんなさい。いや、本当に申し訳ないです。現在進行形で勉強中です。

小萌

「ふう…有り難い。助かったよ。」

俺はピンクの髪の少女に拾われた…のかな？うん、拾われた。

しかし、中に入るとビールの空き缶だらけであった。…ふむ、この世界はアルコールは未成年でも可能なのか。不思議な世界だ。

「しかし良かったのか？貴女が買ってきた物なのに俺が貰って大丈夫だったのか？」

少女は俺の質問に笑顔で答える。

「いえ。別に平気ですよ。困っている人がいたら助けるのが普通です。」

良い笑顔をするな。

そして、俺はこの後神界にも響くであろう叫び声を出す事になる。

「ところで、貴方は何処に就職しているのですか？私は高校の教師をしています。」

…え？今、なんと？

「すまない。一度確認をする。貴女は…高校の教師を勤めている…のか？」

「?はい、そうですね?」

「……………ええええええええ!!?!?!?!?」

「もう、ビックリしちゃいましたよ。いきなり叫び声を出さない
てくださいよお。」

「す、すまない。まさか成人しているとは…。俺はまだ成人して
ない。更に言うと俺はまだ10歳だ。」

「……………ふえ?一度確認しますが…貴方はまだ小学生のですか
?」

「…?そつだが…正確には小学生ではない。通っていないだけだ。」

「……………ふええええええ!!?!?!?!?」

俺と少女？が互いに神界に届くであろうぐらいの叫び声をあげてからしばらく時間がたった。

「しかし、高校の教師と。驚きだな。」

「いえ、貴方こそ私と同類かと……い、今は無しです！気にしないでください！」

ふむ、どうやらこの少女？は身長等が小さい事がコンプレックスのようだ。

「さて、随分遅くなったが自己紹介だ。俺は黒崎霊牙だ。」

「はい。私は小萌。月詠小萌です。」

…身長等が小さいのは名前の影響ではないのか？

だが、いい機会だな。教師になるとどのような世界か聞きだせる。

「すまないが、この世界……いや、この都市の事を教えてくれないか？俺は育った場所が研究所らしき場所だな。」

「研究所……はい。わかりました。」

研究所というキーワードから何か暗い事でもあるのか、研究所という単語を発した瞬間小萌さんが暗くなる。

「では、まずはこの都市は学園都市と呼ばれ……」

学園都市の事は知っているから問題は無いため、聞いたふりをして
いた。止めるのもなんか悪い気がしたからな。ただ、学生は約8割
だったそうだ。

「次は超能力についてです。」

「すまない、小萌さん。超能力については知っている。確認だけと
りたい。」

「はい。わかりました。あとさんを付けて呼ぶのはやめてください。
小萌と呼んでください。」

「ですがかし……小萌でお願いします。」……わかった。小萌。なら
俺は霊牙だ。霊牙と呼べ。」

「はい。霊牙さん。」

……霊牙と呼べと言ったのに。

「ではまずは軽く、Levelの事だ。Levelは0～6までで
いいのだよな？」

これは基本だろう。だが、その基本も間違えていた。

「？ いえ、Levelは0～5までしかありませんよ？」

その言葉に俺はびっくりした。だが思い返してみるとまだ誰一人と
も到達した事がないLevelだった。

「では、無能力者とはいったいなんの事だ？」

「はい。無能力者というのはLevel10の人の事を言います。Level1は低能力者、Level2は異能力者、Level3は強能力者、Level4は大能力者、Level5は超能力者と言います。」

ふむ…ではLevel6はなんと言っただろうか。それは後にするか。あとは日常的なものでも聞か。

「では、次はアンチスキルとはいったいなんだ？」

そつだ。一番気になるのがアンチスキルとやらだ。兵隊のようだったが…能力者の住む町だから兵隊が武装し、町を歩いても異常はないと思うが…。

「アンチスキルとは警備員の事です。」

…警察の事か？警察であんな武装はするか？

「ふむ…それぐらいだろうな。感謝する。」

それぐらいだろう。あとはどうにかなるしな。

「それでは、次は私から質問しますよ？小学校に通っていないのにどうして研究所が分かったのですか？私の聞く限りでは育ちが研究所ですよ？なのに何故知識があるのですか？」

…これはまずい。正直にまずいと思った。想像以上に頭の回転が早い。

「い、いや何でもないぞ。研究所で知識を得ただけだ。」

なんとも苦しい。これは絶対疑われるな。

「…そうなんですか。わかりました。」

…なんとか納得したのか、問い詰められなかった。有り難いがな。

「では霊牙さんはこれからどうするのですか？」

…そうだ。それが問題だ。年齢が年齢故、アルバイトして稼げず、さらに寝る場所が路上になる…かも。

なら、取るべき行動は一つしかない。

土下座をし、小萌に頼みこむ。

「すまない！頼む！居候させてくれ！稼ぎは出来ないが家事は俺が引き受けるから！頼む！」

家事を引き受ける。これは相当な覚悟が必要とされる。現に煙草の吸い殻、缶ビールの空き缶、山の様な弁当のゴミがある。見れば家事が苦手と判断できる。

「そ、そんな頭をあげてくたしやい！わかりましたから！」

…気のせいだろうか。一瞬小萌が女神に見えた。

「あ、有り難う！！小萌！！！」

「ひゃあああああ!？」

…つい嬉しくなって抱きついてしまった。は、恥ずかしい。

暫くして互いにまた向き合う。

「では、小萌。これから宜しくな。」

ニコリと微笑み、挨拶をする。

「……（ポ／／／）」

ん？どうしたんだ？顔を赤くして。

「!？（そ、そうです！相手は10歳ですよ！年下ですよ！成人してない相手です！けど…／／／いや！なに考えているのでしょうか！）」

…ブツブツと何かを言っている。怖いぞ。小萌。

「して、返事は？」

「は、はい…宜しく願いします／＼」

…何を想像してるのか分からんが、とにかく俺は小萌の家に居候が
決まった。

風紀委員（前書き）

サブタイトルは無視してください。かなり無関係です。ごめんなさい。

風紀委員

あれから5年が経過した。

すまない。またとばすが、受験勉強の真っ最中。

なんかかんやでどう入れたかは知らないが、中学校は柵川中学校というところに入學。んで高校は小萌のいる学校に入學する予定だ。

理由は…

〈回想〉

「ふむ…小萌、受験勉強の時期に入ったんだが…何処の高校に入ろうか迷っているな。」

「でしたら、私が教師をしている高校にしてください!」

「え?それは…流石にまずいのでは?」

「大丈夫です!靈牙ちゃんみたいに成績優秀な子欲しかったのですよ!」

「…いや、無理だ。」

「…入ってくれたらノノ私が良い事」断固拒否。「…うわ~~~~ん!!!!!!」

「わ、わかった！わかったから泣くな！！」

〈回想終了〉

というわけだ。ほぼ無理矢理だ。あと何故か俺はちゃんをつけて呼ばれるようになった。

「しかし、成績優秀は嘘だろ？俺は一応低能力者だし。」

小萌は溜め息を吐きながら、俺の問いに答える。

「はあ、それは霊牙ちゃん的能力がいけないのですよ。超能力から守るなにかを出していることは確かですが、能力名は不明、不明な部分が有りすぎて検査出来ないからですよ。けど能力を使っている事は確か、だから霊牙ちゃんは取り敢えず低能力者にしときましようという事になったのですよ。」

説明どうも、小萌。

まあ俺には氣があるから超能力者にも負けない自信がある。あと自分でも薄々気づいたのだが、防ぐから打ち消すに能力が上がりそうなんだ。

あとたまにアンチスキルに入らないかと誘われる。まあそうだろうな。身体能力がこの世界では異常らしいからな。

あとずつつつと気になっているんだが…

「なあ小萌、どうしてさっきから俺の背中に張り付いているんだ？」

「張り付いていないです！抱きついてるんです！」

いや、俺にとっては同じ意味だが。

「勉強出来ないぞ。」

「出来てるじゃないですか。はあ…たくましい背中ですう／＼／」

…わかった。わかった。この際だ。今までおこった事を話そう。

く回想その1く

…ふむ。やはり一日の疲れを癒すは風呂に限る。日本人の基本なり。

湯に浸かっている時、扉越しから音が聞こえるが…なんなんだ？

ガラッ

！？！？

「れ、霊牙ちゃん…お背中お流しますう／＼／」

タオル一枚巻いた小萌が入ってきた。そして結構だから今すぐ出ていけ。

く回想その2く

「……………ん!!」

朝が来たな。さて、今日も学生を演じなくてはならないか。気だるいな。

ん？腰辺りに違和感を感じる。…誰かに抱きつかれているような。

恐る恐る掛け布団を…どかしてみると…

「すう……………すう……………」

いや、なんでさ？小萌えがパジャマをきて俺の腰にくっついて寝てるって、なに冷静沈着に事を説明しているのだ？

「ん…ん？」

声が聞こえる。起きたのか？

「ん…おはふぁ!？」

小萌が俺を抱き枕？にしているのに気づき、顔を真っ赤に染める。

「!?!?!? / / /」

「はぁ…。」

〈回想終了〉

あの時はかなり困った。そして現在進行形で受験勉強をしている俺の背中に張り付く小萌。

あああああああ！！やってられねえ！！！

「うひゃああ！？高いですううう！」

「じゃあ降りろ。少し外に出たいのだが」「一緒にします！」「…お、おう。」

町を小萌と二人で歩く。まあ、あれだ。妹みたいだな。あの拾われた時はそれほど差はなかった身長が今では差があり、俺は確か175cmだ。そしてジェットコースターをお断りされる身長の小萌。妹みたいだ。

「キヤアアア!！」

…煩わしい。裏路地から女の悲鳴が聞こえた。行くしかないだろうな。

「小萌。少し寄り道してくるから待っててくれ。」

「ふえ!?!ちよっ!?!霊牙ちゃん!?!」

…ちゃんと呼ぶのはやめて欲しいが、今は厄介事を片付けるか。

く???sideく

「へへへ…手こずらせやがって…。」

男の人達に追い付かれた。

「へへ…さあ、こんなに手こずらせたんだ…良い声で泣いてくれよ。」

「お前口リかよ!ゲツハハハ!！」

「いいじゃねえかよ!別に!」

誰か助けて…怖いよあ…。

「キモいんだよ屑。」

「あゝあゝ！？」

すると今度は助けにきてくれたであろう男の人。中学3年生くらいで、多勢に無勢なのに何故かこの人を見ると安心する。絶対、守ってくれるだろうって。

（靈牙side）

裏路地に行ってみるとゴミが10程、頭が花畑の子…なんというか、花がいつばいなんだよ。本当に。しかし、見た目小学生の子に…ね、ゴミだな。

「ガキイ！！あっち行つてろ！」

「お前らの思考回路の方がガキだろ。」

「てめえ！！！」

「違うか？そうか。悪かった。猪以下だった。悪い悪い。」

「てめえ！！もう許さねえ！！殺す！！！」

そして一人の男は火を出す。ここらは火の超能力が多いのか？

火が俺に当たる。

「あつけねえな！！雑魚が！！」

「そ…そんな…！！」

少女の絶望の声が聞こえる。だが、こんなんで絶望されちゃ困る。

「な、なに！？」

平然と立っている俺。

さて…

「“殺す”という言葉…それは“殺される”覚悟がある奴のみ使っている言葉だ。」

右手に氣を込める。久々の戦闘だ。手加減を忘れたなあ。

「悪い。手加減忘れた。骨の10本は覚悟しろよ？出来てないならお疲れ様。」

氣を放出する。

氣弾がヤンキーどもに放ち、少女は氣で身体強化し、一気に駆け少女を抱き、速い速度で氣弾がヤンキーにあたる前に助けた。

その後、ヤンキーどもは全員骨が10本以上折れた。それだけでずんで何よりだ。消滅が一番最悪の例だからな。

「あ！霊牙……ちゃん。」

「小萌。すまない。またせた。」

少女を抱き上げて……お姫さまだっことやらか？それをやりながら小萌の元に戻った。

「……／／／／／」

「なななななにやってるんでしゅか……！」

??

なにか問題でもあったのか？

「いや、雑草に囲まれていた少女のために草をむしっただけだが？」

「そういう事じゃないでしゅ……！」

小萌が若干怒っているが、取り敢えず無視し、少女をおろす。

「怪我はないか？」

「は、はい……／／／」

…俯いてしまった。何故？

「ちょっと！聞いているのですか！」

「ああ。んじゃ取り敢えず名前を聞きたいんだが？」

小萌を超スルーし、少女に名前を聞く。

「は、はい！！私は初春飾利といいましゅ！あう／＼／」

…小萌と同じオーラが感じられるが…気のせいか？

「ふむ…黒崎靈牙。俺の名だ。」

「はい！宜しくお願いします！黒崎さん！／＼／」

先ほどから初春とやらの頬が赤いんだが…何故だ？

「黒崎さん。黒崎さんってLevelはいくつですか？」

「そこらの雑魚と同じ、低能力者だ。」

「へ？でもでも、さっきのあれは超能力ですよね？」

「いや、違う。あれは超能力ではない。寧ろ異能そのものではない。

」

「へ？？？」

かなり驚いている初春。そうだろうな。俺の予測だところは科学と超能力に頼りすぎている。氣といふかなり難易度が高い武術は習得している筈がないからな。

「靈牙ちゃんの超能力については私が説明します!」

小萌が割り込み、説明を始める。

説明の内容は受験勉強中に話した事と同じだから割愛させてもらう。

「——というわけで、靈牙ちゃんは低能力者となっているのです。」

「ふえ…不思議な超能力ですねえ。」

小萌の長い説明が終わり、再び初春は俺に向く。

「黒崎さん。黒崎さんってジャッジメントに入っているのですか?」

「…ジャッジメント?なんだそれは?」

ジャッジメント…聞き慣れぬ言葉に俺は小萌に聞く。

「ジャッジメントとは、風紀委員の事ですよ。」

…風紀委員。学校の委員会かなんか?

「アンチスキルとやらと同じみたいなのと理解していいか?」

「はい。まあ本当に大体で言えばそうなりますよ。霊牙ちゃん。」

ふむ…そう記憶しておこう。

「ち、ちょっと待ってください！さっきからこの子は黒崎さんの事を…」

「ん？ああ、ちゃんをつけて呼んでいる理由か？簡単だ。俺より年上だしそういう言い方でも仕方がないではないのか？」

「……ふええええ！？」

…小萌と同じ驚き方だな。意外と同じ性格なのか？いや、有り得ないな。いや、もしかしたら…あああ！！どうでもいいな。

「さて、と。小萌。行くか。」

「はい。霊牙ちゃん！／＼／＼」

小萌は手を…というより両手で俺の指を掴み、歩き始めた。が…

「ま、待ってくださいよお！結局あれはなんだったんですか？」

あれ？ああ。氣の事か。

「あれは氣と言って、超能力ではない。氣というのは生命力みたいなもので、放出、強化、治癒と使える。氣というのは誰にでもある。小萌にも…そして君にも。」

「ふえ！？わ、私にもですか！？」

初春は驚きながら俺に聞く。

「ああ。だが氣を操るのは多分ここでは超能力を習得するより難しい。ここは技術に頼りすぎている。故に超能力を習得した方が早い。あと氣は生命力。使いすぎると死ぬ。」

「え!!?」

小萌と初春との声が重なる。まあそうだろうな。

「ど、どうしてそんな危険な技を出すんですか!?!死んじゃうのですよね!?!」

「わ、私…は…」

小萌は半分説教、半分心配で声をかけ、初春は自分はなんてことをしたんだと絶望したかのような顔をしている。

「心配するな。逆に氣を取り入れることは簡単。食い、寝る。以上だ。あの時、小萌の家の目の前で倒れていた理由は空腹と眠氣。氣が少なくなると、かなりの空腹と眠氣に襲われる。まあ寝れば元にもどるし、なにも心配はいらん。」

「よ、よかった。」

二人し、安心したのか同じ台詞を同じ感じで言う。

「それでは、行くか。さらばだ。初春。」

「待ってください!」

本日三回目の待ってくださいをどうも。再び足を止める。

「わ、私の事は…飾利と呼んで…くれませんか? / / /」

ふむ? そんな事なのか?

「ああ。わかった飾利。ではこちらは霊牙と呼んでくれ。」

「はい…れ、霊牙…さん / / /」

??

何故そこまで名を言う事に苦戦するんだ? 姓は呼べるのに?

「むう……………」

そして小萌が不機嫌になる。何故だ? 俺の何がいけない?

そして小萌と飾利の視線が合う。…火花をちらしているのは何故だ! 二人から…俺をも凌駕する覇気と闘気が!!

「(貴女も霊牙さんの事を…)」

「(霊牙ちゃんは渡しません!!)」

…帰ろう。もう帰ろう。

「待ってください!」

本日四回目だ。流石に鬱陶しいと感じてきたぞ。

「なんだ？」

「あの…メアド…交換して貰えますか？／／／」

！！？

なんだと！？携帯電話を小学生が持つとは！！因みに俺のは小萌が携帯電話を買ってくれた。高校生になったらアルバイトで稼ぎ、返すという条件で。小萌…有り難う。

心の中で小萌に感謝の言葉を連呼しながらメアドを交換した。しかし有り難い。本当に。居候の俺に返すとはいえ買ってくれるなんてな。

余談だが、帰った後に小萌に我が儘をぶつけられた。例えば膝枕しろだのアーンさせるだの風呂一緒に入れだの一緒に寝ろだの私の物になれだの…俺危ない事言われてる？

そしてさらに余談。俺は超能力系以外ならば100点はとれるが、超能力は10点満たない点数しかとれない。故に、いつも超能力の勉強をしている。

高校に入学（前書き）

これが風紀委員というサブタイトルになるかもしれませんが、このところはつまらないでくれると嬉しいです。そしてキャラを完全に理解していないので、キャラ崩壊になったらごめんなさい。では、どうぞ。

高校に入学

皆にいい知らせがある。いや、俺だけだな。実際は。

なんと俺は無事に高校に入学できた。レベルが低い学校らしいが、どうでもいい。さらにいい知らせを言うと超能力が進化した。防ぐから打ち消すに変化した。

打ち消すになるとかなり強い。相手の超能力を無効にし、身体強化的な超能力はそれを無効にし、打撃を与えられても氣の硬化、体を硬くし、相手の攻撃を防ぎ、そのうえ氣を放出。うん、これで余裕だな。

あと、プラスもあればマイナスもある。俺のクラスの担任が…

「はい」。皆席につきやがってください。このクラスを担当する月詠小萌と申します。」

小萌だった…。今日は入学式が終了後、クラスで軽く自己紹介。それで帰宅。小萌に後で残れをくらっているから帰れない。

「はあゝ……（不運）（不幸）だ…ん？」

俺は窓の席で一番後ろ。その隣のツンツン頭をし、冴えない顔をした奴と重なった。…他人に思えないな。

「…もしかして、お前さんも今日は不運な事があったのか？」

一応聞く。

「はあ…上条サンはいつも不幸ですよ。」

な、なんだこいつ。凄く仲良くなれそう。

「俺は黒崎霊牙だ。これから宜しく頼む。」

そして手を差し出す。

「ああ。なんかお前とは仲良くなれそうだな。俺は上条当麻。宜しく。」

握手を交わす。我、最高の友を得たり！

小萌は先生の子供と思われるのか、一向に静かにならない。

「ところでさ、あれって担任の先生の子供？」

そして俺は小萌の助力も含め、皆に聞こえるようにはなした。

「ああ。先程言っていた通りあれが先生だ。」

「「「「「はあああああああ！！！？」」「」「」「」

予想外のくいつきぶりだ。

「皆さん。早く席につきやがってください。霊牙ちゃん。有り難うございます。」

「「「「「なにiiiiiiiiiiii！！？」」「」「」「」

「はい。土御門ちゃん。宜しく願いしますう。では最後に霊牙ちゃん。お願いします。」

「いや小萌、お前が俺の名前を教えてどうするんだ？まあ、いいがな。」

そして席を立ち、皆の注目を浴びる。嫌な感じだな。

「…姓は黒崎、名は霊牙だ。」

「……！！？／／／」

ふむ？女子どもが全員顔赤くしているのは気のせいか？あと小萌もその中にまじっていた。もう少し緩く友達の話した方がいいのか？前みたいに話すか。なんか固い言い方が馴染んでしまつてな。

「……ゴホンツー！…さて……皆！俺は黒崎霊牙というんだ。宜しく頼むＺＥ」

ニコリと微笑みながら言う。ふむ…キャラが合っていないのかな？

「………。」

全員無言。ああ、失敗したかな？

「……ブウウー／／／」

な、なに！？いったいなにがおこった！女全員鼻血を出しただと！
！？どういう事だ！

「なあ！俺は何かしたのか！？」

流石にこれはあわてるよな。当麻に聞く。

「お前…鈍感だろ？」

「ん？鈍感？聞きなれぬ言葉だが？」

「はあ…お前のせいだ。そして……不幸だ。」

…鼻血が当麻にかかり、血だらけの当麻がここにあった。すまない、
当麻。なんだかわからんが、すまない。

「…黒ヤン病だニヤ」。

以後、鈍感な黒ヤン病と名付けられた。しかし鈍感とはなんだ？そ
して俺は何故か黒ヤンって言われるようになった。あだ名、これは
あまり好きになれんな。

そして一通り自己紹介が終わり、さて帰宅…ではなく、小萌を待た
なくてはな。そして校門前で待っているのだが…

「ねえねえ！黒崎君！好きな女の子とかいる？」

「へえ…？あれが黒崎君かあ。」

「あわわわ／＼／」

「はわわわ／＼／」

…なんか囲まれている。嫌だな、これ。

「すまないが、退いてくれないか？」

「「「……………。／／／」」」

うゝ！？

涙目になりながら上目遣いだと！？しかも全員！いや…女子を泣かすのって…嫌だしな。ちい…ならば俺から逃げればいいのでは？だが、前は無理。後ろは壁。左右も無理。…ならば決まったな。氣で身体能力強化。前後左右しか逃げ道がないと思ったら…

「大間違いだ！！」

氣でジャンプをし、そのまま女子どもを飛び越え、町に逃げた。あ、小萌にメールしとかなくてはな。

逃げ切れた。が、厄介な事になった。ジャンプで落ちた場所が裏路地でね。ヤンキー集団のど真ん中に落ちたわけだ。

「な、なんだお前は!!」

5人程…雑魚だな。

「おい!てめえ「煩わしい。」はあ!?てグハッ!!?」

氣で身体能力強化。全員に首に手刀をくらし、全員氣絶。ふむ…やはり能力に頼りすぎだな。

さて、小萌もいるしな。学校に戻るか。

後ろを向き、その場を立ち去ろうと思ったらまた厄介事だ。

「ジャツジメントです………の?」

中学生らしき、ツインテールをして、学生服を着ている少女がいた。

「……??」

わけがわからん。関わりたくない故、速やかに立ち去るとするか。

「お待ちになってくださいまし。」

ふむ?お嬢様口調か?あまりそういう奴は好まんのだな。

無視し、そのまま進もうとしたら…

「何処へ行こうというのです？ “待て” と言ってますの。」

む…少し力チンときたな。

「…俺になにか用か？ 用がないのなら去るが。」

「用がないのに話しかけたりはしませんの。」

「ふむ…ではなんだ？」

「すこし同行ねがいますか？」

…なんだ？ こいつ。何か尋問でもするのか？

「尋問か？ ならここで話す。それらは俺がやった。周りに被害がでない。さらにあいつらから襲ってきた。所謂正当防衛というやつだ。」

正当防衛だ。俺は勝手にやってない。嘘じゃないよ？ 戦う前からあいつらは殺気出してたし。

「そうですの。ですがすこし同行していただけませんか？」

闘気が感じられる。ふむ。やるきなのか？ 哀れな。

「嫌だと言ったら？」

すると少女はどう移動したのか、目の前に少女が現れた。

「でしたら、無理矢理でも連れていきますわよ？」

…暫く互いに睨み合う。

「……!？」

ふむ？少女は超能力でもかけようとして失敗したのか、かなり驚いた表情をしている。

「ふむ…超能力が何故効かないか知りたいのか？」

「!？」

凶星か。なら返すのはこれだな。

「それが俺の能力だ。^{ちから}以上だ。そして俺の勝ちだな。」

「!?!?あら、勝負は始まってもしませんのに勝敗がわかんと言っているのですか？」

いや、分かるのではない。

「決まっているんだよ。」

氣で身体能力を強化。かなりの速さで近づき、肩を掴む。

「!？」

「無駄だ。ここからは俺の領域だ。お前の負けだ。」

そして少女の頭を撫でてやる。

「……………／／／」

???

何故顔を赤くするのだ？間違った事でもしたというのか？

「い、いや…それよりなんだったのです？先程の速い動き、いたいどうやったのですの？」

…この世界、やはり超能力に頼りすぎではないのか？

「俺が使ったのは氣というもので……………」

……………（説明中）……………

……………というわけだ。」

いつも氣について一から説明しなくてはいけないから困る。

「…すみませんが、ジャッジメントに入りませんか？」

…ふむ。ジャッジメントとやらにか。だが俺はそんなものに入る気はない。だがこいつは少々しつこいかもしれんな。ならば…保留とすることにするか。

「保留にしておく。考える時間をくれ。」

「わかりましたわ。いい返事を期待してますわよ。」

…やはりこいつは俺を入れたいのか。

「ああ、そうだ。忘れていた。黒崎霊牙。俺の名だ。」

「……！？貴方が初春の言っていた黒崎霊牙さんですよ！？」

初春？ああ、飾利の事か。あいつとは名前しか呼んでいないからな。初春なんて言われて度忘れしていた。誰だと思ったら飾利の姓か。

「わたくし私は白井黒子と申しますの。」

「ああ。」

さてと。小萌を迎えに行くか。

氣で身体能力を強化し、一気に町を駆け高校に向かった。

小萌を迎えに行き、そのまま家に帰ったのだが…

「……………プハハハ！」

小萌が大量のビールを飲みだした。なんといつても俺の入学祝いだそうだが、これってあれだよな？俺本当に祝われてるのか？

「うつゝゝ今日は無礼講なのれすよゝゝ。」

呂律が危ない小萌。はあ、ビールの空き缶が…何処で寝ればいいんだ？しかも無礼講って…。

「あれれゝ？霊牙ちゃん飲んれまへんねゝ？わたひがのまへてあげまふねゝ？」

そして小萌はこんどはワインを口に含み、そして俺に近づいてくる…まさか？口移しじゃないよね？未成年だししかも口移し？

「んんゝゝんんんんゝゝ（さゝあ飲んでくださいゝゝ）」

「んぎやああああ！！」

レミ再臨？（前書き）

むう。展開が…とにかくご覧下さい。

レーミ再臨？

「はぁ…気だるい。」

俺、黒崎靈牙は昨日の小萌の暴走のお陰で寝不足だ。睡眠不足は天敵だな。気だるい。

学校に行くのもふらふらとした足取り。学校につくと良くわからんが追い回される。

現在教室で自分の席でこれでもないかといつくらいにだるそうにしている。俺でもそんな感じがするからな。

「黒ヤンどないしたんや〜？夜をロリ先生と共にできるんやで〜？」

青髪ピアスが話しかけてきた。今話しかけるな。変態。

「青髪変態全身精液ドロドロまみれゴミ屑チ。コ野郎。話しかけないでくれ。今凄く疲れてる。」

なんか青髪から凄い泣き声が聞こえるが、ここは華麗にスルーをする。…ツツコミいれるなよ？面白くないのは承知だ。ただ頭がおかしくなっているだけだ。

来る途中に自動販売機で買ったペットボトルの天然水を飲む。

はぁ、やはりこの世界はおかしい。黒豆サイダーとかあったが、絶対不味いだろ。あとイチゴおでんとかあったな。トマトなら許せるが、イチゴは無い。何故コーラみたいなのは滅多に売ってないんだ

？あと普通の炭酸水。あれで一般的なかき氷のメロンシロップでメロンソーダを作ろうと思ったが、炭酸水が何故売っていない？二酸化炭素を水に溶かせば完成なの？

「よお。霊牙。」

今度は隣の当麻が来た。

「ああ。当麻か。そうだ。当麻、この黒豆サイダーいるか？」

そしてバッグをあさり、その中から朝、天然水を買った自動販売機についているスロットに当たり、もう一回天然水のボタンを押したら何故か出てきた黒豆サイダーだ。ペットボトルのな。

「有り難うな霊牙！！上条サンもたまには良いことがあるんだな！」

喜んで受け取り、蓋を開け、黒豆サイダーを飲んだ当麻。

「……。」

当麻がなにやらおかしいような顔をしているが、どうしたんだ？

「なあ当麻、どうしたんだ？」

すると当麻はかなり真剣な顔で話す。

「いや、おかしいんだ。必ず俺はこういう幸せが来ても必ず不幸がおとずれるんだけど……来ないんだよ。」
「はあ？何言ってるんだ？」

「あのな、人生不幸もあれば幸運もある。何故不幸しかないと言いきれる？」

すると当麻は一時悩んだが、笑顔が戻ってきた。

「ああ。ごめんな。」

…ふむ。もしかするとこいつが本来の物語の主人公だったりしてないや、違うか。まさかな。

「ホームルームを始めますよ。席についてください。」

小萌登場。何故二日酔いしない。

「今日は転入生を紹介します。」

ふむ？おかしい。この時期に転校生と？あり得ない。ならば高校の入試試験でここを受ければよかったのではないのか？意味不明な行動… maybe… 転生者！！

右手に氣を込める。

入り、あまりにも異常かつ神に貰った異能ならば消すためだ。

そして、入ってきたのは…

「あ、はい。私は黒崎^{くろさき}霊美^{れいみ}と申しま…あ！！霊牙さん…じゃなくて霊牙兄様！」

…いや。何故俺の姓を使う？そして現れたのは…

あの新人神のレーミだった。ただレーミの体つきが…大人だ。

黒髪ストレート、体は大人でも顔はまだ幼さが残った顔。

いや、それよりも…

「レーミは転生してきたのか？」

「大馬鹿野郎！！」

レーミは俺のさらに後ろの席となった。昼休み、屋上にレーミをつれ、発した一言がこれだ。

「レーミ！お前は神だ…何故転生などした！お前がこの世界にきたら…外史が崩壊するのだぞ！」

人がいない屋上にてレーミに怒鳴る俺。だが、レーミからは信じられない言葉が出た。

「私…神やめました。そして外史の管理者になりました。」

…これは凄く驚いた。レーミは神をやめたそうだ。だが…そうなたら力はどうなってしまふのだろうか。まさか、失うのか？

「…神の力はどうなるのだ？」

「管理者になつた事で力を無くしました。ですが、完全に力をなくすことは出来なかったのです。」

成る程。だがレーミが力を無くしてまで俺に会いにきた理由がわからない。

「…私は温度を操る力しか残っていません。ですが、そのおかげで転生する事が出来ました。ですが…やはり残っていた能力のせいでこの世界は少しですが、世界に影響が出ました。」

…崩壊はしないのだな？それは。なら問題はない。ただの傷ならば癒せばいい。

「正史でのこの世界の主人公、上条当麻の不幸体質が無くなりしました。」

…ふむ？なんだそれは？上条当麻は本当に常に不幸だったのか？

「この世界は…やはり上条当麻が主人公だったのか？だがそれならそれで、その当麻の不幸体質が無くなった事は良い事ではないのか？」

「それが問題なのです。」

レーミが真剣に話す。が、ちょっと待て。説明はいいのだが、それ

をおこした犯人はお前じゃないのか？

「上条当麻、それは不幸体質のせいで物語が進んだようなものなのです。不幸なので数多くの事件に巻き込まれ、それを解決する。その不幸が無くなる。それは主人公の役割を一切機能しない物語になりました。さらにこの外史は霊牙さんが主人公。ですが、主人公完全消失により霊牙さんが主人公の正史に近い外史が誕生してしまったのです。」

…いまいち理解しがたい。転生できるのは管理者のみ。そしてレーミが転生。レーミがこの物語の補佐となり、俺は主人公。もしもではなくなった。つまり…

「俺は管理者でなくなった、と？俺はこの世界で生き続けなくてはならないのか？」

「はい。」

…ちょっとまとめようか。

「つまりお前がなんだか知らないが転生したせいで外史が正史に近い外史となって俺は完全なる主人公になった…と？」

まてまて。考えれば考えるほどレーミが悪くないか？

「ごめんなさい！私のせいですう！！霊牙さんに会いたいばかりにしてしまいましたああ！！」

はあ…俺に会いたいから神をやめ、管理者になった次には無理矢理転生。そして外史を壊し…

「はあ、わかった。もう怒るのも疲れた。管理者ではないしな。」
もう諦めた。

簡単にせつめいしよう。

俺転生↓レーミが俺に会いたがる↓故に神やめる↓管理者になる↓
無理矢理転生↓無理矢理転生により正史に近い外史に↓俺完全主人
公↓俺が立ち去ると外史崩壊

説明不足だったらすまない。

つまり、この世界で俺は重要な存在となった。俺という存在がここ
からいなくなると外史が崩壊する。つまりこの世界のもしもの住民
ではなく、本当に外史の住民になれという事だ。

「はあ…わかった。今日からレーミは霊美だ。俺の妹という設定で。」

「義理でいいですか？姓は同じですけど。」

ふむ？何故義理という設定にするのだ？

「この世界のヒロインになれないじゃないですか！／／／」

…反省の色が無いのか？しかもヒロインってな…。

「お前…いい加減にしろ！」

「いやゝしかし黒ヤンに妹がいたなんてな？目茶苦茶「霊美、こいつの事どう思う？」「話さなくてもわかります。変態です。」うぎやあああ！！」

教室に戻ると変態から質問攻め。土御門はショック死した。

霊美は可愛い方だ。だが性格があれだと思われるから男子があまり近寄らない。そのあれとは…

「私が心を許しているのは霊牙兄様だけですう／＼／」

「お前も充分変態だ。離れろ。」

俺に抱きついてくる。

周囲からは霊美はかなりのブラコンだと思われる。

「そつえば霊美は何処で住んでいるんだ？」

まだ抱きついている霊美に質問。そして離れる霊美。

「私はアパートで一人暮らししてます。」

…ふむ。金はどうしているのかは知らないが、心配する程じゃないだろうな。

「ふむ。心配いらないな。そして離れる。」

「はい。心配無用です。そして嫌です。」

ブラコン故誰も近寄らない。プラスでもあればマイナスでもある。誰も寄ってこないのはいいのだが、俺まで変態扱いを受けるかもしれない。

「黒ヤンもシスコンやな。」

「黙れ。青髪変態全身精液ドロドロだらけのロリコン常時妄想神屑チ。コピアス野郎。」

青髪ピアスは死んだ。死因は不明。

「霊牙…毒舌だったんだな…。」

当麻がまさかの真実を知ったかのように驚く。失敬な。誰が毒舌だ。ただ思った事をそのまま口に出したただけだ。そして霊美。いい加減にどけ。

「霊美。どけ。」

「嫌です。」

「どけ。」

「嫌です。」

「どいてください。」

「断固拒否です。」

ちい…これを使うか。

「なんでも言う事聞くから。」

「わかりました!」

ふう。やっとどいてくれた。

「やっぱり変態やな〜黒ヤン。」

「暫く黙っててくれると嬉しいな。」

満面の笑みで右手を青髪ピアスの顔面に向け、氣を右手にこめ、これでもかという程の殺氣と霸氣をぶつける。

「わわわわ!! 駄目ですよ! 靈牙さん…じゃなくて靈牙兄様! 貴方が本氣を出したら学校が崩壊しますよ!」

「大丈夫だ靈美。変態しか狙ってないからな。」

あおがみ

「では問題ないですね♪」

「なんだこの二人は！」

当麻がツツコミをいれるが華麗にスルー。

「お、落ち着いてえな。黒ヤン…」

冷や汗が凄^{ひど}い青髪。流石のあいづでもこれはやばいと思つたのか？
そうだろ？

「上ヤン！」

「え…えええええ！！？！！？！！？」

当麻を盾に使う気なのか、当麻を無理矢理つれてきて前につきだされた。

「ほお？当麻も邪魔をする気か？安心しろ。手加減はする。」

そして氣彈を放出。

「上ヤン！頼むで！千円おごるから！」

「上等だ！靈牙！その幻想をぶち殺す！！」

やけくそになつた当麻。哀れだな。

結果は……

パソコン

現場には黒焦げになった当麻と青髪。

その幻想を抱いたまま死にました。

「死んでねえええ！」

お？まだ生きてたのか？それと当麻、読心術を使えたのか？

「なんで俺の右手が効かないんだよ！！！」

ふむ？当麻も俺と似た能力があるのか？

「当麻、お前の右腕、あらゆる異能を打ち消す力を持っているのか？」

「な！どうやって知ったんだ！？」

当麻。これ以上キャラを崩壊しないでくれ。ただでさえキャラがな
ってないんだ。

メタ発言禁止ですよ。

む？今誰かに話しかけられたような…気のせいか。

「それは、俺の能力もそれに似ているからだ。俺のは結界。結界らしきものになっている。あともう少しすればその結界も操れるようになるのだが…。」

「じ、じゃあさっきのあれはなんだったんだ！？あれで上条さんの丸焼きが出来上がったやつ！」

やめて。上条が聞いてくるが、この説明も飽きた。

「はあ…つまり、……………（説明
中）……………というわけだ。」

誰かいないものか。超能力にたよらず武術で戦う者は。

「……………。」

駄目だ。こいつ、かなりの馬鹿だ。氣の説明した程度で頭がパーになりやがった。

とにかく、そんな事でレーミこと霊美がこの地に転生した事がわかった。

「妹さんが来るなんて聞いてませんよ！！霊牙ちゃん！」

「貴女ごときが存在が、霊牙兄様をちゃんをつけて呼ぶんじゃありません！！」

家に帰る時、何故か霊美がついてきた。なんでも俺と一緒にいたいからだそうだ。

「いい加減にしろ。霊美。子萌。なんでも言う事聞くからたのむ。」

「霊美ちゃん♪仲良くしましょうか♪」

「そうですね先生♪私泊まっついていいですか？」

「はい♪いいですよ♪」

急に仲良くなりやがった。

「二人で……」

「仲良く……」

「「分け合いましょうか」」

…その後、風呂と一緒に入れたのいろいろやばい事を頼まれた。

酒を口移しで迫られたり、食い物を口移しで迫られたり。

「我が命運…ここで尽きる…か…。」

「靈牙ちゃん」まだまだ夜は始まったばかりですよ」

「そうですよ」靈牙兄様」

身体検査（前書き）

無理矢理感がかなりあります。ごめんなさい。それでも作者は全力なのです！

とにかく、ご覧ください。いろいろあれなところもありますが、楽しんでいただけると幸いです。

身体検査

「はい。今日は身体検査を行います。あ、霊牙ちゃんは先生と一緒に来てください。」

朝のホームルームで知らされたのがこれだ。

昨日の混沌カオスを経験した俺は誰から見ても光を失った瞳で窓の外の景色を見ていた。

「先生。霊牙君が先生の話を見ても校庭の水まいてる先生にメロメロや。」

「……………」

青髪ピアス（青髪変態全身精液ドロドロまみれ常時妄想神痴漢塵子。コピアス屑下郎）の発言に怒る気力もない。

「うっぐ…ヒック…」

「……………」

それは小萌が泣いて皆に殺気を当てられても無視する事を意味する。いや、この状況の俺が何故説明をしているのだ？

「霊牙兄様。あんなババアを見ているより私を見てくださいよお／＼／」

それは霊美が勘違いをしてブラコンを発動しても無視する事を意味

する。

ビチャッ！

「あ！ごめん霊牙！」

「……………」

それは当麻が持っている黒豆サイダー（俺があげて以来はまっただし）が制服にかかっても無視する事を意味する。

「……………」

「おい…どうしたんだよ霊牙？」

「……………」

それは当麻が心配しても無視する事を意味する。さっきからしつこいな、俺。

ビッシャーン！

「あ！すまん黒ヤン！」

「……ブプー！／＼／＼」

それは青髪ピアス（青髪変態全身精液ドロドロまみれ常時妄想神塵級ロリコン超最低最悪チ。コピアス下郎）が何処から取りだし、用意したのか分からないバケツいっぱいの水を俺にぶっかけ、女子全員が鼻血を出して倒れても無視する事を…

「ふむ…どうやら天国へ旅立ちたいようだな…いや、地獄でもいいぞ？それなら、その狭間の世界へ送りこみ奴隷としてやってもいいぞ？」

できないに決まってる。

バツコーン

「常盤台？」

青髪を黒髪に変えてから小萌と職員室にいるのだが…

「何故俺は常盤台中学とやらに？中学生に戻れとでも？」

「ちがいますう。霊牙ちゃんの超能力が、どれ程のものを測りた
いのです。超能力を打ち消すのにどこまでの威力を打ち消す事がで
きるかをしりたいのです。」

…ふむ。しかし何故中学校なのだ？そこが疑問だ。

「中学校より高校の方が施設が上じゃないのか？」

「はい。残念ながら…ここは無能力者から異能力者を中心とした高
校なのです。常盤台は強能力者以上でないと入学を許されない、エ
リートの集まりの高校なのです。そちらの方が施設がいいのは予測
できますよね？」

ふむ。力を試すのにいい場所なのかな。だが当麻はどうなのだ？
不幸体質が無くなったから多分強能力者くらいにはなれると思うが
…。

あいつは俺と同じだ。

だが欠点は右手しか効果範囲が無いのが弱点。俺は結界。全方向と
さらに少しだが俺を軸として半径1m程の結界をはる。つまり俺の
領域に入ったら相手は超能力を使う事は不可能。こうして見ると流
石研究された超能力なだけのことはある。

「ではこの地図を渡しますので、この赤い線の通りに進んでくださ
い。そこで生徒が待っている筈です。その子に案内を頼んでいます
ので。」

「了解した。」

氣で身体能力強化し、地図に赤い線がひかれていて、その通りに速やかに目的地へと向かった。

…ふむ。どうしたものか。

目的地には到着した。が、そこで待っている筈の生徒が誰だかわからん。

「むう…どうするか。」

辺りを見る。しかし何故ここまで嚴重なのだ？

警備員らしきやつらが入口であろう場所に立っている。ふむ。あいつらに聞くか。

「すまない。聞きたい事があるのだが。」

「ん？どうした？」

警備員に話しかける。

「黒崎霊牙という者だが、身体検査で常盤台とやらに来ることになったのだが…」

「ああ。黒崎ってお前の事か。もう少し待っててくれ。到着時間が早いからな。」

「わかった。迷惑かけてすまん。」

…暫く待つか。

だが…暇だな。剣術の鍛練でもするか。

氣を放出させ、放出したものを剣の形に作る。

「…む、やはり天界にいた時程頑丈にはつくれないか。」

剣の形をし、水色の透明な剣。

説明していなかったが、氣とは氣弾や身体強化、硬化、治癒という扱いの中で、氣を放出させる事を応用し、武器をつくる事も可能。形だけだがな。

氣でつくる剣や槍、弓矢は自分の氣を扱える技術力、あとは氣の量で頑丈さや切れ味が決まる。

「……ふ！」

残像をも残すであろうスピードで乱舞をする。

それを続ける事10分。

「ふう…まあまあだな。」

「今のがまあまあでしたら貴方以外の人はどうなるのですの？」

この口調は…

「案内人は白井か。」

「ええ。ではご案内いたしますわ。」

そして白井の後に続き、かなり警備の厳しい入口を通過する。

暫く歩くが、なにやら異変？に気づく。周りが女子しかない。何故だ？

「白井よ。もしかするとここは…女子校？」

「へ？聞いてませんでしたの？」

成る程。故に入口があれほど厳重だったのか。

辺りから凄くコソコソと話し声が聞こえるのだが…しかもほぼ全員お嬢様口調。俺はお嬢様系はあまり好まないのだが…ある意味地獄だな。

暫くするとらしき場所に到着。しかもなにか変だ。辺りは芝生なのだが俺の立つ場所の半径1km程が土だ。

暫く待つと、何処からか一人、誰かが近づいてくる。

俺は氣を扱える。氣とは生命力と考えていい。故に誰にでも氣とは存在する。生物全てに。故に目隠ししても氣を察知し、相手の居場所等がわかる。

一応、結界をはる。すると…

バチィッ!!

後ろから雷らしき物が結界により打ち消された音が聞こえた。

ふむ… 猛者だな。

後ろを振り向くと…

「黒崎靈牙って、あんたの事よね？」

茶髪の短髪の女子がいた。

「ふむ。そうだ。俺は身体検査をするために来た。故にその闘気を納める。」

「仕方ないじゃない。あんたの検査は私との勝負だし。」

…は？聞いてないぞ？それ。

「…ほう？分かった。ならば手加減は無用か？」

茶髪は鼻で笑い、見下したように話す。

「あんた聞けば異能力者かそこらでしょ？この私、Level 5の第3位、御坂美琴に勝てると思ってるわけ？」

辺りに生徒が集まってくる。そうだろうな。理不尽が。俺だけは何故か決闘という試験なのだからな。だが…楽しめそうだ。

「ならば返そう。御坂とやら。超能力者の貴様ごときに、俺に勝てると思ってるわけなのか？」

辺りがざわつく。そうだろう。超能力の強さが全く違うのに勝てる勝てないではなく敵わない。なのに超能力者に勝てると思っているのかと聞かれたら誰だって驚く。

結界を解除する。楽しめないからな。因みに、俺の超能力は常時発動ではなく、自分の意思で発動や解除をできる。

御坂とやらに雷が発生する。

「あんた……ふざけんじゃないわよ！！！」

ぶちギレたのか、雷をほぼ全力であろうくらいに雷が俺に迫る。が…

「遅いぞ。超能力者。」

体をそらし、最小限の動きでかわす。

「な！？」

気を放出、弓矢の形を作り、水色で透明な弓矢をつくる。

「それがあんたの超能力？」

御坂が聞いてくる。

「いや、違う。これは超能力ではない。氣という武術の一種だ。氣というのは………（説明中）………」

………という事だ。つまり俺は超能力を使わずに貴様を倒す。

「

御坂が面白いとばかりににやけながら話す。

「へえ。上等よ。あんたの氣っていうやつと私の超能力、どっちが強いかしら？」

今度は土から黒いものが御坂の手に集まり、劍の形をつくる。

「これは砂鉄で作った劍。刃の部分がチェーンソーみたいな動きをしていて、これに当たるとちよつと痛いかもよ？」

御坂は砂鉄で作った劍を持ち、俺を斬ろうと劍を振るう。だが当たらなければ意味が無い。

「俺に武術、で！挑もうとは…哀れだな！」

後ろに飛び、距離をとる。弓矢を構え、そして放つ。

「はあ！」

…ほっ？防いだか。次は槍を作りだす。

「御坂よ。剣術三倍段とやらを知っているか？」

「はあ？なによそれ？」

槍を構える。

「剣よりも槍の方が性能に優れ、なおかつ槍の方が剣よりも扱いやすい。」

槍を振るい、御坂の剣を弾き飛ばす。

「どうした？もう終わりなのか？だらしない。」

「くそ！ならば…これよ！」

御坂はポッケからコインを取り出す。

「これを受けてさつきみたいに言える？」

コインは弾かれ、雷をまといながら俺の頬を通過する。速いな。見切れない速さではないがな。

「超電磁砲…レールガンよ。」

切り札か。ならば俺はこれだな。

「切り札か。ならば見せてもらった礼をしなくてはな。」

氣で身体能力を強化する。剣を作り、そして駆ける。

「うらああああ！」

残像を残すであろう速度で御坂の周りを斬る。一回もあててないがな。

「……俺の勝ちだな。」

「私の…負けよ。」

首筋に剣を突き付ける。御坂はこれでは最初から速さの問題で倒す事は不可能だったと判断したのか、負けを認めた。

…む？

「御坂！ちよつと左腕を見せてみる！」

「え！？ちよつと！／＼／＼」

御坂の左腕を掴み、見ると風で切れたのか、かすった後がひとつあり、血が出ていた。

「悪かった。すまない。決闘とはいえ、君みたいな女性を傷つけてしまった。」

右手を傷にあて、氣を流す。氣で御坂の傷を治癒する。傷はみるみる塞がり、元の腕に戻る。

「（あ、暖かい…なに、これ？これも氣というやつでやってるの？）」

「ふむ。氣で傷を治癒した。すまないな。」

にこりと御坂に微笑む。

「!!!／／／」

む？顔が赤い。風邪か？だとしたら本気で闘えていなかったのか？

「すまない。少し調べるぞ。」

「な!!!？／／／／／」

御坂のおでこに手をあて、熱がないか調べる。しかし、綺麗な肌だな。」

「な!？何言ってるのよ!／／／」

ふむ？口に出してしまったか。

さて、用事はすんだ……………どうするか、これ。

御坂の後ろには俺が斬った残撃の後があった。

「お姉さま!大丈夫ですよ…は?」

白井が残撃で校庭が斬り後や何故か所々にクレーターが出来ている事に気づく。ちい。ここは撤退か?いや、俺の辞書に逃げる、逃走、退却、撤退の文字はない。退却ではない。明日への進軍だ!

「何処へ行くこと？」

な！？こいつ、空間移動みたいなものを使うのか！？超能力にも空間移動はあるのだな。目の前に白井が立つ。

「いや…その…。」

「まあ、ジャツジメントに入れば許してあげない事はなくてよ？」

弁償は…俺の金では不可か。諦めるか。

「わかった。ジャツジメントとやらに入るか。」

「ええ。あと私のことは黒子とお呼びくださいな。」

「ああ。なら俺は霊牙だ。すまないが、宜しくたのむ。」

これまたにこりと微笑む。

「っ！？／／／で、ではこれで身体検査は終了ですの／／／」

そして、俺はジャツジメントとやらに入らされるはめになった。

「というわけで、すまないがアンチスキルには入れない。」

常盤台からの帰り道、携帯電話である人物と通話している。

《ま、いいじゃん。ジャッジメントからアンチスキルの入隊を推薦させればいい話じゃん。》

“くじゃん”という言葉をお癖にし、入隊をちよくちよくすすめる本人、黄泉川というやつだ。

「権力はアンチスキルの方が上かね。まあそうだろうがな。」

だが強さはジャッジメントの方が上ではないのか？黒子がいるのだし…いや、多勢に無勢か。いや無勢まではいかないか。

「ああ、わかったわかった。高校卒業したら入隊しても良い。」

《んじゃ皆に伝えとくじゃん。》

ブツッ！

ちい、余計な事を…！

アンチスキルの入隊を約束させられた俺であつた…。

戦闘覇者（バトルマスター）（前書き）

注意です。これは能力名ではありません。二つ名です。能力名はまた別に考えます。では、ご覧ください。

戦闘覇者（バトルマスター）

「霊牙さん♪」

はあ。俺、黒崎霊牙はレストランであろう場所にいる。目の前の席には霊美ことレーミ。俺と二人の時は兄妹関係ではなく、前の様に呼ばうと決めた。

「ふむ。霊美よ、お前も彼氏を作ったらどうだ？」

「へ？どうしたんですか？」

レーミが不思議そうに聞く。

「当然だ。今のお前はブラコンと見られてひかれているのだぞ？男子に。お前は可愛い部類に入っているのだ。故にいつもいつも霊牙霊牙と…当麻とでも話したらどうだ？不幸体質が無くなったのだ。」

テーブルの上に置いてあるポテトを半分かじり、そしてメロンソーダを飲む。ふむ。美味。やはりヤシの実サイダーなどあるが、俺には不向きな味。やはり慣れた味ではなくてはな。

「うーん…では霊牙さんが超能力に関するテストで満点を取れたら考えますよ♪ん♪」霊牙さんの食べかけのポテト♪」

「うぐっ！」

ちい！せこいぞ！俺は前にも説明した通り、超能力以外ならば満点は余裕。だが超能力に関するテストは10点取れば良い方だ。レ

ーミの場合は全て平均的に取れている。

俺の食べかけのポテトをレーミは食べる。何故喜ぶのかは不明だがな。

「え〜と…初春を口実としたお姉様とのデートプラン。」

後ろから聞いた事のある声が聞こえるのだが…。ポテトをかじり、またメロンソーダを飲む。美味。

「……読んただけで、スツゲエストレスたまるんだけど…！」
煩わしい。しかし本当に聞き覚えのある声だが…。いや静かにしたいのだが…。煩わしいぞ。後ろにいる奴等。

「お姉様〜〜〜!!」

…煩い。ああ煩い。煩わしい。もう怒っていいよな？

「黒子はもう!どうにかなってしまいそうですの〜!!」

…黒子、貴様か?煩わしいのは。

ゆらりと席を立ち、店員と同時に黒子らに話す。

「「(お客様)(黒子よ)、周りの(お客様)(客と俺)の迷惑に
(なりますので)(なっている故)、(お静かにお願いします)(
その口閉じろ、同性愛)。」」

「あ、霊牙さんではありませんの。」

「あ！あんだ！」

「…黒子よ、いや同性愛よ。」

「…何故言い直しますの？」

「先程の事を見たらそう認識しざるを得ないだろう。」

今現在、俺とレーミこと霊美はレストランを出ている。そして俺は昔の知り合いと…確かLevel5の御坂…だったか？そいつと再会。あとは知らない黒髪ストレートの女。知り合いと同じ学年のようだ。ちなみに知り合いとは誰かというと…

「れれれれ霊牙ちゃん！？／＼どどどうしてここに！？／＼／」

「いや、動揺しすぎだ飾利よ。少し落ち着け。」

初春飾利だった。

「そして自己紹介だな。俺は黒崎霊牙だ。して、君の名は？」

黒髪ストレートに問う。

「あ、はい。あたしは佐天涙子です。」

「そうか。宜しく頼むぞ、佐天。」

にこりと微笑む。

「は、はい／＼／＼こちらこそ／＼／」

「」「むう…。」

御坂、黒子、飾利は何故か不機嫌のような…。そして俺は忘れていた。俺は危険人物と一緒にいた事を。

「ちょっと待ってください！！貴女方の様な方に私の兄様は渡しません！！私の物です！」

人を物扱いする霊美。そう、ブラコンが発動。しかも何故かヤンデレも入っているような…。

「な、なによそいつ！わ、私は別に黒崎の事なんて！／＼／」

「な、ななななんですかその人は！！霊牙さん！」

「いや、私は^{わたくし}なんとも思っていない…少し気になるだけで…ボソボソ」

「あ、あたしは／＼／…ボソボソ」

上から御坂、飾利、黒子、佐天となっている。

霊美が今度は抱きついてきた。ああ、鬱陶しい。とつとと離れる。

「離れる。」

「断固拒否です！」

「はあ…とにかくだ。こいつは黒崎霊美。俺の妹だ。ほら、自己紹介しろ。」

「どうもです。私は黒崎霊牙の妹、黒崎霊美です。宜しく願います♪あと霊牙兄様は私の物ですからね♪」

「そして離れる。」

「断固拒否です。氷のオブジェにしても抱きついていきますよ♪」

「離れるブラコン。ちなみに結界はっている故、お前は今無力だ。」

「流石霊牙兄様♪私では敵いません♪」

ちい。無視したいが出来ない。体が体だからな。こいつ。

「なにか奢るから離れてくれ。」

「はい♪わかりました♪」

今回はなんかあれだ。なんか軽いな。

「…この黒崎さんの妹さん、私わたくしと同じ香りがしますわ…。」

黒子よ。お前はなんなのだ？

「と、とにかく自己紹介しましょうか。」

「ふむ。変態二人は無視せよ。まずは飾利からだ。」

「は、はい！私は初春飾利です！」

「どうも。佐天涙子です。なんだかわからないけど私も来ちゃいましたあ。ちなみに能力はLevel 0です。」

「さ、佐天さん！」

… 飾利よ、佐天の自己紹介に悪い事でもあったのか？

「佐天さんと初春さんねえ。私は「こいつは第三位の御坂美琴…だったか？」ちよつとあんた！自己紹介ぐらい自分でさせなさいよ！」
む？不都合でもあったのか？そしてその飾利グループよ、何故首を傾げている？

「さて、と。俺はこれにて…無理な様だ。」

霊美を連れようとすると、なにやら黒子と意気投合。かなり仲良くなっていた。

「…すまん。霊美を頼む。ではこれに「待ちなさいよ！」ふむ？なにか用か？御坂。」

「あ…あんたも来る？べ、別にあんたと一緒に行きたいわけじゃないんだからね！／／／そこを勘違いしないでよね！／／／」

ふむ。暇潰しにもなるか。御坂の誘い、受けるかな。

「…迷惑でなければ俺も行こう。」

「め、めめめ迷惑なわけじゃない！／／／私がこうして誘ってるんだから！／／／」

「そうか？ふむ。有り難う。」

「っ！／／／」

さて。ふむ…霊美は…どうでもいい。

「では、何処に行く？」

取り敢えず尋ねる俺。むう。暇潰しは別に良いのだが遊びとなると…なんか自分はいらないのではないかと感じてしまう。苦手だ。

「じゃあ取り敢えず、ゲーセンでも行く？」

御坂が俺の問いに答える。ゲーセン？ああ、ゲームセンターの事か。

「むう…苦手だ…ゲームとな…種類にもよるかな。」

「なら決定で良いわね？」

「ふむ。では行くのでしょうか。」

そして行くとするが、問題が二つあった。一つ目は…

「……………」

飾利と佐天がポカーンとして動かない。これはあまり問題ではないな。二つ目は…

「ではでは、ここをこつという計画でいきましょう！そうすれば、御坂さんとやらも黒子さんに堕ちますよ」

「流石ですわ！ならばこの計画、霊美さんも協力してくださる？」

「無論です！私達の利益のために…フヒヒ…これで霊牙兄様を…」

「フフフ…これでお姉様を…フフフ…」

「（わたし）（わたくし）の物に（できます）（できますわ）…」

嫌な予感バリバリするのだが…放置していて大丈夫だろうか。そして利益と…利益とはいったいなんなのだ？

「早く行く。飾利、佐天よ。」

「…御坂さん、なんか予想とは違ってた…」

「霊牙さん…意外と流されやすいタイプなのですね…」

佐天と飾利がなにか悟った目をしていた。何故？

「何を悟ったのだ？」

「「うひゃ！？／／／」

いや、顔を近づけたただけなのに何故驚く？

それと…あれらだな。

御坂に話そうか。

「ひゃ！／／／いいいいいきなり何するのよ！／／／」

…？肩を掴んだだけだが？いや、それよりも…

「気を付ける。なにやらなにやらこの後、とんでもない事がおきそうな…。黒子らを見る。」

「え？」

御坂に黒子らを指差し、示す。

「「フフフフ…フヒヒ…」」

「どうやら俺も気を付けた方が良くみたいだな。」

「……………」。

ふむ？なにやら不機嫌オーラを放つ御坂。

「…どうした？」

「なんでもないわよ！」

それで御坂はとつと先へ行ってしまった。さて、と。

「飾利、佐天、変態、同性愛。行くぞ。」

「「はい！」」

「「誰が（変態）（同性愛）なの（ですか？）（ですの？）」「」

ちなみに変態に反応したのは霊美、同性愛に反応したのは黒子。ふ、哀れな。反応したのならば認めたな。

とにかく、俺たちはこの場から移動開始した。

「あああ！！また負けた！なんであんたはこんなに強いのだよ！」

「戦略は俺の得意分野。」

今現在格闘ゲームで御坂vs俺となっている。戦略というより予測

だな。次に何が来るだろうと予測し、それを防ぎつつ…場外負けがあるのならガードを続け、場外になる時に相手を投げて場外！

「あんたは強いとかじゃなくてせこいのよ！」

「勝負にせこいという言葉は無い。ゲームならば尚更。勝者こそ正義。それがゲームの基本だ。」

「じ、じゃあ今度は場外無しで！」

「いや場外無しでやっても俺が勝っているが？」

予測し、ガードを続け、そして技にある僅かな隙を…ちまちまと突く！逃げを狙うのならば自分から行き、掴み技！

「くうう…！あんた！もう一回勝負よ！」

「別にいいが、せめて姓で呼べ。せめて黒崎と。」

ちなみにここはデパートらしき場所。地下にいる。一階は食品と服、二階は服等、三階は電化製品やゲームを売っている。服が比較的に多い。というか、制服で来てしまっているが、大丈夫なのか？特に中学生。

「何回も同じ手はくらわないわよ！黒崎！」

「あまいぞ。戦略こそがゲームで一番大切だ。」

「く！防ぐな…！あ！タイムアップ！？」

パンチ一発くらわし、あとはガード。掴み技はしゃがんでかわす。

「あんたは強いとかじゃなくてやっぱりせこいのよ!」

「その台詞は聞き飽きた。」

ふう。疲れた。

「霊牙兄様 ♪ はい ♪ 飲み物ですよ ♪」

「有り難い。」

ゲームセンターから出て、取り敢えず場所を変えようと移動中。霊美から飲み物を貰う。…怪しい。

「
♪ ♪ ♪」

「……………」

霊美の表情を見る。無駄にテンションが高い。氣の流れで…興奮さ
み?

「霊美、ちよつと飲んでみる。」

「え？何故です？せつかく買ってあげたのに…。」

奢ると言ったらジューズだけでいいですとか言っただけで去って行った。それを渡す…怪しい。いや、考えすぎか？

「すまない。有り難く飲む。」

にこりと微笑んで返してくる霊美。やはり怪しい。笑顔に裏がありそうだ。いや、ある。

御坂も同じものを渡される…まずい！

「御坂！飲むな！」

「え…きゃあ！」

御坂に渡された飲み物を俺が弾く。

「ちょ！なにをするのよ！」

「御坂よ…お前怪しいと思わなかったのか？ふむ…そろそろだな。」

黒子の方に指を指す。

「あああああ！！霊美さんの作ってくれた5倍の媚薬が！！！」

「……………」

試しに俺の飲み物も落としてみる。

「ああああ！！対鈍感霊牙兄様専用通常の5000倍の性。剤がああ！！作るのに1日かかったのにいいいい！！」

…随分と早いな。

「御坂…。」

「黒崎…。」

ここで考えた事が一致した。目標、変態と同性愛。

バックコーン

ドッカーン

また飛ばす。今現在、俺達とはある公園に来ている。

今はクレープ屋の列に佐天、俺、御坂は並んでいる。他の人は場所取りをしている。

そしてそのクレープ屋はなんか謎の蛙のストラップがついてくるらしい。御坂がその謎のストラップに過剰反応を示した。故に、結局御坂の事でこのクレープ屋に並んでいる。

「ふむ。子供ばかりだな。それほどあの不快な蛙が人気なのか？」

「あはは…まあそうでしょうね。」

佐天が軽く笑いながら返す。

しかし…後ろからかなりの覇気が…濃厚な覇気が…あと少し殺気が…！

「御坂よ、変わってもいいのだが？」

「…へ？いや、いいわよ！私はく、クレープさえ食べられればそれでいいから！」

ふむ。やはりあの不快な生命体のストラップが欲しいわけか。

そして佐天、次に俺の番になった。

「お客様、良かったですね。これが最後の…」

後半耳にしていない。何故なら…

「……………」

後ろの第3位から物凄い負のオーラが放出されている。ふむ。これが生で見るorsの体制か。

とにかく、クレープと不快なストラップを受け取り場を後にしようとしたが…

「……………」

できるわけがない。

「ほれ。この不快なストラップ、御坂にやる。」

「え！？本当に！？ありがと〜〜！！」

…やはり欲しかったのではないか。

そしてクレープを買い、無事到着。場所は確保されていた。そして黒焦げの黒子と霊美はなにやら作戦会議みたいだ。まだ諦めていないのか？レールガンと俺の氣砲、レーザー状態の氣を直にくらってもまだやるのか？

とにかく、あの二人はクレープ片手に盛り上がっている様だ。問題無いな。

こちらは…

「佐天さんののも美味しいですね。」

「初春のもね。」

「ほら、今度は私のもどう?」

「あ、ではいただきます。」

食べさせ合いか。今現在俺はクレープ片手に、壁によっかかりながら食べている。やはりまともな物は美味だ。

「あ、霊牙さんもこつち来てくださいよお。」

飾利の声。俺を誘っているのか? いや流石にあの中には入りにくいような…。

「ほらほら。黒崎さんも早く行きますよ。」

いつの間にか佐天が後ろに…。

そして結局…この居にくい空間に入ってしまった。

「ん? 黒崎のも美味しそうね。貰うわよ?」

ん? 御坂が勝手に俺のクレープ食いやがった。むう…俺のクレープ。

「はい。私のも食べる?」

今度は俺の方にクレープを向けてくる。ではいたたくとしよう。

「有り難い。……ふむ。美味だな。」

「………！？！／／／」

佐天と飾利はなに驚いているのだ？

「わ、私のも…どうですか？／／／」

「！？！／／／」

今度は飾利の方からおずおずといった感じにクレープを渡してきた。

「ふむ。では……ふむ。美味だ。有り難う。」

「い、いえ…／／／」

…何故？何故佐天は固まっているのだ？

「ああああああ！？！みみみみみ御坂さん！！貴女はかかか間接キスとか気にしないんですか！？／／／」

「へ？………！！？／／／」

そこで二人の悪魔が目覚める。

「「（お姉様）（霊牙兄様）との間接キス…いただき（ですわ！）（です！）」」

霊美は俺のクレープを狙ってくる。

ふむ…先にくうか。一気に食い、霊美がきたころにはもうなくなっていた。

「そんな〜!」

…さっきから気になっているが、何故昼間なのに銀行のシャッターがおりているのだろうか。

その時…

バコーン!!

「おら早く逃げるぞ!」

銀行強盗か。

「黒子よ! ジャッジメントとやらの勲章俺に渡せ!」

「了解ですの! では初春! アンチスキルに連絡を!」

「はい!」

勲章…派手に言い過ぎたか? まあとにかく、緑色の…なんだろうか。風紀委員と書かれている。嫌だな、これ。

それを着け、黒子の後を追う。

「ジャッジメントですの! き「ジャッジメントとやらだ。銀行強盗

どもよ。大人しく降れ。さぞすれば痛い思いはせん。」私の台詞を^{わたくし}遮らないでほしいですわ!」

ふむ。雑魚だな。雑魚が三人、呆然?と見ている。

「……ギャハハハ!」

訂正。馬鹿にされた。

「ジャツジメントも人手不足なのか?」

「そのようだ。ジャツジメントとやらは人手不足かもな。故に俺も新人かつ初仕事。だが…貴様等ごとき、新人の俺だけで充分だ。」

「は!? 餓鬼が! なら相手してやんよ!」

中でも体格の良い奴が殴りかかってきた。

「黒子よ、俺が殺る故下がつてろ。」

「殺ってはいけませんよ? せいぜい気絶程度でお願いしますの。」

結構危ない会話を終え、男を見る。

「なめやがつて! オラア!」

右ストレートが飛んできた。それを首を動かすという最小限の動きでかわし、そして…

「…死亡フラグ乱立者よ。死なない事を祈る。」

「グフッ!!」

腹に膝蹴りをいれ、気絶させる。

「…規格外の強さですの。」

「では次は黒子、お前の舞いを見せてくれ。」

「了解…ですの。」

敵はどうやら強敵出現したみたいな顔つき。一人の男が右手に炎を出す。

黒子はそれにて逃げるように男からまったく別方向へと走る。

「まて!逃げんじゃねえ!」

炎は黒子をとらえ、燃やしたと思われた。が、

「誰が逃げますの?」

空間移動みたいな能力でかわし、さらに男の頭に飛び蹴りをくらわす。そして黒子はなにやら針のようなものを空間移動させ男の服に刺し、身動きをとれなくする。ふむ?もう一人の男が逃げた。追うか。

しばらく追うと、男は少年少女ともめていた。

一人はかなり小さい。小学一年くらいだろう。一人は…

「退け!!」

「きゃあ!!」

… 佐天だった。

佐天は少年をかばい、殴られた。

…………… 殺す。いや、無理か。この世界は殺しは重罪。ならば…
恐怖を教えてやる。

ガシッ!

「ひい!」

氣で速く動き、男の肩をつかむ。

「は、はなせや!」

振りほどき、車に駆け込む男。

男は車で少し距離を離し、そして俺に走らせる。

「… 御坂、手を出すな。」

「!?!」

当然のように後ろでコインを構えている御坂を止める。

「… “我”を怒らせたのだ。あの塵に… 恐怖を教えなくてはな。我

が力は破壊がための力…。」

車はだんだん速度を上げる。一方我は奴の乗る車に右手を向ける。

「故にその力は人外に値する。その力は恐ろしきもの。」

氣を右手に込める。右手はだんだんひかりはじめる。

「…だが、その力を求めんとする者もあり。破壊で守れるものもある。」

氣を放出、応用し、大剣をつくる。

「さぞ良き幻想を抱いているのだな。だが貴様の幻想は少々飽きた。」

大剣を構え、横に斬る体制をとる。

「…その幻想、我が力にて破壊しよう。我が力…友のためにあり！
！！」

大剣を横に大きく一閃。氣での身体強化故に突風がおき、車は吹き飛ばされる。

車は逆さまになり、男は…氣絶であろうな。

「流石ですわね。あれ程の二つ名を有する程の資格ありですわね。」

…黒子が後ろから話しかける。二つ名？ああ。検査か。検査でついたのだな。

…しかし口調が変わってしまったな。怒るといつい一人称が我になってしまう。

「二つ名、とな。どんな名だ？」

後ろに振り向き、黒子に問う。

「超能力はあらゆる能力を打ち消す力。ですがその力は強くなく、強力な力は防げない。」

…あれは俺の好奇心というか、なんというか…検査というのを忘れていた。あれは純粹に闘いを楽しもうかと…

「ですがその者は超能力では戦わない。超能力ではない、異能ではない何かを使う。さらにその者は素手でも突風を放つ力を持ち、速度は刹那を越える速さ。」

いや、あれは氣を使わないと出来ない。さらに全て氣を使っての格闘だ。氣を使わなくても勝てるが突風をおこしたりなどは出来ん。しかも刹那を越える速さと…。刹那は越えられんぞ？俺でも。

「その者は戦闘の覇者、『バトルマスター戦闘覇者』と呼ばれますわ。」

バトルマスター…餓鬼か？この名は。

とにかく、それで佐天により、怪我のぐわいを見る。

「佐天よ…大丈夫…佐天？」

佐天は何故か俺をキラキラと輝いた目で俺を見る。

「く、黒崎さんがあのバトルマスター戦闘覇者だったんですか！？うわー！感激です！」

いや何故？

「それは霊牙さんみたいに超能力を持ってないでも能力者と戦える唯一の人ですから。」

何故か後ろには飾利。怖いぞ。いつ後ろに立っていた？そして読心術が使えたのか？

「あと霊牙さんって、御坂さんを倒したのですよね？凄いです！」

お褒めの言葉有り難うござい。それよりもだ。

「佐天よ、怪我…しているな。少しジツとしている。」

「……！?!／／／」

「ジツとしている。」

「うう…はい。／／／」

頬あたりを殴られアザができていた。右手を頬にあて、氣を流す。

「／／／／／」

はて、佐天の頬が異常に熱いのだが…何故だ？

「（あ、暖かい…。）」

アザがひいていき、元の頬に戻る。

「…治したぞ。しかし佐天よ、今回はお手柄だな。」

「え？」

「そうね。黒崎の言う通り、佐天さんお手柄だったわね。」

「え??？」

俺と御坂の言葉に混乱している佐天。

「そうだろ？男の子を守ったのだ。もっと誇ってもいいのだぞ？」

そんなこんなで褒め称えていると少年、先ほどの佐天が守ったと思わしき少年がいた。

「お姉さん…ありがとう！」

それだけを言うのと去っていった。ふむ。やはりこれは佐天が一番手柄をたてたな。

そして俺は忘れていた。

一人、魔物が俺の後をついてきていた事を…

パキンッ！

「ふふふ…靈牙兄様♪無理も無茶もしないと、前に言いましたよね？」

靈美の存在だった。

温度を操り、水素等を凍らせて剣の形をした氷を持っている。あれは防げないであろうな。ちなみに奴はこのように無茶も無理もしていないが、無理が無茶をした時の靈美は俺をも遥かに凌駕する殺気と覇気を放つ。

「ふふふふふふふふふふふふふふふふ」

「ぐわっ！？ちい！…我が命運、ここに尽きるか…！」

「………」

御坂達はお疲れさまみたいな目で見てくる。いや、違っんだ！

最悪だぜ。

「はぁ、はぁ、れ…靈牙ちゃん…／／／／／」

「は、離せ！なんだこれは！なんなのだ！！霊美よ！小萌を戻せえ
！！！！」

家についたら小萌はなにやら霊美に怪しい薬を飲まれた。そして
らこうなった。今の状況の小萌の目はトロンとしていながらも獲物
は逃がさんという勢いの目。俺に抱きついてくる。腰あたりに。そ
れを俺が止めている。

「それが私への罰ですよ、小萌さんには通常の3倍の媚薬を飲ませ
ましたので、ですが小萌さん相手ならば氣を使えず苦戦しますが、
止められます。その疲れきったところを………ジュルリ。」

「はあ、れ、霊牙ちゃん。先生我慢できませんよ。／／／」

まずい！これはまずい！

「離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離
せ離せ離せ離せ離せ離せ！！！！」

「霊牙ちゃん／／／」

「のわああああ！！！！」

結局、小萌は止めて霊美には俺の氣弾をかなりの数を飛ばし、霊美
の暴走はなんとか防げた。

結論を言うと、霊美を怒らせないようにしよう。うん。

安らげると聞いてきたのだが…（前書き）

駄文やわ…。原作書くの難しいです！では、ご覧ください。…楽しんでいただけたかなり幸いです。はあ、上手くないかもしれませんね。

安らげると聞いてきたのだが…

…ふむ。現状を軽くかつ簡単に説明しよう。

何故か俺はいろいろヤバイ。

俺こと霊牙は今現在口論戦をしている。相手は飾利と佐天だ。

「安らげると聞いてきたのだ。故、いくら入れるとしても女子のみの場所はやめてくれ。視線が痛いのだ。」

「霊牙さん！せっかくここまで来たんですよ！お嬢様がいっぱいですよ！」

「黒崎さん！早く行きましょう！ケーキ食べれますよ！」

「飾利、佐天よ。俺はそこらの下朗かつ変態の様に女子しか入らん場所に入れて喜ぶ奴ではない。さらにケーキなど、別に他の場所でも食えるではないのか？」

佐天と飾利はよくわからんが、こいつらだけで逝けば…行けば良いものを何故か俺を意地でも入らそうとする。ちなみにこの場にはいないが、御坂もそうであった。この現場にはあの魔神（霊美）は同行していない。なんでも新しくなにかを作るらしい。嫌な予感しかないがな。

では何故こんな事になってしまったのか回想にて説明しよう。

〈回想〉

――風紀委員にて――

………む？今？俺は書類仕事をしているのだが。

…よし、終わった。今ここは黒子に案内され、働くことになった風紀委員の本部である。何カ所か本部は別れているらしいが…まあいいだろう。

「よし。終わったぞ。固法よ。」

「…早いわね。裏表印刷の書類20枚を3分で終わらすなんて。異常ね。」

いや、異常ではない。誰でも100は必ず越える書類を毎日のようにやらされていたら必ずそうなるものだろう。む？違つか？

それはともかく、固法とはこの風紀委員の大先輩にあたる人だ。敬語を使っていたのだが、本人に強く否定させられ、今では普通に話す。彼女はここでは欠かせない、知略と統率力がある。ほぼ毎日書類仕事しているのだが…大丈夫なのだろうか。

固法は現場に入ると、まず現状を素早く確認。冷静に事を対処する、まさしく冷静沈着な人だ。かけている眼鏡がきらりと光るのは気のせいだろうか。

そして働き過ぎの固法にたまには礼を、という事で俺のバッグにはコンビニのクジで当たった黒豆サイダー。はつきり言って、いらな

いから渡すだけだ。まあ、いいだろう？

「固法よ、最近働き過ぎではないか？」

「いや、貴方程ではないわ。」

いや、お前の方が働いている。

「ほら。黒豆サイダーだ。少しこれを飲んで休んでいる。仕事は俺がやっておく。」

「あ…有り難う／＼／」

そして固法は黒豆サイダーを持って休憩所みたいなソファーのおいである場所に腰をかけた。さて…仕事をするか。

「霊牙さんの方が働き過ぎじゃないですか？」

出入り口に目をやると、パトロールから帰ってきた飾利がいた。しかし、飾利がパトロールとな。危なくないか？

「いや、それでも「働きすぎです！」…そ、そうか。」

ズイっとどうやって俺の場所に一瞬で移動したのかわからんが、目の前で見上げるように飾利が俺に言う。あえて睨んでいるとは言わん。何故ならば睨んでいるように全然見えないからだ。

「私、白井さんに安らげる場所に誘われているんですよ。よかったら霊牙さんもどうですか？」

ふむ。安らげる場所とな。学園都市にそのような場所があったか？
いや、無いとは言い切れんな。たまには休む事も大切であろうな。

「わかった。では俺も同行しよう。」

「はい！わかりました！」

〈回想終了〉

思えばあの時に断れば良かったのだ。ちなみに俺はお嬢様系はあまり好まん。慢心していそうであまり好きにはなれん。

「ど、どうしても…嫌ですか？」

…佐天が上目遣いでこちらを見る。俺は生憎とそういうのは通用せ

…

「れ、れいがざん…」

飾利は半泣き。むう…むう…むううう…むううううん。

「…わかった。わかったから泣くな。」

飾利の頭を撫でる。

「こ、子供扱いしないでください！／＼／」

「むう…。」

佐天よ。何故羨ましそうに見ているのだ？

「さて…覚悟は…出来…た。さあ、飾利よ。地獄への片道切符を出すのだ。」

「靈牙さん…そんなに嫌なんですか？もう。…すみません。白井黒子さんに…」

あの常盤台よりも厳重な場所だな。ここは。

「ではどう…ぞ…って貴方は！」

俺が通ろうとしたらなにやら飾利に許可を出した奴が俺を呼び止めた。

「ばばば、バトルマスター戦闘覇者！？」

む？なんなのだ？おわ！？

「ふむ。そう呼ばれてはいるが…入って良いか？」

「は、はい！貴方ならば平気でしょう！」

「有り難い。すまないな。」

にこりと微笑み、そして進む。

あああ~~~~~なんて声が聞こえたが華麗に無視した。

入ったわいいが、視線が一斉に俺に向けられた。…誰か胃薬を！

「ん？なんか私たちって、視線感じません？」

飾利よ。それは俺に対しての喧嘩を売っているのか？

「きっと、あたしたちの制服が珍しい」違うだろ。どう考えたって俺であろう。」「あ…。」

二人とも確かにみたいに頷く。や、やめてくれ！

「れ、れれれ靈牙しゃん！とにかく皆さんに挨拶を！そうすればきっと視線がなくなる筈です！」

無理だろう。だが、飾利からの折角の助言だ。やる…か…。

「ゴホン…！姓は黒崎、名は靈牙という。二つ名は戦闘覇者。バトルマスターとも呼ばれているが、二つ名で呼ぶのであれば、戦闘覇者の方で頼む。」

「……………。／／／「「「「「」

黙りこんでしまった。はあ、なんだこれは。

「（ほわあゝ／＼／＼靈牙さんって、こんなにしぶいんですね／＼／＼）」

「（な、なんか黒崎さん…格好良い／＼／＼）」

で、では…これで。

「ぐ、ゴホン！…やあ！皆！お、俺は黒崎靈牙って言うんだ！二つ名は戦闘覇者なんて呼ばれてるんだけど、出来れば普通に黒崎が靈牙ってよんでくれ」

「……………」

し、失敗か。

「…………ブプー／＼／＼／＼／＼／」

な、なにいい！？飾利と佐天以外全員鼻血出して倒れた！

「（…！？！！／＼／＼／＼で、手で鼻を押さえてないと…は、鼻血が…ギャップというやつですかあは！／＼／＼）」

「（πρθψΧφλ！？／＼／＼）」

飾利は悟られた目をした。佐天はトリップしている。どうすればよいのだ！

そして後日、これは深紅の町事件として歴史に刻まれた。

「…やはり帰る。」

流石にもう限界だ。なんなんだここは。俺への視線がかなり…な。

「いい今頃帰るって言われましても！」

「そそそそうですよ！ほら早く行きましよう！」

上が飾利、下が佐天。佐天よ。行きましようという台詞が俺には逝きましようにしか聞き取れん。

帰ろうと後ろに向き歩こうとしたら…

「黒崎さん！平気ですから！」

俺の制服を掴んできた。ああ、言い忘れていたが、俺達全員制服だ。

ツルッ！ビツチャーン！

…後ろで制服を掴んでいた佐天が水溜まりに滑ってびしょびしょに…
ああ…目の毒だ。

「ヒヤッ！／／／」

佐天は手で濡れてすけている胸等を隠す。はぁ。これは俺の責任なのか？

いやだってそうであろう？また常盤台へ行くのだぞ？嫌に決まっている。よりによって黒子との待ち合わせ場所が常盤台の校門前。…当たって粉々に粉碎するか。もう人生を諦める勢いで逝くか。

「「ひゃ！？／／／」」

二人を腰に抱える。

「れれれ靈牙さん！？／／／ななな！？／／／」

「あ、あああたし達を襲う気ですか！？／／／」

「…襲わん。何故この体制から襲うのだ？だが…少し怖い思いするのは変わり無し。」

「「へ？ひゃあああ！！？！」」

氣で身体強化をし、駆け出す。ちなみに、この状態で100mのタイムを測ったのだが、6秒は余裕だった。

場所は変わり、常盤台校門前。そこには黒子と御坂がいた。

そして聞いた最初の言葉が…

「ななな何であんたがいるのよ！／＼／」

はあ。まいったもんだ。二人を下ろし、御坂に話す。

「…はつきり言うつと騙された。が、今はそれどころではないな。佐天をどうにかしてやってくれ。水溜まりにおちて濡れている。」

佐天に指をさす。飾利と佐天は地面にへなりと、まるで屍のように…

「「死んでませんよ！」」

おお。やはりこいつらは読心術の心得があるだろうな。一瞬にして立ち上がる二人。

「とにかくだ。御坂、黒子よ。佐天に何か着る物を与えてはくれぬか？」

「わかったわ。じゃああんたはどうすんの？」

御坂が聞いてくる。

「…では聞くが、男子がただでさえ女子でしか入れん町になお女子

校にまでもう一度足を踏み入れると？俺は勘弁願いたい。故に待っている。」

そして御坂は佐天らを連れて行った。

さて、問題になるのが…

「この場に一人、なおかつ男一人で居るのもきつかった。」

視線が痛い。

なるべく平常心を保つように腕をくみ、壁によっかかりながら目を閉じる。身体の氣の流れを感じとる、いわゆる氣を使うものならば基礎の練習法、集中力を高める。

…が、やはり氣になる。そして暫く目をつむり、氣の訓練をしていると俺の周囲に多数の氣の流れを感じた。目を開けると…

「……ど、どうでしょうか…／＼／」

「佐天さんだけです！」

御坂と黒子、飾利とそして常盤台の制服姿の佐天がいた。

「…まあ、いいのではないか？しかし何故常盤台の制服のスカートはそんなに短いのだ？塵に襲われる確率が上がるな。」

「「大丈夫（ですの）。返り討ちに（するから）（しますから）。」」

御坂と黒子は同時に返答。確かに…強能力者以上の者しか集まらないな。

「…では、行くとしよう。佐天よ。何故ケーキにこだわるのだ？」

「あ、それはここでしか食べれない物があるからです。」

俺の質問に飾利が答える。まあ、いいか。

足を進めようとするが、背後からなにやら少し怒気が感じられる。後ろを振り向いてみるが、誰もいない。が、確かに氣が感じられる。考えられるのは転生者…と思ったが、それなら氣の量が異常。だがそこにいるのは…多分女子。能力者か。

「何してますの？早く行きますわよ。」

「ほらそんなところでボォツとしてないで行くよ！」

「靈牙さん！早く行きましょう！」

「黒崎さん！早く！」

皆からの呼び出しをくらう。まったく、でかい声を出すな。

「うーん！これも捨てがたい！」

：今現在、とあるケーキ屋に来ているのだが、今悩んでいるのは飾利。

「黒崎さんは何頼みますか？」

佐天が聞いてくる。ふむ。俺は：何でもいいか。

「では佐天と同じので良い。」

「黒崎さん：／／／」

「むう。」

「はあ。」

何故か飾利、御坂は妬ましそうな視線を。黒子は呆れている。

そこで俺の携帯が鳴る。

「むう。すまん。少し待ってくれ。」

携帯電話をポケットから取り出し、通話をする。

「もしもし。」

《あ、黒崎さん。固法よ。》

…仕事か？

「なんだ？書類にミスでも発見したのか？それとも暇な故俺を誘いに電話したのか？」

《ば、馬鹿な事言わないで／＼／…それで本題なんだけど…》

内容は事件の事だった。内容は常盤台の生徒の被害。何の被害かは実際映像で見せた方が早いらしい。どうでもいいがな。

「了解した。では、黒子と飾利を連れてそちらに行く。」

《ええ。じゃあ待つてるわ。》

携帯電話をきり、黒子と飾利に一言いう。

「仕事だ。」

この言葉で理解出来るだろう。

「今すぐ来いとの事だ。」

「了解です（ですの）。」「」

さて、佐天らはどうするか。

「御坂、佐天。すぐ戻る故、頼んでおいてくれぬか？」

「わかりました…。」

残念そうにする佐天。いや何故だ？ケーキが目の前にあるのだぞ？

「あんたも大変ね。」

「ふむ？そうでもないぞ？わざと裏路地へ行き、オロオロした臆病高校生を演じ、そしたら金よこせとくるからな。そこでそいつらをぶっ飛ばして逮捕と。とてもストレス解消されるぞ？」

「…意外とあれね。あんた。」

あれとはなんだ？御坂よ。俺は一応正しい事をしているのだぞ？

「ふむ。では行くか。御坂、佐天。すぐ戻ってくる故、待っててくれ。」

軽く二人の頭を撫でる。

「ん…／／／」

「／／／」

さてと。仕事をとつと終わらせるためにまずは固法だな。

「へ！？／／／」

「な！？／／／」

二人を腰に抱え、そして氣で身体強化。

「なんですよ！？／／ま、まさか襲う気ですよ！？／／」

「れ、霊牙さんなら…／／／」

「襲わんし、飾利よ。お前は先も経験したろ。では…行くぞ。」

「「わひい！！？！」」

先程の様に氣で身体強化をし、そしてジャンプ。多分支部へつくであろつ。

「はひはへほろ…」

「こ、これ程とは…霊牙さんはいつも移動するさいこれで移動しますの？」

「ふむ。いつもは地を駆ける。そして思ったが、黒子の空間移動で行った方が速いのでは？」

「…そうでしたの。」

現在仕事場。風紀委員の支部へ到着。飾利は目を回し、黒子は…ま

あ多少怯んでいる程度。

扉を開けると…

「…随分早いわね。後ろの二人、ほらシャキっとしなさい。」

やはり冷静沈着だな。固法よ。

「それで、詳しい内容はなんだ？」

「それは…」

固法はパソコンのキーボードをうちながら答える。

後ろにいる二人も来た。

「常盤台の学生だけが6人、連続で被害にあってるの。被害者は全員スタンガンで気絶させられてる。」

ふむ。成る程。

「では聞こう。何故殺さないのだ？金が奪われているわけでもなく、ただの気絶。考えられるのは妬み、恨み関係であろう。だがそれだと何故殺さないのかが理解できん。」

「…殺しまでの事を考えるなんて。貴方、ジャッジメントよりアンチスキルに入った方が活躍できるんじゃないかしら？」

アンチスキルには強制的に卒業後入らされている事になっているのだぞ。

「…質問はもういい。ではこの事件を多少まとめよう。犯人は常盤台を狙う者。これから常盤台の学生に被害を出す事が予想出来るが、問題は何故気絶だけなのか。妬み、恨みで犯行を行っているように思える。が、だとしたら気絶のみ。だが妬み、恨みならば気絶だけではない。何かされている筈だと思う。」

「ほえ…。」

「頭の回転もかなり良いですね。やはり流石バト…戦闘覇者ですね。」

飾利よ。関心せずにたまには頭を働かせよ。黒子よ。そこで二つ名は無関係だと思っただが…。

「…流石としか言い様が無いわね。確かに被害にあったのは気絶だけじゃないわ。これを見て。」

そしてパソコンを向けられ、画像が映し出された。これは今まで被害にあった生徒達であろう。

そして俺の思った事は…

「…馬鹿にしているのか？」

「そう怒らないで。これも事件なんだから。」

いやそうだが…。確かにそうだが、これは馬鹿にしているのかと言いたい。はつきり言って、ここまで考えた俺が馬鹿だった。

「…もうわかった。犯人は眉毛でも気にしているのだろうな。それで常盤台となんらかの揉め事…どうせ彼氏が奪われたのなんだのだろう。それでその相手が常盤台の連中だった、と。つまり。ではまとめると犯人は人通りが少ない場所に現れる。」

「それは何故ですか？」

飾利が初めて感心以外にした行動だった。

「それはスタンガンにある。強能力者以上の奴等をスタンガンで相手できると思うか？その者が武術の心得があるのなら別だが…それはあり得ない。だとすると不意打ち、それが姿を消す能力であろう。だがもし能力だとしても人混みの多い所で常時能力を使用する事は不可。故に結局は人混みの少ない場所にいる。」

「霊牙さん…やっぱり天才ですね。」

飾利よ。羨ましいのなら俺が勉強等を教えようか？」

「え？いいんですか？」

しまった。声に出してしまったか。

「…まずはこの事件解決だ。飾利よ。佐天らがケーキを用意し待っているぞ？」

「行きましょう！霊牙さん！」

…はあ。

「…では解決してくる。」

「え、ええ。」

そして俺達は支部を後にした。

しかし便利なものだ。ここは。風紀委員室と言った部屋があったのだが…そこで待っていると電話があり急行。しかしここにはコンピュータひとつ。画面がいくつもあるがな。

「常盤台狩り？」

御坂に事件の説明をした反応だ。

「ああ。俺から言わせればくだらないの一言だがな。連続で常盤台の連中が狙われ、そしてやられる。あ、飾利よ。そいつは多分低い。」

飾利は確かバンクとやらだったか？そいつをあさりコンピュータで調査中。

「何故ですか？」

「いくら探しても無かったであろう。低い能力でも長時間でなければ姿を消す奴ならいるであろう。」

「…これから霊牙さんの言葉をすべて信じます。」

断言するな。確実は無い。

「そして今回も狙われたが、そいつが偶々佐天が勘違いで狙われた。また珍獣を求むハンターの誕生だな。」

今の俺の言葉で理解出来たろう。俺の見た画像、そして…

「ん、んん？」

今起きた佐天に何がおこっているのかも。

さて。佐天の具合を確かめねば。佐天に近づき、頭に手をのつける。ふむ。氣は正常に活動。

「あ、あれ？あたし…え！！？く、黒崎さん！？／／／」

「ああ。大丈夫…なようだな。」

「ち、近い／／／」

…まあ照れるのは良いが…。無言で佐天の目の前に手鏡をもつてくる。

「え？…えええええ！！？」

簡単に言おう。佐天の眉毛が何らかのペンで書かれ、かなり太くなっている。

「くぷぷ…」

後ろにいる全員は笑いを堪えている。はあ。つかれる。

「ああああ！こいつだ！」

佐天は飾利の映した女子生徒を見て叫んだ。煩わしい。

「こいつですよ黒崎さん！」

ふむ。こいつは…異能力者程度か。

「ふふふ…この眉毛の恨み…晴らさぬおくべきか！」

…可哀想な故、無視しよう。

「飾利よ。人混みの多い場所、常盤台の学生があまりいない場所はやらなくていい。」

「了解です。」

飾利が素直になった。とにかく、今は飾利に監視カメラの起動「起動ではないですよ。」…ぐ！煩いぞ飾利！読心術者よ！

「へえ？あんたも弱点は存在したんだ。」

「まさかの機械に弱いとは…多少ですが。」

「黒崎さん、時代遅れみたいだな…。」

煩い！皆して俺を苛めおって！

「…む？いた。そこだな。では現場へ急行だな。」

「え？ちょ、霊牙さん！」

飾利を無視し、現場へ急行。機械は能力を通さぬ様だし、だが俺には氣がある故必要ない。

ふむ。ターゲットは奴か。犯人の背後にいる。さて…鬼ごっこが始

まりだ。

「ふむ。その者。止まれ。」

「！！？」

「佐天の仇、とらせてもらおうか。」

女子生徒は能力を使用。透明になり逃げる。が、俺には通用しない。氣でわかるのだよ！

そして暫くやつを追う。当然の様に。途中、佐天、黒子に合流。今現在も俺を先頭に追っている。

「しかしやつぱり凄いですね黒崎さんは。初春必要ないかも…いや初春！ごめんってば！」

走っている途中、佐天が話しかけてきた。

「ふむ。これも武術。極めれば誰でも出来る…が、そうとう時間かかる。今は追うぞ。」

そして暫く追い続け、とある公園にて犯人はばてて能力を解除。その先には御坂。

「「鬼ごっこは終わり（だ）（よ）。」「」

「なんで…なんで私のダミーチェックが効かないの！？」

だ、だ…なんだそれは？

「だ、だだ…だ…みちえくとやらは能力名か？」

「ダミーチェックよ。あんたともに発音も出来ないの？」

「煩い！」

そして犯人の女子学生はスタンガンを取り出し、俺目掛けてくる。

「これだから常盤台の連中はあああ！」

「…あんな超能力に頼りっぱなしの連中と一緒にするな。さらに常盤台は女子校ではないか。」

スタンガンを普通にかわし、そして手刀をおみまいする。

犯人は気絶。

「…常盤台に妬みがあるのなら御坂を狙えば良いものを。」

「なんで私になるわけよ！」

「気分だ。」

「気分で決めるなあああ！」

御坂の能力を発動する前に御坂の背後にまわり、肩を掴む。

「ここからは俺の領域故、能力は使えん。」

「ひ、卑怯よその能力！／＼／」

はて。何故顔を赤くするのだ？

さて。黒子は飾利にアンチスキルへ犯人確保をした事を伝えるよう頼んだようだ。犯人は取り敢えずベンチに寝かせるが…

「…佐天よ、よせ。」

「いいんですよ。へっへっへ…仕返しは必要ですし…」

佐天よ。そのマジックペンをしまうのだ。

「さうて、どんな眉毛にしてやる…う…」

やはりか。佐天は犯人の前髪をどかしたが、その眉毛は太く、そして短い。後ろの方々も呆然だな。

「ん…ん？きやあああ！！！」

目覚めた犯人は佐天の手をどかし、そして眉毛を隠す。

「……笑えばいいじゃない！！彼のように！！」

「…「彼？」」

はあ。これでよめないのらば風紀委員としてどうかと…。後ろのお三方。今説明する。

「…予想だが、お前には彼氏がいて、そやつに眉毛の事を馬鹿にさ

れ別れ、そして別れた彼氏は常盤台の連中と付き合っていた。」

「……。」

図星か。

「くだらん。何故お前の眉毛を馬鹿にせねばならぬのだ？世辞にか聞こえんが、可愛い方だぞ？」

「！？／／／」

ベンチに座る犯人に視線を合わせる。

「名は？俺は姓を黒崎、名を霊牙という。」

「…重福。」

「そうか。ふむ。姓としては良い姓だな。」

ベンチから立ち上がり、重福に手を差し出す。

「…その様な下らぬ事、もう忘れろ。お前はお前、普通に堂々とすればいい。」

「…はい／／／」

重福は手を受け取り、そしてベンチから立ち上がる。

「あの…有り難うございます。／／／」

ふむ。それ程大人しいやつであつたか。それなら有り難いまでだ。

「礼する程では無いと思うが。」

「あの…また会えます…よね？」

「ああ。簡単に言えば、風紀委員にでもなれば会えるかもな。」
そして俺は御坂達の元へ向かった。

「「……。」」

そして薄いが殺気と強大な怒気が感じられる。

「…む？」

「あああ…もうムカつく！」

御坂が電気を拳に纏わせて殴りかかってきた。能力で打ち消せるが、殴る行為までは防げぬ。それを氣の硬化で防ごうとしたが…可哀想故受けた。…むう。痛い。

さて。はつきり言おう。^{カオス}混沌だ。

「ななななな！霊美ちゃんが珍しく来ないと思ったら霊牙ちゃん！また新しい女の子を連れてきましたね！」

「ちょっとあんた！何よこのチビは！あんたロリコンなの！？」

「（黒崎）（霊牙）さん！」

：現状を説明しよう。帰宅時、御坂は“何故か”俺の家で飯を食うと言い出し、それにつられ飾利、佐天も“何故か”ついてきた。そして黒子は“何故か”霊美の元へ向かった。

そして俺はロリコンではない。

「ロリコンとなると、お前らも充分ロリになるのではないか？」

「『誰が子供（よ）！』」
（ですか）

素晴らしい程に重なった四人。

「はて。むう。どうすれば良いのだ？」

「先手必勝です！」

「『あ！』」

小萌は目に見えぬ早さで俺の膝の上に座った。

「あ、あなたはなんなのですか！」

飾利が必死に発しているのがよくわかる。

「私は霊牙ちゃんの彼女です。貴女はもう知ってますよね？」

「知りませんよ！」

飾利よ。やめてくれ。小萌。冗談はよせ。

…その後、まだまだ混沌は続き、深夜までこのカオスは続いた。皆、学生故時計を見たら青ざめた顔して帰っていった。

都市伝説（前書き）

頑張ったのですぞ！頑張りましたぞ！苦し紛れでもうしわけありませんが、どうぞご覧ください！

都市伝説

…むう。

「ね、ねえ黒崎？ごめんってば。」

………むう。

「霊牙さん、ほ、ほら御坂さんだって謝っているんですよ？」

「…余計だ飾利。」

「ふえええん！佐天さあああん！」

「は、ははは…はあ。」

「はあ、冷静沈着な殿方かと思ったら意外と小さな事をねちねちしますのね。神経質な男はモテませんことよ？」

「煩わしいぞ黒子。別にモテたいわけではないから別に良い。」

「霊牙さんがここで鈍感を発動させるとは…私の薬が必要ですか？」

「霊美。黙れ。」

遅くなった。状況を説明しよう。今はレストランであろう場所で俺、黒子、御坂、佐天、飾利、霊美がいる。そして俺は今御坂に激怒中。周りからしたら拗ねているのか？むう。

〈回想〉

俺こと黒崎靈牙は夜の散歩をしていた。超能力の勉強は難しい。いろいろ厄介だ。何故武術をしないのだ？ただ練習するだけなのだぞ？なのに脳をなんちゃらかんちゃらと、何が非科学的だ。氣がそれ程非科学的なのか？どうでもいいが、そもそも非科学的とはなんなのだ？この都市では誰もが使うような感じがするのだが…ん？御坂？

御坂がヤンキーに絡まれてるな。確かに御坂は可愛いが…あくまで可愛いだけだ。本当の御坂を知るとっ…ん…となるだろう。

「ん？おう。靈牙じゃねえか。」

「ふむ。当麻か。その隣の女性は？」

当麻と遭遇。当麻の最近の口癖は幸運だに変わってきている。そして今当麻の隣には黒髪の短髪で顔は幼いが、俺たちより一つ年上っぽく、凛々しい感じがする。二人とも制服だ。ちなみに俺も。

「私は高野悦子たかの えこと申します。貴方も当麻君と同じ学校の子？」

「ふむ。そうだが…まずあれを何とかしたいのだが…。」

御坂のところに指を指し、少々厄介事を示す。

「ああ？てめえら、何こつち見てんだ？」

ふむ。怒らせてしまったか。

「なら霊牙、お前の出番だな♪俺は悦子さんを送るから♪じゃあ」

「ふふ…可愛いわね。当麻君。」

「幸運だ〜〜／／／」

…俺から見ても世辞にも可愛いと言えぬ顔をした当麻が去っていった。まあ、この様な感じだ。どうやら当麻の幸運だの原因は悦子とやらにあつたらしいな。これがリア充というやつか。

霊牙、お前もな。

では助けるか。確か…ふむ。あつた。

「貴様ら。やめたらどうだ？風紀委員だ。今なら未遂で済ませてやる」「おらああああ！！」「…人の話を最後まで聞けぬのか？」

向かってくるヤンキーを手刀で仕留める。

「…」「おらああああ！！」「…」

多勢に無勢だから余裕と思ったら間違いだ。襲ってくる馬鹿を手刀で全員気絶させる。

「大丈夫か？御坂よ。」

「へ？あああ、わ、私は大丈夫！大丈夫よ！／／／」

「そつか…。ふむ。良かった。」

御坂にそう言つと何故か俯く。ふむ？どうしたのだ？

「……いやああ！／＼／」

いきなり俺に拳が飛んできた…飛んできた？

バキッ！

く回想終了く

というわけだ。

「納得出来る説明を頼む。何故いきなり殴ったのかを…な。」

「そ、それは…」

僅かに怒気を当て、罪悪感を増やさせる。まあ、その辺りにするか。

「すまない。少し苛めすぎた。御坂、もう気にせんよ。」

そう言つて、御坂の頭を撫でる。

「くくくッ！／＼／」

「くく。むう。」

「はあ。」

「……………」

御坂は照れ隠しか俯き、そして佐天と飾利は…なんなのだ？黒子は溜め息、霊美は…無言で薬をとらないでいただきたい。恐い。

「そ、それはともかくだ。歩いている途中、都市伝説とやらがあつたのだが…それはなんなのだ？」

「都市伝説に興味があるんですか!？」

キラキラとした目で佐天が話してくる。

「い、いや俺は…たまたま見ただけだ。ゆ、故に内容はわからんなだが…。」

「では霊牙さん。ちょっとまっつて下さいね…うんしょつと。」

飾利はバッグからパソコンを取り出す。…こやつ、神だ。折り畳めるものとは言え、それを常時備えている女はいないのではないか？

「え〜と…はい。これですね。」

そして見せてくれたのは都市伝説と書かれたサイト。内容は…なんなのだこれは？

「…脱ぎ女…とな？これはただの変質者、または変態か変人なのではないか？」

「全部同じ意味だと思いますよ霊牙兄様。」

霊美よ煩わしい。少し黙っている。

「…ん？何々？どんな能力も効かない能力を持つ男…しかも二人も…？」

御坂はそれを読み上げると俺を見てきた。…確かに俺だ。

というか、皆して俺を見るな。

「…私、この能力を持つ人、凄く心当たりあるんですけど…。」

「…初春も？あたしも…そしてその人は目の前に居る気がするんだけど…。」

「というより、二つ名で能力がわかる筈…なのに都市伝説に載るとはどういう事ですか？」

「…一人は霊牙兄様、もう一人は元主人公ですか。」

皆俺だと判断。黒子よ。二つ名はあくまで強い能力は防げぬ事になっている。あとつい最近思ったのだが防ぐ方が強い気がするのだが…。いや気のせいかな。あと凄く思った。当麻の能力、かなり弱いかな？右手さえ触れなければ良いのだから多方面から攻撃すればピチユれるのだからな。

「で、ですが霊牙さんは確かに能力を打ち消しますが、強力な力だと打ち消せないんですよ？」

飾利が質問してくる。答えるべきか否か…ふむ。どうせ二つ名で有名？なのだ。教えたとしても支障はないだろう。

「ふむ。それは俺はその打ち消せる結果を出せる。だがそれを自分の意思で切る事も可能。故に俺は身体検査の日に純粹な勝負をしたかった故、能力を発動させずに戦った。結果、強い能力は無効と判断された。」

「…黒崎さん、意外と戦い好きなんですね。」

佐天よ。否定はしないが肯定もしないぞ。ただ調べたかったただけだ。超能力者がどれ程かを。しかし最近猛者と戦っていないな。ふむ。では…

「霊美よ。すまないが勝負を所望したい。いいか？」

「はい、その変わり、負けたらこの薬を飲んでくださいね、あ、安心して下さい。媚薬等ではありません、ただ昔に戻るだけです。」

ふむ。まあいいだろう。目で嘘偽りを言っていない事は確か。だがあれだな。なにか企んでいる。…まあいいだろう。かつて管理者の中で唯一神と同等の力を持ちし者だ。負けんと思う。が…忘れていた。こいつ、あれだ。筋力等はかなり強いだろう。だが…負けん。

「待ちなさい！その勝負、私にも参加させなさい！霊美さん！私にも参加させてください！」

「ふむ？だが御坂には何も「私が勝ったら何でも言うこと聞きなさい！」いや、御坂よ「ああその手がありました」御坂さん、私もそ

の手を使わせていただきます。」「いつから親しくなったの」「わかりました！ですから一緒にあいつにギャフンと言わせましょう！」「…俺の台詞を邪魔する」「フッフッフフ。」「…もうよい。」「

諦めが肝心なのだ。記憶するがよい。

ふむ。その後、取り敢えず解散したのだがまた御坂と偶々合流。コンビニ内で漫画を読んでいた。

「やはりお前も女というわけだったか。恋愛ものに興味があったとはな。」「

「な、なによ！／＼別にいいでしょ！／＼／」

「いや良いのだが読むたびにあわゝとかひゃわゝとか声を出すものなのか？」

「！？／＼別に良いでしょうが！忘れなさい！／＼／」

そしてコンビニを出たら…

「おゝ俺達の学校のエースの霊牙じゃないか！その子は誰だ？彼

女か？」

当麻と会った。

「あのな。誰がエースだ。お前こそ俺ほど範囲は広くないが同じ能力持つてるではないか。」

「けどさ、俺の能力も効かない力を持つてるんだろ？無敵じゃん。」
「いや無敵ではないと思…わなくもないな。」

「彼女…彼女…／／／」

トリップしている御坂を無視しよう。

「ところで、お前は何をしているのだ？」

「ああ。お前今暇か？」

「暇…といったら暇だな。」

「んじゃ、この人の車を探してやってくれないか？何処に停めたか忘れたらしいんだ。」

ふむ。当麻の隣にいる奴が車の停めている場所を忘れてしまった哀れな奴か。そいつは白衣を着ており研究者だと思われる。目の下には隈があり、目は半目の状態。眠そうな目をしているが、どうやら別に本人は眠くなさそうだ。ふむ。眠そうではなく疲れていそうなので表現しよう。

「ではあの人達が探してくれるので。」

当麻は勝手に話をつける。

「すまないね。」

殺そう。当麻よ。マジで殺す。死ね。氏ねではなくて死ぬがいい。

「え…ちょ、まままま待つてよ霊牙さん…僕の力、打ち消せない。貴方の力、打ち消せない。僕、ピチューン！ok？だからさ、そその光る右腕引っ込めようか。ね？」

かなり汗がだらだらと…汚物当麻は処理だな。

「ふむ。いいではないのか？怪我をすれば高野…だったか？そやつに看病してもらえないではないか。」

「そうか！そうだったな！…て無理だ！！上条さん絶体絶命！そのロリ中学生！助けてくれよ！」

…御坂は激怒した。必ずあの汚物を削除しようと決意した…であるう。

「誰が…誰がロリ中学生ですってえええ！！？」

「汚物はゴミ箱に帰るべきなのだよ！！！」

御坂からは大量の電流、俺からは大量の氣が全身を纏う。

「うわあああ！！まずいつて！ちょ！ねえ！！あのロリ…じゃなか

った！あの中学生の電流はなんとかなるけどあれはヤバイって！霊
牙さんやめて！やめて！！上条さん天国に昇る！登る！上るうう
うう！！！」

ピチューン

「効果音がほんとにピチューンになったあああああああ……
……………」。

ふむ。上条は星となった。天へと逝っても元気だな。

さて……ふむ？

「……暑いな。」

そして車探している研究者の女は何故か自分の服を脱ぎだし、そして上は下着のみと…。脱ぎ女とは、こやつの事だったか。

「ななな何見てるのよ黒崎！／／／」

「落ち着け。別に襲わぬから問題無いであろう？してその。今すぐ服を着ろ。非常識かつ変人。」

「…何故水着は良くて下着は駄目なのだ？」

「ふむ。言われてみればそうだな。男なら バキューン！ を見せなければいいと考えられるしな。」

「ちょ！／／あんた！／／女子の前でその発言はないでしょ！／／それより周りを見なさい！」

周りは奇怪な目で我々を見ている。

「…すまぬが、何故白衣を着ていたのだ？今は夏。なのに好き好んで暑くなるものを着る貴女も貴女ではないのでは？」

「あ…そうだったな。」

「馬鹿…なのか？」

「それより服を着ろおおおお！！」

して、ちょっとした騒動がありながらも車探しを再開。手がかりは…確か車道近辺…だったか。無理だ。早く見つからんな。

して今はとある広場の休憩所であろう場所にいる。まあ円いテーブルに椅子四つ。あの脱ぎ女は自動販売機へと飲み物を買に行った。

「はあ…なんなのよ。」

「御坂よ。あれは脱ぎ女ではないか？いや脱ぎ女だ。」

「へ？あんたあの非科学的な話を信じるわけ？」

御坂はまさかと呆れたような表情で言う。

「…非科学的とでも言うが、どちらにしろ実際目の前に居たではないか。しかも女。女がだぞ？御坂が100%常時デレるより珍しいのだぞ？」

「ちよっ！／／／あ、あああんたね！／／／」

「随分仲が良いね。」

「ひゃい！！／／／」

急に帰ってきた脱ぎ女。やはりこいつはあれだよな？脱ぎ女でなければなにか？

女も椅子にすわり、そして買ってきてくれたはいいが、それが…

「…カレースープ。」

「ん？嫌か？」

女が俺の反応に聞いてくる。

「ふむ。嫌ではないが…確かにカレーの辛味…だったか？確かに疲れを癒すとも言うが…この時期に温かいものを渡されても…。」

「そうか…。今の若いのはそう考えているのか…買い直し「いや結構だ。飲み物を奢ってもらってまた買い直せとは言わない。」…そうか。」

こやつ、科学者とだけあってすべての事を論理的に考えているような気がする。

「すまないね。しかし君とはなんだか気が合いそうな気がするよ。」

俺に視線を向け話してくる。それはよかったな。脱ぎ女という名の変態と同類にされたくはないがな。いや、そもそも性別が違うか。

「ふむ。確かに…話し方がなんとなくだが似ているような…。」

「いやあんたみたいに戦国武将が現代を知った状態のような話し方をするやつはあんただけよ。」

失礼な御坂！俺も昔は普通に軽く話していたのだ！なんとなくだがこの話し方になってしまったのだ！

「ん…？君、やけに不機嫌…あ、嫉妬か？」

「うぐ！／＼わ、私がいつ嫉妬したと言っんですか！／＼」

「御坂で遊ぶのは良いが、車を探さなくて良いのか？願わくは日が沈む前に探し出したいのだが…」

「確かにそうね…これじゃ日が沈む前に見つけれれば上出来よね。」

「まっただ。さて…探すとするぞ。」

皆席を立ち、そして少し歩いたその時…

「う、ごめんなさい！」

子供が脱ぎ女の…スカートを汚してしまって…アイスが…まで…凄く嫌な予感が脳裏をよぎるのだが…

「ああ大丈夫だ。脱げばいい話し」阿呆。たわけ。ポンコツ。変態。変人。黒子と霊美同等の変態。子供に悪影響が出るではないか。」
「安心しなさい。私の下着をみて喜ぶ奴はいるはずが「いるから言っているのだ。さらに相手は子供。そのようなものを見せてしまえばこの子の頭の中がバキューン！バキューン！バキューン！や スドドドドッ！しか考えられなくなる頭になるだろう。」…そうなのか？」

「そうなのだ。」

「あああああなたね！私の前でその発言は止めなさい！／＼／＼キーボードにR18がかかっちゃうでしょうが！／＼／」

「メタ発言はやめろ。」

「……………」

とある店内にて、俺は御坂達に待たされている。トイレにて奴等は服の汚れをおとしているとか…。

「…………ふむ？」

ポッケの中にある携帯電話に振動、バイブレーターがはしる。とりだし、中を確認するとメールだった。小萌からだった。

…こやつ、本気なのか？まあ、場所を覚えてくれたのだ。まあいいだろう。内容はこういったものだった。「霊美ちゃんから聞きました。私も観戦しにいきます。霊牙ちゃんの勇姿、見せてください」場所は川といってました。橋の下にいるそうです。」

川といって橋の下。ならばあそこしかないな。

「有り得ないから！！／／／」

御坂の怒声とともにトイレからベルになる。どうやら御坂はなにやらかしたらしいな。

予想通りだった。女を引っ張り連れてきた。御坂は慌てているようだった。電流を流して故障でもさせたのだろう。

「ほら！／／あんたも行くよ！／／／」

「御坂よ。何があつたのだ？」

「な、何でもないわよ！／／／」

「…ツンダラ？ツンドル？いやツン…ツン…ツンドウル？」

「ツンデレの事を言っているのか？」

「ああ、そうだった。確かこういうのをツンデレと言ったな。」

「ちよっ！？／／／あんだね！／／／ああもう！／／／行くよ！／／／」

御坂は強引に俺の手を掴み、引っ張るかたちで店を出た。

「…御坂よ。自分の手を見てみよ。」

「へ？……………キャアアア！！／／／」

バキッ!!!

「おかげで助かったよ。有り難う。」

結果から言つと、車を見つけることはでき、脱ぎ女の車はスポーツカー。それに乗り、俺達に礼を言ってから去つた。日は沈み、残つたのは俺の頬に殴られた後のみ。

「…むう。理不尽な。」

「う、ごめん…なさい。」

本当に反省しているような顔で御坂は謝る。そこに、携帯電話に振動がはしる。

…今回は通話か。

「…もしもし？」

《霊牙兄様遅いです！今何処にいるんですか！》

相手は霊美。携帯電話から放たれた怒声。鼓膜にくるな。

「ふむ。すまないすまない。脱ぎ女であろう奴と遭遇してしま《ほ、本当ですか！？襲われてませんか！？》…その対処をしているのに時間がかかったのだ。」

そういう事にしておこう。面倒でしかない。

「ふむ…ではそちらに向かおう。」

《わかりました♪約束、守ってくださいね♪》

通信切断。さて…

「へ？／／／」

御坂を掴み、氣で身体強化。ジャンプをする。

「ひゃあああああ！！」

いつもの御坂とは考えられない悲鳴の音が町に響いた。これも後に都市伝説に登録されたそうだ。

目的地にはついた。ついたのだが…

「あそこに観客がいるのだが…あの人数は聞いてない。故に退かせ。」

「いいじゃないですか♪」

俺対霊美、御坂という感じで対峙している。そして少し離れた場所には…

「霊牙ちゃん！頑張ってください！」

「霊牙さ〜ん！私も来ましたよ〜！」

「都市伝説の一人、黒崎さん！対するは常盤台のエース、御坂さん！これは見物！！」

「…悔しいですが、霊牙さんが圧勝で終わると思いますの。」

小萌、飾利、佐天、黒子というメンバーがいる。俺の方が御坂より強いと知っているのは小萌、黒子のみ。飾利は互角と考え、佐天はとにかくまだかまだかと楽しみに待っている。ふむ。というか霊美は超能力者かつ経験豊富な奴だと考えよう。しかし霊美は絶対超能力者に入っているのだがその情報が「それは霊美ちゃんの希望でそうしたんですよ。」…ふむ。

ふむ…言わせていただく。それで良いのか学園都市よ！

「では、始めよう。霊美よ。手加減はするな。いくら俺が前より弱くなったとしても経験は豊富だ。お前よりもな。」

「分かりました♪では御坂さん♪いきますよ♪」

「はい！覚悟しなさいよ黒崎！あんたを今度こそ倒すわよ！」

「ふむ。いいだろう。来るがいい。」

結界を張り、霊美の温度操作に備える。確か奴は温度を上げるより下げる方が得意かつ強力だった気がする。

「えい♪」

霊美が足で地面を強く踏むと見事御坂のいる場所と俺と観客以外の場所を氷の地面にした。

「…流石。いくぞ…霊美よ！」

氣で身体能力を強化。氣で槍を作り、突撃する。

「私も負けませんよ♪打撃で勝負ですね♪負けませんよ♪」

そして霊美も氷で双剣を作る。

「…今日は氣のみで相手してやろう。」

「なら私も好都合！」

御坂も砂鉄で剣を作る。

「「はああああ！」」

「やあ」

御坂は砂鉄の剣のリーチを伸ばし、鞭のように操る。霊美は気の抜けた声だが俺の槍と氷の剣が交えても碎けず、さらには抵抗する。

「どれ程頑丈なのだ？」

「温度を操りさらに頑丈にしています」

「私の事も忘れるんじゃないわよ！」

霊美はジャンプして回避、御坂の砂鉄の鞭がこちらにくるが、それを槍で弾き、上からの霊美の攻撃も防ぐ。

「やっぱり霊牙兄様ですね」地面が凍ってるのに効果は皆無ですね」

霊美も霊美だ。氷の上でよく走れるものだ。

「じゃあこれを使っちゃいます」

「!？」

凍っていた氷は水に溶ける。そこに...

「勝ったああああ!!」

電流を流す御坂。水の影響により観客と御坂、霊美以外の場所は電流がはしる。が…

「残念だ。」

能力で打ち消す。やはりこういうのは能力を使わなくてはな。

「無理でしたか。なら私の才略を見せてさしあげます。」

ガシッ！

誰かに掴まれた。それは…

「れ、霊牙ちゃん！／＼／＼、動かないでください／＼／」

「霊牙さん／＼／だ、駄目ですよ！／＼／」

「黒崎さん／＼／動かないで下さいね／＼／」

…何故だ？何故こいつらがここにいるのだ？黒子以外の観客らに押さえられている。黒子？そうだったのか！

「はぁ…疲れましたわ。」

こやつの仕業か！

「動いたら、この人達にも被害が加わりますよ」投降して薬を飲んでください。」

…詰みか。

「…卑怯。」

「卑怯でも結構です♪ん…」

カプセル薬を取り出した霊美だが、それを自分の口にふくめる。まさか…

「ん……………」

「……………!?!?!?」

…口移し…だと?カプセル薬は何故か液体に変わり、それを流し込まれた。

「ガハツガハツ!な、何をするのだ!」

「薬を飲ませただけです♪こうでもしなくちゃ飲んでくれないので♪」

…まあ、確かにそうだが。だが…なんの変化も感じない。普通だ。

「薬の効果は明日に出ます♪楽しみです♪安心してください♪媚薬などではありません♪」

ならいい。が…

「「「「……………」」」」」

佐天、飾利、黒子、小萌が黒ずんだオーラを出しながら微笑んでくる。まで。何故黒子も？後ろからは…

「あんだ…なにやってんのよ!!!」

…御坂は激怒した。必ず何の罪も無い俺を処罰しようと決意した。
…これはまずい。

「撤退ではない！明日への進軍である!!」

「……待ちなさい!!」

これで俺はその後、9時になるまで地獄鬼ごっこは続いた。まさか誰一人とも息を乱さず、さらに飾利でさえも俺を追いかけまわせた事が驚きだった。家に帰ったら小萌に…ビールの口移しを迫られた。まあ、なんとかあったがな。

だが…明日はどうなるのだ？薬の効果とは…いたい…

旧黒崎霊牙（前書き）

戦闘、原作を期待していた方々、申し訳ございません。今回は平和ほのぼの系です。ああ…上手く書けない…では、ご覧ください。

旧黒崎霊牙

〈霊美side〉

ふふふ…

あ、どうもです♪レーミこと霊美です♪私は、霊牙さんに薬を飲ませましたね？その薬…実は…

いやまだ言いません♪やっぱりやめました♪現在私はとあるアパート、自宅にいるんですけど…なかなか寝付けません♪

霊牙さんが…気になって…ふふふ…ギャップが激しい事でしょうね…ふふふ…ああああ！楽しみです！

で、ではなかなか寝付けないので最近趣味になり始めた薬作りでもしますか♪

〈霊牙side〉

…ん、んん！ふぁ…眠い。

どうもです。黒崎霊牙です。あ、そうだ。あれだ。昨日さ、風呂に入ろうと思ったんだけど、風呂の蛇口、シャワー等全ての機能が停止。おかげでもう修理代を払わず、銭湯にするかという事になってこれからは銭湯に通うはめになった。

布団から起きようとすると…

「すう……すう……」

やっぱりか。いつも通り、小萌が俺の布団に入ってきてる。はあ、こんな小さな子が教師をやってるのか。年齢は成人だけだな。

あと、昨日霊美に薬を飲まされたよな。俺、どこか変わった？

いや、特に変化ないよね？さて…今の時刻は5時か…。さて…朝食でも作るか。

6時。そろそろ小萌が起きる時間帯だ。朝食はまあ軽いもの。味噌汁、ご飯、納豆、鮭、目玉焼き。そして小萌の弁当もつめて取り敢えず終了。

「あ、霊牙ちゃん。おはようございます。」

兎の絵柄がある可愛らしいパジャマを着ている小萌。何故こういうのは子供なんだ？

朝食を卓袱台へと運び、小萌にあいさつを返す。

「ああ、おはよう小萌。朝食出来てるぞ？早く食べよう。」

…ん？どうしたんだろう？小萌の目が点になってる。

「…靈牙ちゃん…ですよ？」

？？

「うん…いつもと変わらない黒崎靈牙だけど？どうしたんだ？」

「いや、なんか…雰囲気が柔らかくなったというか…」

「とにかく朝食食うか。早く支度しよう。」

そして朝食をとりはじめた。

俺はいつも電車でなく走って行く。そっちの方が速い気がするからな。だが、今回は電車で行くことにした。眠いし…たまにはいいよな。

6時半に電車に乗るんだが、早すぎる…時間が…。教師はそのくらいがいいと思うんだけど、俺にしてはやっぱり早すぎる。電車が揺られ、揺れる度に人とぶつかる。通勤ラッシュってやつかな？社会人にしては少なすぎる。けど学生も少しはいる。少しだけど…。うん…多分次の電車だと学生だらけになると思う。…登校ラッシュ？

小萌は俺の下で制服に掴んでいる。妹みたいだなあ。

ガタン！

「おっと…」

「ひゃ！」

…またぶつかってしまった。はあ…。

「あ、すいません。大丈夫ですか？」

「い、いえ…」

女性社会人にぶつかった。女性専用車両に乗ってくれよ。物凄く気まずいんだけど…。

…あ、痴漢？しかも俺の目の前で？

「小萌、次の駅でいったんおりるから先行ってて。」

「あ、はい。」

おっし。仕事やりますか。

く小萌sideく

…まず、一言言わせていただきます。

霊牙ちゃんが変です。

なんというか、いつもより柔らかい、んですよ。優しくなったというか…つまり…

「あの霊牙さん…いい…／／／」

あわひやわ…今絶対顔紅いですよお／／／原因は多分薬ですね。いつものもいいですが…これは…最高／／／

「えへへ…あ…／／／」

先程霊牙ちゃんとぶつかった人も鼻をおさえています。

わたひももうむいでふ…は、はなが…／／／

く霊牙sideく

「はいはい。煩わしいよ。静かにね。」

変態確保。直ちに逮捕…と。ああ、どないしようか。遅れる…あ、

そつだ。駅員にでも預けるか。手錠はかけたし…抵抗しないだろうしな。ここの世界の手錠はかなり頑丈だしな。

あ、その駅員さん。風紀委員です。こいつを逮捕したのでアンチスキル等に連絡してください。え？やだ？なんですか？恐いから？はあ…仕方ない。学校に遅れる事前提…いや氣で身体強化をして…うん。間に合うかな？いやその処理があるしなあ。

…はい？あ、はいはい。先程痴漢にあつていた方ですか。え？お礼？いやいいですよ。え？やらないか？逮捕しますよ？女性が簡単にその言葉を口にしてはいけませんよ。

「ぶるうううああああああ！！」

…犯罪者がいきなり狂って叫び始めた。怖いよ。やめて。

…ふう、逮捕完了つと。

氣で身体能力強化。いつきにジャンプしてアンチスキルに預けた。凄く困っていたが、まあいいだろう。だって面倒だしな。今の時間は…

「…8時45分…か…」

終わりました。ああもう終わった。小萌の説教確定だよ…はあ。

氣を最大に使い、かなりのスピードで学校へ向かい、到着。

只今廊下を通ってますよ。教室に到着。教室の扉を開けます…さあ、地獄の始まりだ。

ガラッ

「遅れました。申し訳ないです。」

…まあ、ホームルームをしていた。が、一斉に俺に視線が向けられる。どうしたんだ？

「……………は、はひ！ではちゃ、着席してください！」

小萌が指示をだし、そして自分の席へと向かう。

「…お前本当に霊牙か？」

当麻がわけのわからん質問をしてくる。

「いや、俺は俺だぞ？どうしたんだ？」

「ちゃうやろ！いつもの黒やんちゃうで！」

青髪ピアスのツツコミ。なんなんだ？

「黒やんがさらにパワーアップして帰ってきたにや〜。」

久々に台詞を聞いた気がするが…土御門もわけのわからん事を…。

「靈牙…周りを見ても。」

「周り？……？」

皆鼻をおさえているが、どうかしたのか？

「…はあ。上条さんはこれ以上助言できませんよ。」

??

学校終了後、向かう所は風紀委員。凄く思っただけど、風紀委員
って中学生ばかりだよな？俺なんか行つて大丈夫なのかな？ま
あアンチスキルに入る事は何故か決まっちゃってるから高校やめて
風紀委員やめても就職には困らない。…余談だったか？

なんだかんだで支部の前についてた。…よし。扉を開けて中に入る。

「あ、霊牙さん。遅いですよ。」

「お邪魔してるわ、黒崎。」

「あたしもお邪魔してます。」

中にいたのは飾利と佐天、御坂がいた。固法は…仕事か。そして黒
子はこの場にはいない。多分事件かなんかか？

「ん？佐天も御坂もいたのか。んじゃちょっと待ってて。紅茶でも
準備するから…って、なんだ？どうした？」

目が点になつてゐる佐天、パソコンで入力していた文字がバックス
ペーを押したまま固まり、文字がどんどん消えてくのに気づかない
飾利。手にかけていた棚の書類を全て落とした事に気づかず、こち
らをみて固まる御坂。固法までもがシャーペンを落とし、固まっ
ている。

「……ええええ！?!?」「……」

…う！耳に響いた。ああ、耳がキンキンする…。

「ど、どうしたの!? あんた！前まではもつと渋いのにな今の話し方

はなに!？」

御坂よ。わかったから胸ぐらをつかむな。

「いや、俺にもなにがなんだか…そして俺は今まで通りなんだけど…そして後ろの書類片付けろよ。」

「へ…あ!！」

やってしまったと大慌てで書類を集める御坂。

「飾利も。パソコンの画面見ろよ。」

「へ?ああああ!！やってしまいました!！」

真っ白になっている画面を見て大慌てになる飾利。はあ。

「…ああ、薬のせいね。」

今現在はソファで皆と何故か俺について話し合っていた。俺を挟んで。しかも固法も。

御坂がそう結論付くと固法以外みな納得した。そして固法には飾利が何かを話した。そして固法も成る程と納得しだす。なんなんだ？

「んで、今日の仕事は？」

「え？あ、今日はパトロールだけでいいわ。」

…？何故？

固法は気をつかつてくれているのかな？まあなんだ…固法ってやっぱり働き過ぎだよな？

「いや、いいよ。固法こそ休憩とつて。俺が黒子の出した大量の始末書やらなんやらを」「貴方こそ働き過ぎ（よ）（です）！！」「…？」

どこが働きすぎだ？そして飾利。お前までどうして…俺に味方はいないのか？

「…そんなに仕事してるか？」

「「「（はい）（ええ）。」「」」」

いや、ここにいる全員に頷かれても…。

「私達の仕事は確かに減ったわ。人材不足で書類の処理がなかなか終わらなかった時が嘘のように。」

「ですけど、霊牙さんは通常の5倍はやってる気がします…いや、やってます。」

「あたしも何度か覗いたけど…凄いスピードでシャーペンを動かしてたね。」

「そう言えば、あんた確か山が出来てる書類の量を仕事してたわよね?」

「『『『よって働きすぎだなのは(貴方)(霊牙さん)(黒崎さん)(あんた)だと思(います)(うわ)。』』』」

…はい。分かりました。もう諦めましたよ。

では、行きますか。

「あら? 霊牙さんではありませんの。」

日が沈みかける頃、黒子と公園付近で会った。

「ああ、黒子か。仕事ちゃんとやってるか?」

「……………」

…予想出来ると思うけど、黒子も目が点になっている。はあ、なんなんだよ。

「…あ、霊美さんの薬ですね。」

一人納得しだす黒子。はあ、疲れる。

「泥棒!!」

「!!!!?」

声のした方を向く。じいさんがバッグを奪われていた。しかも数人の男どもから。

「黒子!やるぞ!」

「了解ですの!」

氣を纏い、身体能力を強化。後を追う。

男どもは裏路地に逃げ込んだ。はあ、裏路地ならとことん戦える。

「貴様ら止まれ!!」

声を張り上げ、男どもを止める。数は…5人…いや、10人…隠れているな。

「風紀委員だ。投降してくれば怪我しなくてすむんだが…どうだ

？」

そして男どもは笑いだす。何かある…見たところ全員Level2以下だが能力持ちだろう。一人Level3がいるがな。

「おい風紀委員とやら。なら相手になってやんよ。はやくかかってこい。」

…挑発行動。やはり何かあるな。氣で探知。男どもは…すぐ前にゴミ箱がある。それに隠れてるのか？

「ジャツジメントですよ！」

…黒子登場。まあいいか。

「ああ？餓鬼か？なんだ。ジャツジメントもたいしたことねえな。」

こんなバレバレな挑発には黒子はのらないだろう。は、もっと戦略の勉強をしてからくるんだな。

「…上等ですよ。」

…付けたし。黒子も勉強しろ。そして黒子は男どもに突っ込む。いやまずいだろ。

「きゃあ！？」

…やっぱり。伏せていた野郎ども5人のうち一人が鉄の棒で黒子の頭に一撃。…血？血が出るよ…。というかなんで5人も伏せるのだろうか…いや今は…復讐！

「…我が友を傷つけたな？塵共。」

殺気を全開。全員にぶつける。伏せていた奴も震え上がり出てきた。

「…我を怒らせたのだ。死ぬ覚悟は出来ているか？」

覇気を思いっきりぶつける。あ、全員気絶した。まあいいだろう。
よし、あとはアンチスキルに任せるか。

黒子を公園のベンチに寝かせ、頭の治療をする。

氣を流し、頭の傷口を塞ぐ。うん。いい音したのに軽傷だったな。

「う……う……う……れ、霊牙さん？」

目がさめたか。

「ああ。皆逮捕したぞ。ああ、治療しといたからもう平気だと思うぞ。」

「お疲れ様だ。」（前書き）

…ええ。久々の投稿です。

何故かヒロインが固法っぽくなってしまっているような…。

まあ、すみません。先に謝つときます。…駄文で。

今回は少々長いですが、ご覧ください。ちなみに、原作とは似てい
るようで似てません。

「お疲れ様だ。」

ダンッ！！

「黒子は私のお母さんかああ！！！」

「わわわ！御坂さん落ち着いて下さい！」

「ふむ。御坂よ。とにかく周囲を見渡せ。胃が爆発する程に痛い視線を受けているぞ。」

「いや霊牙さん…爆発っていう表現は少し…。」

霊牙だ。

とあるレストラン。その店の名前は覚えていない故、よく俺が行く場所をとあるレストランで言おう。とにかくだ。今現在は御坂に愚痴を聞かされている。内容は簡単にまとめよう。

黒子が煩わしい。

ふむ。実にわかりやすい。我ながら流石だ。御坂が毎回毎回、じゃじめん…ごほん！ジャッジメントの仕事に首をつっこみ、そして乱闘。あたりはボロボロ。愚痴を聞いているが、実際御坂が悪いように聞こえてくるのは俺だけであろうか？

遅れたが、今は俺と御坂、そして飾利というメンバーで来ている。

「そこんどこと思うー！！」

「先ずは座れ。恥だぞ。」

「…！？あ、あはは…／＼／」

顔を真っ赤にして席につく。はあ、学校休みであるが折角の休みはのんびりと過ごしたいものだ。たまにはな。

「けど変わりましたよね。霊牙さん。」

ふと、話しかけてくる飾利。薬を使った後、良く言われるのだが…。

「ふむ？そうか？」

「ええ。変わりました。ですからもう一度この薬を「飾利よ。やめてくれ。」…ふう。」

口を3の形にしてぶーたれる。しかしその薬は何処から出したのだ？

「しかし俺達は仕事、平気なの「平気です。」…いや、すまないがそうは思え「平気よ。」…ふう。」

せめて最後まで台詞を言わせる。そして御坂までもが…。

「御坂よ、黒子は御坂を心配して言っているのだぞ？」

「私は心配される程弱くないっつーの…。」

「一回黒子の気持ちも考えてみよ。もしもの…もしもの事を考えるとそうなってしまう。御坂はいくら強くても一般人。故に事件に巻

き込ませたくないのだ。分かるか？」

「…（そう…よね。多分心配して黒子は言ってくれてんのよね。けど…その優しさが私にはイライラしてしまう…）」

「それに…俺にとつても御坂は大切な存在だ。故に失いたくない、怪我してほしくないと思っ。勿論、大切な存在の中に飾利も入っているがな。」

我ながらくさい台詞をよく言えたものだ。隣に座る飾利の頭を撫でる。

「えへへ…大切な存在かあ…／／／」

「あ！あんた！／／／あんたねえ！／／／」

目を細め、気持ち良さそうな表情が見える。御坂は…ふむ。ツンデレというやつだな。

「く／／／」

喜んでいいのか照れているのか…。飾利はよくわからん表情をするな。ふむ…

頭から手を離す。

「あ…」

「……………」

もう一度撫でる。

「ふふ／／／」

「……………」

もう一度離す。

「あ……………」

「……………」

ふむ…。なんか楽しい。もう一度撫でる。

「ふふ／／／」

「……………」

そして離す。

「あ…霊牙さあん…／／／／」

む！？これは危険！飾利の目がトロンとなっている…ふふむ。そろそろやめよう。

「あ、あんだねえ…／／／」

なんだね御坂？お前も撫でてほしいのか？ふむ…。っと。注目の品が運ばれてきた。

「お待たせしました。ポテトをご注文の方は？」

「ふむ。有り難い。俺だ。」

「あ、黒崎さん。いつも有り難うございます。」

「いや。君も頑張るな。ふむ…メロンソーダも俺だ。」

「ふふふ…はい。お待たせしました。」

コトンツと音とともにテーブルの上にメロンソーダ、ポテトが俺の目の前に置かれる。最近、これが好きになってしまったな。

「ふむ。そのどでかいパフェは飾利、お前が頼んだのか？」

「はい。そうですけど…？」

御坂よ。若干引くのもわかる。甘ったるそうなものがわんさかのっかっているようにしか見えんからな。

飾利の目の前に、顔より若干低いぐらいの高さまでのパフェが置かる。

「ご注文は以上でよろしいですか？」

「ふむ。君も仕事頑張れ。」

「で、では…／／／」

そして足早に俺らの席から店員は離れる。どうしたのだ？

「はあ…本当に変わったわね。」

「ええ…。まさに鈍感！というのが増幅されてますね。」

「増幅って…。」

御坂と飾利よ。鈍感ではないぞ？不意討ちは俺には効かん。

ふ…ふむ。

「こんなところで何してますの？初春？」

「ひい！？し、白井さん！？」

俺達の座っている席の隣にいつの間にか黒子。

「ふ、ふむ。黒子よ。とにかく落ち着くのだ。」

「貴方はこの薬を飲む事ですよ？」

…む、むう。霊美よ。お前はいつたいどれだけの者に薬を渡したのだ…。

「べ、別に霊牙さんの薬を飲んだ状態をもう一度見たいわけではありませんことよ／＼／」

御坂感染病。黒子も御坂キャラとなってしまうた。

「断ろう。そして仕事はどうしたのだ？」

「は！？そうでしたの！初春！行きますわよ！！」

「ああ、ああああ！！まだパフェが！パフェ！！！！まだ一口も食べませんよ！！！！」

「そんなのは仕事を終わらせた後ですわ！」

「うえ～～ん！」

滝の如くの涙を流しながら黒子に連れていかれた飾利。ふむ。不幸なやつよ。…いや、まて。今日の前にはとにかく甘ったるいものが大量に詰め込まれているパフェ。多分飾利は戻ってこないだろう。ふむ。つまり金を払うのは良い。良いのだが…

「…これは誰が食べるのだ？」

「さ、さあ…。」

「……………」

「…御坂よ。女子は確かデザートは別腹だと聞いた事があるのだが…。」

「い、いやそれは初春さんだけのような…。」

「……………」

「俺はポテトがある。故にこれは御坂が食べ。」

「い、いや私だって嫌よ！」

「……はあ。」

結局、吐き気がする程甘ったるいパフェは食べきれた。ふむ。御坂と半分だな。

「……うう。」

「……／／／／／」

取り敢えず店から出る。ああ、気持ち悪い。やはり俺では無理だ。しかし、先程から何故顔を赤くしてるのか？御坂よ。

「……む？御坂、それは飾利のか？」

「え？う、うん／／／」

…はあ。なんなのだ？ただ一つのパフェを二人で食ただけであるう？

「あ、あんだねえ！／／／それがどれ程のものか分からないの！？」

／／／

…心を読むな。御坂よ。

さて、今御坂が持っているものは飾利が付けていたじゃっしむ…げふん！ジャツジメントの付ける勲章を持っている。

「いや、あんたね…勲章だけど…勲章って…。」

「いいではないか。響きがこちらの方が言いからな。」

そしてもう一度…言わないが言おう。心を読むな。いつかは俺のプライバシーの侵害までいきそうだ。

店を出て数歩歩き、歩道に出たところで俺と御坂を呼び止める声が…いや、正確には注意か？

「その貴方達！ジャツジメントの仕事はしてるの？」

固法だ。ふむ。固法がパトロールとは…珍しい。

「あれ？貴方…黒崎君？」

む？“さん”から“君”に変わった。ふむ…まあいい。

「ああ。今から俺は仕事にうつろうとしていたのだが…というより固法よ。お前は休んだ方が良くはないか？」

「寧ろ貴方の方が休んだ方が良くいわよ。」

「仕事をしろみたいな事を言っときながらか？」

「それは貴方と認識出来てない時に言ったからよ。それよりも、その子は新人？」

ふむ？俺以外にここにジャッジメント…おお、出来た出来た。とにかくジャッジメントは俺と固法以外いないしな…誰の事を…

「はい！私は今日からジャッジメントに入らせていただきました、御坂と申します…！」

…なんだ？御坂よ。お前はまだジャッジメントに入っていないではない…む？腕に付けているのはジャッジメントの…あ、成る程。黒子を見返してやろうという魂胆か？まあ、いいだろう。今日ぐらいは協力してやろう。

深く、これでもかと、はつきり言って90度くらい頭を下げた挨拶をしている御坂。そこに御坂の頭に手をのつける。

「ふえ！？／／／」

「ふむ。そういうことだ。故に、俺がこの子とこれからパトロールをしてジャッジメントに慣れさせようとしていたのだ。」

「え、ええ。だけどこの子、何処かで見た顔だったわね…それに御坂…聞いた事ある名ね。」

「（ギクッ！？）」

頭を下げたまま体をビクッと震わせる。

「うん…あ、思い出したわ。確かレール「固法よ！すまないが耳を貸せ！」え？ちょ！黒崎君！／／／」

一瞬を越える速さで固法に近づき、そして御坂に聞こえないように話す。

「すまないが、御坂には新人という事にしてくれないか？」

「え？どういう事？」

「実はな、黒子と…な。察してくれ。今回はジャッジメント関係だ。とにかく、今回御坂にはジャッジメントの新人としてやらせてやってほしい。頼む。」

「…わかったわ。仕方ないわね。」

「ああ。すまない。」

こそこそと話すのを止め、再び御坂の元へと戻る。

「…という事だ。すまないが、今日一日俺達の仕事に付き合わせていいか？」

「ええ。じゃあ早速、依頼が来てるからいきましょ。」

「は、はい！！」

固法を先頭に、依頼された場所へと向かった。

「ね、ねえあんた…これって何？」

「何とは何だ？わかるだろ？掃除だ。清掃とでも言った方が分かるか？それと俺の事は黒崎先輩と呼べ。」

依頼場所への到着。この場所を一言で表現するならばこうだ。

塵拡散！

ふむ。いまいち駄目であつたか。つまり塵が散らばっている状態の場所だ。先ほど、俺と御坂の会話のように俺達は塵拾いをしている。

「いや、いいでしょ別に「良くない。」いや、だから「黒崎先輩と

「あ、あのね「黒崎先輩と。」…わ、分かったわよ！あの…く…黒崎…せ…先…輩…／／／」

……。

何だこれは？ギャップというやつか？むう。これは俺でも頭を撫でたくなる。キモいと思った者よ。安心しろ。俺自身自覚している。だが見てみよ。上目遣いでなお、恥ずかしいのか頬を朱に染めて、その状態であの台詞を吐かれてみよ。俺でなかったら拡散するHA

NA DIを発動させていたぞ？

ナデナデ

「な、なななな！？／／／／」

御坂の手に持つているのは塵袋。そしてビニール手袋を片手につけている状態。その片手の塵袋を落とした。…何故俺の手が御坂の頭に？

「こ、こらやめなさい黒崎君！世間ではそれをセクシャルハラスメントって言うのよ！」

…ふむ。せめてセクハラと言えよ。分かりづらい。

「……お前もやって欲しかったのか？」

「べ、別にそういう事を言ってるわけじゃ／／／」

はあ。ため息が出る。

しかし何故すぐ目の前にゴミ箱があるのにゴミ袋を用意しているのかは不明だが…気にしたら負けだ。

「ふむ。御坂よ。何故俺が中学校にある風紀委員に入っているかは知らんが、風紀委員とは名前通り、風紀を乱さないために作られた委員のようなものだ。故に塵拾いも立派な仕事である。以上だ。」

「あ、あまり納得出来ない…。」

「いいではないか。早く塵を拾う。とつとと終わらせる。それと敬語を使え。」

「う…は…は…はい／／／」

……。

何故上目遣いで敬語になった瞬間それなのだ？左手よ。よくわからん衝動を鎮めたまえ。…実は変態だろ。みたいな目で俺を見つめるな。誰もがそうなるであろう。先程のような状態でまた返事までもがこれでは…多分、俺でなかったら襲うぞ？鼻血を出しながら確実に。

「御坂ちゃああああん！！！！」

…誰かの叫び声が聞こえた。ふむ。とにかく全力で氣を撃ち込もう。

「ぶるわっは～～～ん！！！！」

…謎の男は吹っ飛んだ。俺の氣によりな。

さて…仕事だな。

そして、俺達は仕事を進めていった。

「はあゝ。もう疲れた…。」

「ふむ。良く頑張ったぞ御坂。」

「……………あんた確実に変わったわね。」

何処がだ？

まあともかくだ。仕事を軽くはいはいとすすめていったん休憩とし、とある広場のベンチに腰かけていた。固法は自販機へ行き、飲み物を買ってきてくれている。

御坂は疲れた疲れたとわめいているが、実際俺の方が疲れた。効率は悪く、さらに足手まとい。だが本人の目の前では言わんぞ？なにせ一生懸命に働いたのだ。そんな事言える筈もない。

まあ、とにかくだ。こんな事があった。

（回想）

とある歩道にて。

暫くパトロールを続けていると、女子中学生と思わしき人に道を訪ねられた。

「うーん…ここじゃない…えーっと…」

…御坂は一人、後ろで地図を見ながら頑張っている。その間に俺達は…

「ええ。そしてその信号を右に曲がれば見つかる筈ですよ。」

「はい！有り難うございます！」

「不良に絡まれんようにな。では達者で…気を付けてな。」

「は、はい／＼／」

女子中学生は去っていった。…御坂よ。仕方ない事だ。

「あ、ここね！わかりまし…た…？」

「…もう済んじゃったわよ。」

「え……はあ…。」

がつくりと肩をおとしている御坂。

「まあ、次は頑張りましょう？御坂さん？」

「は、はい！」

とある河原にて。

「む？君、どうしたのだ？」

「あ、おにちゃん…ふうきいいんのひと？」

「ああ。お困りの様に見えて来たのだが、どうしたのだ？」

「でんちいれたのにラジコンがうごかないの。」

河原にて、少年が困っていそうな故、駆けつけてみたらヘリのラジコンが動かないようだった。ふむ。これは俺でもどうにかならんし…どうしたものか？

「あ、それなら私の出番ね。」

御坂がラジコンの前に座り、そして指をラジコンに近づける。そして…電流を流したようだ。が…量が多すぎないか？

だがラジコンは動いた。が…上空で再び動きが止まり、そして…

ドボン！

「「「「……。」」」」

川へと墜落。

この後、弁償として俺の財布から1万とられた。いや、何故俺しか払わんのだ！？親が来たなら普通払う筈であろう！？

これはある意味痛い仕事であつた。

とある裏路地にて。

パトロールを続けていると、男が女に話しているのが発見。…女は嫌な顔はしていない。つまり恋人？いやナンパをしていたらいい感じになつたようなものか？

「あ、あああ！」

…嫌な予感しかしないのは俺だけであろうか。後ろを振り向くと…

「な、なんだ！？」

「きゃあ!？」

御坂が先程の男女の中に割り込み、女を連れ出していた。はあ…

「御坂よ。やめよ。その方は不良の馬鹿ではない。」

「え!？あ、ご、ごめんなさい!／／／」

恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして女の手を離し、俺の後ろに素早く移動した。

「…すまない。その殿方。お怪我はございませぬか？」

「へ？あ、いや。大丈夫大丈夫。彼女も勘違いでやっただけだし、平気平気。」

深々とお辞儀をし、謝罪をする。男は恐縮のように、逆にペコペコしながら平気平気と言っている。…お辞儀しながら平気平気とは…なんなのだ？まあ、よい。

「すみませぬ。では、我々は立ち去ります。では……………？」

立ち去ろうとしたのはいいが、女が俺をぼくっとした顔で見ている。

「…俺の顔に何かついてます？」

「…へ？あ、いやそういうわけでは!ただ…少し見惚れ…／／／／」

「な!？」

…最後のところが聞き取れぬ。まあ、良い。立ち去ろう。

「では、失礼した。我々はこれで。」

「ま、待て!俺の女を返せえええ!!」

…何を言っている?ちゃんと返したではないか。まあ、良い。

固法のところへ追い付いた時、ちくしょおお!という叫び声が聞こえたが…いったいなんなのだ?そして先程から御坂が皮膚をつねってくるのだが…ふむ。痛い。これで皮膚が剥けた回数が40回目に突入。まあ氣で治している故、皮膚は再生しているのだから平気だな。

〈回想終了〉

というわけである。

「…皮膚つねるのはよいが、そのままむしるのは…」

「いいじゃない。あんたどうせ治せるんだし。」

…問題は無いが、165回もそのような事をやられては困る。困るで済ませる俺にも困る。

「御坂さん。黒崎君。」

固法の声に反応し、声のした方に振り向くと缶を三本持った固法がい…むう。あれは黒豆サイダー…苦手だが、飲むしかないか。

缶ジュースを渡される。ふたを開け、そして中に入っている黒豆とともに飲む。ふむ？噛まないのか？いや、何故か抵抗感が…いや、意外と美味だった…恐る恐る黒豆を噛む…ふむ。なんというか…水分吸収し過ぎだ。

しかし…これは…なんというか、あんこの味の飲み物に炭酸を入れた感じ…いや、サイダーを混ぜた感じか？とにかく俺の口には合わん。まあ、飲むがな。

固法もベンチに腰をかけ、固法、俺、御坂の順となった。いや、固法よ。それでは御坂と話しくくなるのではないか？

「地図を見るの、私も苦手だったわ。」

「え？」

急に語り出す固法。御坂のために話しているのだろう。

「ふむ。何かとしら経験が大事だからな。故に御坂よ。何も失敗を恥じる事は無い。失敗して得るものだ。失敗したら次はそうならないよう努力するであろう？」

「え…それはどういふ…」

「ふむ。先程固法が言った通り、固法も初めは失敗ばかりであった（多分）。固法は失敗を何度もした故、今は立派な風紀委員として

働けている（仕事のし過ぎでもあるがな）。」

「…なんか裏がありそうな言い方ね…黒崎君…」

固法よ。気にしては駄目だ。

そして、そこで固法の携帯電話の着信音が鳴る。

「あ、ちょっと待って。はい、もしもし…」

ベンチを立ち、依頼なのか真剣な表情で話している。

「見る。御坂。あれが風紀委員の仕事をする顔だ。」

「……なんか、ピリピリしてるような…。」

「ふむ。蛮勇と勇敢は違う。風紀委員は不良をボコボコにし、正義のヒーローを演じるものに非ず。アニメに出てくるヒーローの様に安っぽくは無い。ただ単に悪を叩く…それでは蛮勇。場の状況を理解した上で戦う…これが基本「あんた時代劇に出た方がいいわよ？絶対。」…ちい。」

なんだかんだで話をそらし、戦いの基本をたたき込もうとしたのだが…聞く気0か…。

「黒崎君。依頼よ。」

「…仕事か。内容は？」

「“探し”よ。」

「ふむ。了解した。」

ゆつくりと立ち上がり、腕を回す。ふむ。一番だるい仕事だな。

「え？ちよ…え？」

御坂も慌てて立ち上がり混乱。あたふたし、何が始まるのかと緊張が走っている…ようにも見える。

「御坂さん。探し物の依頼よ。子供用のピンクのバッグ。」

「え、ええ！？それは大変です！今すぐ探しに行きましょう！早く！」

…途端にあせりだす。なんなのだ？

「御坂よ。何故そんなに慌てているのだ？」

「いやあんた、初春さんの話聞いてた？アルミを爆弾に変える能力の事よ！人形でもそれが可能になってるとか…ほら！それでそのバッグに爆弾が仕掛けられてたらどうす「敬語を使え。そして黒崎先輩と。」…んですか…く、…黒崎…先輩…／／／」

…またか。ふむ。もうなれた。なれたぞ。

「まあとにかく探すぞ。確かにそうになっていたら危険だ。では行く。」

足をすすめ、探しもの、バッグの探索に移った。

河原にて。

「うゝん…もう少し左かしら…黒崎君。もう少し「ちょっと待て。」…どうしたの？」

「何故俺は固法に肩車をしているのだ？」

「それは、橋にバグがないかを「あるわけではないではないか。」…いや、それは探さなくちゃわからないでしょ？」

ふむ。落ち着け。状況を説明しよう。

河原の橋の下、そこで俺は固法に肩車をしている。橋のきわどい、なんともあり得ない場所を探している。結論から言うところわけない。さらに…固法は制服姿。まあ仕事をしている時は制服姿が基本故、仕方がないのだが…スカートがな…ふむ？その。羨ましいぞこんちきしょう。爆発しやがれこのリア充とか言った奴。この状況はかなりきついぞ？なんというか…精神的に疲れる。あと御坂から俺をも超越する濃厚な殺気をぶつけられている。何故？

「ひい！？」

む？御坂の殺気が消えた。何が…あるのだ？

「な、なんか…あ、足のない虫が…キャアアア！！」

ドコッ！

「……ぐほっ…」

御坂が強烈な突進をかましてきた。

「あ、ちょ！た、倒れる！ほ、ほら黒崎君！ちょ！」

結果、倒れた。

今の形はかなりヤバイ。固法が俺にのっかっている状態。まあ馬に乗っているような形…なんとも綺麗な乗馬スタイル。ふむ。馬で戦場を駆け抜けられるぞ？いやそうではないだろ。

「……／／／」

！？

か、顔を少しずつ近づけてくる。こ、これは…まずい！

「ふむ！？正気に戻るのだ！固法よ！！正気に戻るのだ！」

…駄目だ。ヤバイ。これはまずい！そして固法との顔の距離があと20cmくらいになった時…

「ちょ！／／／なにやってるんですか先輩！！／／／」

「……は！？／／／」

ふ、ふむ。よかった。正氣に戻った。ふう。

とある公園にて。

「確かバッグは犬に取られたという情報だったわ。」

「その情報を早く言え。だが公園に運良くバッグが見つかるとは思えん。」

「ええ。けど、あの建物と建物の間よりも見つかる確率が高いわ。」

「それを承知の上で御坂に探させたのか？」

「……さて。探すわよ。私はあつちを、御坂さんと黒崎君はそっちを探してちょうだい。」

ふむ。今俺は子供がわんさかいる公園にいる。はっきり言ってこのようなところにあるとは思えん。

建物と建物の間とは、通る途中、御坂くらいしか通る事の出来ない場所があり、そこを御坂に探させたのだが、結果は当然無く、さらには何かの幼虫のような足の無い虫に御坂は遭遇。御坂の悲鳴が学園都市に響いた。

まあそれはともかくだ。とにかく今は探す事に専念しよう。

そして御坂の方を向いたら…

「へっ？おねえちゃんはときわだいのひと？」

「うわっすげっ」

…子供に絡まれていた。はあ。

「御坂よ。何をしているのだ？」

「あ、ちよつとあんた！これをなんとかして！」

これとは無論、子供の事である。

「おにーちゃん、このひとはおにーちゃんのかのじょ？」

！？！？

何処からその知識を得たのだ！？さては親だな！この餓鬼共の親よ！今すぐ顔を出せ！氣弾を撃ち込む！

「な、ななななな！？／／わ、私が…黒崎の…か…彼女…／／／」

「へ〜？このノーパンのひとが？おにーちゃんへんたい〜！」

…これは見過ごせんな。

「…誰が変態と？」

「…誰がノーパンよ。」

「「さあ、答え（よ）（なさいよ）。さあ…」「

「「「「きゃ〜〜〜！」」「」「」

喜んでいるのか笑いながら逃げていった。

「はあ。ほんと、あの餓鬼達はなんなのよ…？」

愚痴をこぼしている御坂が何かに気がついた。そちらの方に目をやると…

探し物であろうバッグをくわえた犬がいた。

「見つけたああああ！！！」

…ケホッ！ケホッ！

かなりの速度で御坂は犬を追いかけていった。砂ぼこりがまっすぐにふむ。犬が逃げている原因は御坂にありだな。

「ほら！黒崎君も！早く追いかけて！」

後から来た固法にも追えとの指示が入った。というか、御坂一人で十分な気がする。

「…了解した。一瞬で終わらず。」

氣で身体能力強化。100mを2秒で走りきれる速度…見切れるか？

犬の行く方向に合わせ、行く方向を推測。犬の目の前に立つ。それを繰り返す。

…！？

犬がバッグを放り投げた！？そのバッグは噴水へと落ちていく。間に合うか？いや、間に合わせる！

そのままの速度でバッグの元へ走る。

そして…

間に合った！

と思っていたら…

「「あぐ！？」」

「ぐがあああああ！！」

御坂とぶつかる。どうやら御坂も御坂でバッグを取ろうと超能力で電流を纏い、速く移動していた。その状態で俺とぶつかる。俺は

常時能力を発動させてない故感電。叫び声は俺だ。噴水の水に濡れ、
そして意識が途絶えた。

……ん？

目を開ける。見えるは夕日と謎の影。

ふむ。かなりの時間寝ていたのであろう。

そして謎の影。その正体は…

「…何故お前らがここにいるのだ？」

御坂、固法は当然。だがいつの間にか飾利と霊美がいた。

「…うん…寝顔が可愛かったからですかね♪」

こやつ…。制服は…乾いている。まあ良かった。

「あ、服は私が乾かしました♪もともと温度を操る力なので♪」

…ふむ。まあ有り難い事だ。

体を起こし、どうやら俺はベンチに移動されていたのであろう。ベンチに座り、そして礼を言う。

「すまない、霊美。迷惑をかけたな。ふむ。そういえば御坂、固法よ。バッグはどうしたのだ？」

「え、ええ、黒崎君。ちゃんと返したわ／＼」

「…／＼」

何故御坂はそっぽを向くのだ？

そして飾利もどこか戸惑っているような…赤くして…何故？そして霊美がやけにニコニコと…なんなのだ？

「ふむ。…まあとにかくだ。今日の仕事はどうであった？御坂よ。」

「え…え、まあ、黒子を少し見直したわね…／＼」

??

御坂らしくない。まあ、照れているのだろうか。

「ふむ。御坂よ。なににせよ…今日は…む、むう。その…お疲れ様だ。」

…く!!

こういう時はなんて言えばいいのか分からん。

「くくく…あ、あんたがそのくさい台詞…似合っているような似合わないような…くくく…」

…笑うな。御坂よ。

「まあとにかくだ。御坂よ。風紀委員の仕事はこれくらい大変なのだ。黒子の気持ちも考えてやれ。」

「ええ。」

そして、今日の御坂のジャジメントの体験の一日は終わった。

「…あ、あの…靈牙さん…まだ気づかないのですか？／＼／」

不意に飾利が言ってきた。

「ふむ？何にだ？」

「そ、その…／／／」

指を指され、そして向けられたのは俺の体と下半身。

……ボタン全
開。着ていたシャツが無い。

そして下半身は…

ベルトがしまつてなく、チャック全開。

「……………」。

「「……………／／／」」

「」
「」

…沈黙。そして何故か霊美だけ満足そうな顔をしている。

「……………霊美よ。貴様がやったのか？」

「」
「」

「ほっ？」

ピチューン
ピチューン
ピチューン

その後、ボロボロのズタボロになった霊美を引きずり、罰として身体能力強化状態で学園都市中を引きずりまわした。

ふむ。今日は今日で平和な一日が過ぎていった。

虚空爆破事件（前書き）

…うん…虚空か空虚、どちらだか迷いました…。

ははは…駄文の塊ですね…これ…。それでも読んでくれる人へ、
たは読んでくれている人へ…有り難うございます…。

…日本語…勉強しようかな…はあ。なんかいろいろごめんなさい。
では、どうぞ。

虚空爆破事件

「……………」

書類をざっと見通す。

…虚空爆破事件。事件での被害は一定の場所に非ず。発見されたものは人形、スプーンなど。やはりこの前飾利が言っていた能力である事は明白。

それは当然、皆もわかっているであらう。

「あの…霊牙ちゃん？書類仕事は良いですけど…せめて家ではゆっくりしてはいいいんじゃないですか？」

ふむ。霊牙だ。

最初の書類を見渡して情報整理をしている場面で支部にいるであらうと想像していただろう。だが実際は違う。

もう夏休みに入って学校の事は気にしなくて良…くもない。超能力の筆記のテストで見事一桁の点数を出した故、補習があつた。

いや、だが実際はそのような事をしている暇などない。

虚空爆破事件についての書類をちやぶ台に置き仕事中。

今回の仕事は任せる任せろと言われて最後には無理矢理休めと追い出された。出る前に事件の情報の書類を持ち出し、そして今に至る。

「靈牙ちゃん…折角先生も休みですしいゝ何処か行きましょうよ
おゝ。」

小萌よ。キャラが変わっているぞ。そして小萌よ。お前は立派な大人であろう。

…だが確かに仕事のし過ぎであるのか？だが何故重大事件なのにも関わらず俺を休ませようとしているのだ？書類仕事なんぞ一時間からず終わらせられるのだが…。まあ良い。たまには休むとでもしよう。だが…パトロールのついでがな。

「ふむ、よし。飾利よ。今日は折角の休みだ。故に何処かへ出かけるとうしよう。」

「ほ、本当ですか！分かりました！ではでは私は準備をしますのでも！」

…準備といつても何をするのだ？いつも通りの私服で良いではないのか？俺は制服だ。何故かと？それは“パトロール”のついでだからだ。故に制服姿！

「…何故霊美ちゃんまでいるんですか？」

「だって兄様とデートですよ？行くに決まってるではありませんか」

「私が言いたいのはそのいう事ではなくてですね、どうやって知ったか知りたいのです！」

「最高神ゼウス様からの御告げです」

「神は存在しません！科学的に考えてそのようなのは所詮作り話です！」

いや、いるぞ？多分ゼウス様はお前を天から睨み付けている事であろう。ほらみよ。霊美も御愁傷様ですと軽く呟いたではないか。

今現在はセブンスミストと呼ばれる店の中。エスカレーターに乗っている最中に二人はどうみても微笑ましい言い合いをしている。周りを見よ。鼻血をだしているぞ。男女問わずに。しかし何故鼻血？

霊美とは入り口でばったり？と会い、今現在は一緒に行動している。何故疑問系にしたかは先程の会話で察してくれ。

エスカレーターを降り、そして辺りを見回すと服屋、服屋、服屋。服屋しか無いではないか。女にとっては天国であろう。だが男としてみれば買い物が長くなる危険な場所。仕事より疲れる場所と言っても過言ではないだろう。

…更に言おう。俺は服屋が大嫌いである。服は無字で良いではないか。なのに何故英語やらが書いてある服を選ぶのだ？たまにその服

を見かけ、訳してみると“私は救えない馬鹿だ！”とか“我、女を求む！”とか“下僕共、足舐めやがれ！”などが書いてあった。…何故そこまで危ない事が書いてあるのだ？

「ふむ。二人とも。見てきて良いぞ。俺はそのベンチに座って待っている。」

二人はかなり速い速度で服屋に入った。

「…あれ？霊牙さん？」

それと同時に後ろから声をかけられる。

後ろを振り向くと飾利、佐天、そして御坂がいた。

「…ふむ。飾利か。お前達も暇潰しで来たのか？」

「いえ。たまには皆で「初春」！こっちこっち」！「ああ、もう佐天さん！」

飾利は話している途中に佐天に呼ばれ、佐天の方へと向かった。…下着売り場…だと？

「あ、黒崎さんもこっち来てくださいよ」！

無理に決まっているであろう。取り敢えず無視をし、御坂の方へと向かう。御坂はどうやらパジャマを見ているらしい…が、そのパジャマが花柄の模様が合った、所謂子供向けのパジャマ。その子供向けのパジャマをジッと見つめている。

「御坂よ。これが欲しいのか？」

「え、うん……ってあんた！！！！／＼ど、どどうしてここに！
？／＼／」

さつきからいたであろう。

「ふむ。…意外と可愛い趣味をしているのだな。（子供っぽい方で）」

「え…え！？／＼／＼ななな何言ってるのよあんた！／＼／」

御坂をおちよくっている？と後ろから肩を掴まれた。振り返るとそこには…

「兄様♪」

霊美がいた。それだけではない。佐天、小萌、飾利もいた。しかも修羅と化して。

「『『『なんでこの人たちがいるんですか？』』』」

小萌と霊美は飾利と佐天を指し、佐天と飾利は小萌と霊美を指す。

「ふ、ふむ…飾利らはばったりと会い、そして霊美と小萌は誘ったのだが…。」

二つ、負のオーラは消えたが一つ負のオーラが増えた。御坂である。

「…あんた…」

「…（黒崎）（靈牙）さん…」

とても良い笑顔だ。

「…後でO H A N A S H I（ですよ）…。」

素晴らしいオーラである。凄まじい覇気…俺をも超越する覇気だ…。

「お？靈牙じゃね…上条さんは回れ右をして明日への進軍をした方がイイデスネ…。」

その覇気はたまたま通りかかった当麻の能力すら凌駕した…。いや覇気は破壊出来ぬか。

携帯電話の着信音が鳴る。飾利の携帯電話だ。

「はい。もしもし…はい…はい…」

飾利はいしか答えていないようだが、どうやら通話相手は風紀委員からであろう。

「…はい！なら丁度良いです！今セブンスミストにいるので！」

…ふむ。なんだかねで話がまとまったようだ。

飾利は通話を切り、そしてかなり真剣な目で言い始めた。

「どうやら虚空爆破事件が起こるらしいです！」

…ストレート過ぎるではないか。だが…丁度良い。これであいつらの仕事の量も減らせ、さらに犯人も逮捕出来る。

「了解した。では飾利よ、客の誘導だな。」

「はい！」

そして飾利は行動を開始した。佐天と御坂に外で避難するように飾利は話しかけている。…俺もするか。

「霊美、小萌。良く聞くのだ。ここ、セブンスミストに虚空爆破事件が起ころうとしている。故に避難しろ。」

「え？でもそれでは霊牙ちゃんが…。」

小萌は何故か俺の身を心配し始めた。…俺には能力がある故、平気だと思うのだが…。

「とにかく、霊美よ！小萌を連れ外へ出よ！願わくは客の誘導を…」
頼もつとした時、放送が流れた。

内容は当店、セブンスミストの電流に問題が生じ、今日は閉店とするという放送だ。…無理があるのではないか？電流に問題が生じる…とな？だが客はそろそろと移動を開始。何の疑問も持たずに…ふむ。どうやら飾利が連絡したのか…というか早いな。多分電話で連絡したのだろう。

さて…俺は調査に入ろう。御坂と佐天は…移動を開始したのだろう。今この場にいない。ふむ。能力を発動。これで怪我をする事は無い

であろう。

探索に移ろうとした瞬間、携帯電話が震えだす。バイブレータであろう。取り出し、どうやら相手は黒子。通話をする。

「ふむ。どうしたのだ？」

《黒崎さん！大変ですの！今、私も現場わたくしへ向かっておりますが、間に合うかどうか…》

黒子らしくない。かなり慌てている。

「どうしたのだ？慌てているようだが…」

《虚空爆破事件発生ですの！犯人の狙いがわかりましたわ！犯人の狙いは風紀委員！》

…なに？何故気づかなかったのだ…む？待て？つまり虚空爆破事件がセブンスミストで発生しそうとしている…狙われているのは風紀委員…だいたい予想はついた。今回のターゲットは…

「…初春飾利…それが今回のターゲット…。」

《！？ 何故それを！》

「休め休め煩い故、仕方なく暇潰し程度にセブンスミストに来ていたところだ。何故俺を休ませよう…っと。今はそれどころではない。飾利は…俺が守る。故に心配するな。」

通話を切り、携帯電話をしまう。さて…飾利を取り敢えず俺の側に

おいておかなくてはだな。

多分飾利は客の誘導故、一階にいると思うのだが…。

予測をし、そして移動開始をはじめようとした時…飾利を発見。
何かを探しているようだ。

飾利に駆け寄り、何がおこったのかを聞く。

「飾利よ。どうしたのだ？」

「あ、霊牙さん！実はここに子供が一人残されていて…」
成る程…。

俺も手伝うとしよう。あと伝えなくてはな。

「飾利よ。取り敢えず聞け。今黒子から連絡があり、犯人のターゲットが分かった。犯人は風紀委員をターゲットとし、事件をおこしている。今回のターゲットは…飾利、お前だ。」

「……………へ？」

何がなんだか…今の飾利の表情を伝えるのならばこれが一番良いだろう。

「初春さん！子供は見つかった？」

御坂も俺たちと合流。何故御坂が…というか今回、俺の行動範囲が短い気が…するのだが…。

「御坂よ…今すぐ避難するのだ。子供は俺ら風紀委員が見つける。故に戻「おねえちゃん！」…！！？」

御坂に戻れと指示を出そうとした直後、子供が飾利に駆け寄る。
“人形を持つて”。

「おねえちゃん。めがねをかけたおにいちゃんがこれをわたしてつて。」

飾利は微笑みながら受けとる。だが飾利はそれが爆弾だと気づいていない。

「飾利よ！！それを投げよ！それは爆弾だ！」

人形が形を変形しだす。ちい…どうやら爆発するのか！だが、俺の能力で！

飾利は人形を投げ捨て、子供をかばうかのように抱く。御坂は…コインを取り出し、超電磁砲で人形を飛ばそうとするが、コインを掴み損ない、コインを落とす。俺も駆け出すが…

誰かとぶつかる。

パキンッ！

この音が鳴る。…能力が使えない？ぶつかった奴は当麻であつた。

…どうやら俺と当麻の力は同じ。故に互いに打ち消し合い、今は互いに能力が使えない状態にある。

爆弾は目の前。あと3秒ぐらいに爆発するだろう。

…どうする？ならば…氣で…！

…残り2秒。

人形を掴み、足に氣を込める。

「ちょっとあんた！！なにやってんの！？」

残り1秒…。

御坂の声を無視し、人形を持ったままジャンプをする。高く、天井を貫き、そして外に出た時に氣で…。

大爆発。

能力を打ち消し合っていたためか、使おうとしても無理だった。故に氣の硬化を使用。上空での爆破は成功。故に店の被害は俺があけた穴のみ。

…少し痛い。

そして俺は裏路地へと着地しようとした。

（??? side）

馬鹿な！なんなんだあいつは！！

人形をあの女に渡したつもだったが、何故あの男が持っていた！

しかも上空で手に持った状態で爆発させただと！？

…だが、あいつは多分風紀委員だ。しかもあいつはあの女にくっついていた奴。しかもあいつは戦闘^{バトル}覇者だ…。風紀委員にての最大の難敵…女を庇い、代わりにあいつが逝った…。

ふふふ…ふはははははは！！！！

風紀委員の難敵を殺した！！！殺したぞ！！！なんだこの爽快感は！やはり風紀委員はいらない！！あいつが欠ければ風紀委員はゴミ同然！

「ふふふ…あつはつはひゃひゃひゃひゃひゃヒヤヒヤヒヤヒヤ！！！」

笑いが込み上げてくる。どうだ風紀委員！これが僕の復讐だ！！

すると突然、背中に痛みが走る。…蹴られた。

ゴミ箱に激突し、ゴミが飛び散る。

蹴った方を振り返ると、そこには茶髪の短髪の少女が立って僕を見下していた。

（御坂side）

今私はすつつつこいム力ついてんのよね…！！

裏路地に来てみれば爆弾魔が笑い声をあげていたし、さらになんて爆弾魔かわかったかというと本人は無自覚のつもりだろうけど…黒崎の事を殺したぞって叫んでたのよね…。

まあ、黒崎は生きてるけど…え？なんでわかるかって？見れば分かるでしょ？さつきから気配を殺してこの爆弾魔を見ているわ。

けど…なんなのよ…この気持ち…。死んでないって分かっているけど黒崎を殺そうとした…しかも黒崎の制服が所々焼けてる…。

なんか…モヤモヤする…あああああ！！なんなのよこの気持ち！なんだかこいつにレールガン50発ぶつけてもおさまりそうにないわ！

はあ…。やっぱり私…黒崎の事が…い、いや！あ、あああり得ない！！／／／／絶対無いわ！！／／／／

けど…なんなのよこの気持ち…／／／／／

けどやっぱり私…黒崎の事が…

ループのため、視点を代えます。

く霊牙sideく

なにやっているのだ？あいつは…。

着地には成功。犯人と思わしき人物が高笑いしていた。さて…もう良い。俺が行こう。

「…ふむ。どうしたのだ？ゴミを頭に乗つけて…ああ、新種のファッションか？」

「…え？…な、何故バトルマスターがここに！？僕の最大出力だぞ！？何故生きてる！」

「ほう？最大出力…とな？」

「！？」

…犯人は顔を青くさせ、怯え、後ずさる。そして御坂よ…何してるのだ？先程から顔を赤くしては首を振り、そしてまた赤くしては首を振り…何をしているのだ？

「…ふふ…いつもそうだ…。」

ゆるりと立ち上がり、半分涙目になりながら俺に怒鳴る。

「いつも力でねじ伏せられる…ジャッジメントだってそうだ…！特にお前だ…！！なんで助けにこないんだよ…！！こんだけの力が有りながらなんで助けてくれないんだよ…！！やっぱりジャッジメントは何だかんだで無能だ…！！殺してやる…！！ジャッジメントも！不良も！そして特に貴様も…！！」

ふ、ふむ。お前から貴様が変わり、さらにジャッジメント、不良よりも俺を殺す方が最優先にされてしまった…俺は何もしていないぞ？

ビリビリッ

「…力…力って…さらにはあんた…私の黒崎を貴様呼ばわり、さらには殺すって…いい度胸ね…！」

御坂よ！いつから俺はお前の物になったのだ！さらに超電磁砲を直で当てる気なのか！？

「…と…常盤台の…エース様…だったのか…。」

御坂から感じられるのは怒気、そして少しながらも殺気がまじっている。…止めねば。能力は…ふむ。使える。

「後悔しなさい…！」

超電磁砲が放たれた。能力を爆弾野郎の前で発動。電流は能力で打ち消し、コインは氣で硬化を使い、受け止める。ふむ…百円玉であったか…貰っておこう。

「…あんた、どういうつもり？」

怒気と霸氣が俺にぶつけられる。御坂よ…なんなのだ？

「当然だ。御坂よ…超電磁砲を直に当てる気だったのか？」

はつとした顔で怒気と霸氣を消した御坂。…まるでバーサーカー御坂だな。いやないか。

「…爆弾男よ。お前を守れなかった事は謝罪しよう。しかし爆弾男よ。お前が今やろうとしている事はお前を襲っていた不良と同じ、いやそれ以上の事をしているのだぞ？」

「ふ、ふん！だからなんだ！僕をこの状態に追いやったのは「いい加減にせよ…。」ひい！？」

覇気をぶつける。爆弾男は覇気に怯え、後ずさる事も出来ず倒れ、そしてぶるぶると怯え出す。

「貴様が今回やろうとした事は殺人なのだぞ？それと貴様…今“殺す”、“殺してやる”などの言葉を使っただけだな？」

男を見下し、そして拳を振り上げる。

「“殺す”という言葉は相手の生を奪う言葉…“殺す”という言葉はな、相手の生を奪うだけでなく、さらに罪を背負う事にもある。その罪を背負う“覚悟”の無い奴が…“殺す”という言葉を使っただけだ！」

男を殴り、男を気絶させる。

「……御坂よ…行くぞ。あとそこで見ている黒子、霊美よ。こやつは頼む。」

すると二人は空間移動で出てきた。そして俺と御坂はこの場を後にした。

く黒子sideく

私は^{わたくし}霊牙さんの言葉を聞いていました…。その話はまるで、今までご自分が経験なさった事を相手に伝えているかのように…。

気絶した爆弾魔に手錠をかけ、アンチスキルへと連絡する。

携帯電話を閉じ、そして霊牙さんの言葉を思い返す。

…やはり不思議な人ですわね…。

「…霊美さん。霊牙さんはいったい何者なの？」

「…はい。戦いというのを誰よりも知っている人物…それくらいしか言えません。」

「…“言えません”…と？では霊美さんは霊牙さんの何かを知っている…。」

「…“殺す”は罪を背負う覚悟が無い者でないと使ってはいけない言葉…まるで軍隊ですわね…。」

く霊牙sideく

…とある公園のベンチで腰をかけている。

もうどれだけいたのだろうか。夕焼けが見える。公園には俺と御坂……それ意外いない。

隣に腰かけている御坂。先に帰ってて良いと言ったが、ついていくと言い、そして今に至る。

「……ねえ。あんたはいつたいどんな生き方をしてきたの？」

ふと、御坂が俺にこの言葉をかけた。

「……それはどういう事だ？」

「当たり前よ。あんた、まるであの発言は、自分は殺した事がありますよって言ってるようなものじゃない。それも……仕方なしに。」

……ふむ。御坂にはそう聞こえたか。俺はありとあらゆる世界に転生してきた。そのほとんどが戦いに身を投じなければ生きてはいけぬ、人殺しが当たり前の世界だ。そしてまだ言っただけなのに、転生者の処理の仕方……それは殺す事である。

痛みの無いように存在を消滅させる事が多いが、結局は殺し。転生者の二度目の人生だとしても結局は生きている。それを殺すのだ。……管理者でも嫌になったりはする。生を奪うのだ。……この世界でも、転生者と戦うはめになるのか？

いや、管理者の時の話はもういい。つまりだ。“覚悟”も何もなく自己満足で相手を“殺す”という言葉を使われると凄く腹が立つ。

「……ふ。御坂よ。だったら俺は風紀委員などやってはおらぬ。」

「……………なさいよ。」

ふむ？ なんと云ったのか聞こえん。

「…教えなさいよ。あんたの隠している事を。」

！？

鋭い。これは鋭い。御坂の目は隠し事は許さないと云わんばかりの目をしている。…どうしたものか。これだけは教えるわけにはいかないのだが…。

「…すまぬ。それは言えぬ。」

「…そう。」

やけにあっさり引き下がる御坂。もう少し追求をしようと思ったのだが。まあ、有り難いまでだ。

「…けど、何かあったら頼りなさいよ？」

…御坂よ。本当にどうしたのだ？ いつもならもう少しツンをいれると思ったのだが…まあ、良い。その言葉、有り難く貰おう。

「…ふむ。有り難うな…美琴よ。」

「ちょ！？／／あ、あああんた！／／い、今名前です！／／／」

急に顔を赤くしながら立ち上がる御坂。…少し照れているのか？

「うひゃ！？／／／」

「な、なんだ！？」

乱入してきたのは黒子と霊美。

「お姉さまあああ！！駄目ですよ！お姉さまとはまだ体を重ねていないのですから初めてを他の人、さらに殿方に渡すなんてえええ！！」

「兄様ああああ！！そんなに欲求不満でしたら私を抱いてください！！！！！！」

御坂と俺を強制的に二人が引き剥がし、俺の膝には今霊美が乗っている。

「さあ！さあ！まずはこの薬を！！」

な！？謎のカプセル薬を俺の口に近づける。

「な、なんなのだそれは！」

「対霊牙さん専用の媚薬です！通常の5000倍の媚薬です！」

殺す気か！？まず薬の効果が発揮する前に死ぬではないのか！？

「いえいえ！そうなりませんようにしてあります！ただ私の虜になるだけです！」

「尚更無理ではないか！H A N A S E！！」

一方御坂は御坂で…

「さあ！さあ！対お姉さま専用の媚薬をお飲みくださいませ！」

そちらもカプセル薬を近づけていた。だが…カプセル薬だったのだな。霊美が開発したのは。

「あんだねえ…」

「お前は…」

ベンチからゆるりと立ち上がり、右手を霊美に向ける。御坂はコインを片手に、それを黒子に向ける。御坂には電流が走り、俺には氣があふれ出てきている状態。

「『いい加減に（せよ）（しなさいよ）おおおー！』」

氣は極太レーザーのようになり、超電磁砲は今まで以上の電流が走っている。

ふむ。俺の新しい技…名付けて氣砲…まあこれくらいかるくても良いだろう。

ふむ？死なないのかだって？平気であろう。やつらはこいつのは不死身であるからな。

ピチューン

ピチューン

その後、小萌に帰りが遅いと怒鳴られ、1時間の説教を受けた。

外史（ものがたり）の鍵（前書き）

すいません。

ステイルと神裂が少々バトルジャンキーになっているような…。いや、神裂はセーフですかね？

ステイルは脳が筋肉でいっぱいなの奴、すなわち脳筋と化してしまっている気がします…ごめんなさい…。

外史（ものがたり）の鍵

…ふむ。今現在、何故か人が誰もこない大道路で俺と霊美が、赤い髪をし、神父？のような感じで背が高い男と某片翼の黒い天使が持つような刀を持った女と対峙している。一人のシスターの格好をした少女を庇いながら…。

いや、正確には喧嘩を売っただろう。…霊美が。

「…霊美よ。何故俺が巻き込まれているのだ？」

「いいえ！貴方はこの外史の主人公ですからこうなるのは宿命です！」

「…。」

話にならん。全く意味が分からんが。とにかくだ。回想で説明しよう。

（回想）

いつも通り？風紀委員としてパトロールをしている。何故か霊美とともに。

それはともかくだ。何故か妙なのだ。とある大通りに出たのだが、人が誰一人として見当たらないのだ。

「…何だ？」

暫く歩いていると、一人のシスターが倒れていた。いや、少女？氣は…正常だ。攻撃されてはいない…。

だが、その少女を見た瞬間、となりの変態れいみがいきなり騒ぎ出した。

「靈牙さん！早くあの子を保護してください！早く！早く！！」

だそうだ。何故それ程焦るのだ？

「この物語の鍵となる人物なんですよ！早く！！」

…読心術か。プライバシーの侵害。故に逮捕。

「ふざけてる場合じゃないですよ！早く助けないと通常の20万倍の媚薬を飲ませますよ！安心してください！死なないようにしてあります！」

…靈美がカプセル薬を取り出した。何故それが…。とにかくだ。早く保護せねば。

「…大丈夫か？」

少女に寄り、様態を調べるため声をかける。そして少女の返した言葉が…

「お……………お腹…減った…」

「…は？」

「お腹減った。」

急に瞑っていた目を開き、此方を見てくる。正直、ビビった。

「お腹減った。」

「……………」

「お腹減ったって言うてるんだよ？」

何と応答せねば良いか分からない。腹減ったといわれても今ここに腹を満たせるものは無し。…保護するか。

「ふむ。では取り敢えずここを移動しよう。食い物やろう。」

「本当に！？やったー！」

…素晴らしく早く立ち上がったシスター…その速度は一瞬だった。残像が残ったのは気のせいかな？

「はあ。まあよい。では行くぞ。」

「うん！」

…元氣の良い子だ。子供は元氣が一番…だな。

「では行くぞ。霊美。昼には少し早いが、まあ早めもありだろう。なにか作ってやろう。」

「兄様が！？やったああああ！！行きます行きます！」

上機嫌な二人を引き連れ、たまたま家から近い故、いったん家に向かおうと足を進めようとした時だ。

「ああ、その君。その子が迷惑かけたね。」

後ろから声が聞こえた。落ち着いた口調。それに、この世界には存在しない筈の“魔力”が感じられた。

振り替えると、身長は俺より高い。俺は176くらいだ。相手は180以上はあるだろう。煙草を吸い、そして落ち着いた目をして赤い髪の…これは“少年”と言うべきか？何故か俺より年下と感ぜてしまう。

「つまり保護者となるわけか？ふむ。」

ちらつと少女を見る。が、反応が変だ。保護者なのならばもう少し喜ぶとか…安心する表情などを出す筈だが、その少女は男の反対方向に隠れ、つまり俺に隠れた。服を掴みながらぶるぶると震えている。…追われていたのか？

だが、見かけこいつらは悪者ではないようだ。故に理由があるのだろう。…一応話してみよう。

「ふむ。すまぬがその君。何故「凍れ！」「む！」？」

いきなり霊美が氷の壁をつくりだした。

「れ、霊美よ！いきなりなにをするのだ！！」

すると氷の壁が壊れ…いや正確には溶けた。炎により。それは確かな魔力を感じた。

「へえ？せつかく人が優しく交渉してあげようかと思ったのに…魔術師に喧嘩を売るなんてねえ。しかも僕にねえ。」

…こいつは炎を中心とした戦い…霊美は基本温度を低下させる。周囲の温度の低下をしても、あの男は炎で暖め効果は皆無。つまり…勝てるか？

そもそも…霊美よ。喧嘩を売るな。

…氣がもう一つ…かなりの速さ…背後にいる…。

もう一つの氣が俺の背後に接近してくる。

…タイミングを合わせ、回し蹴りをする。

「ぐっ！？」

誰かは俺の攻撃をガードに成功。そして、赤い男のとなりに移動。

…長い刀、そして長い黒髪。…武に心得があるのだろう。そしてなにより…

「…美しくっ！？」

…あ、足を踏まれた…霊美に…。

今まで見た中で、最も美しいだろう。ふむ？外見が？いや、違う。内側だ。科学に頼りっぱなしのこの世界では、こう自力でなんとか出来る力を持っている。さらにこの者、戦場を経験している。にも関わらず、穏やかな心を持ち続けている。

「…霊牙さん？」

真っ黒な気が…溢れ出ている…。

いや、まずはこの状況をなんとかせねば…。

〈回想終了〉

というわけである。

今現在、どうするか考えている…時間もないであろう。赤い男は殺気を出しているが、女からは殺気が見られない。殺さずして俺を倒せると？

…武を心得る者と出会った…いやいや！なにを言っているのだ！まづは平和的解決だ！

ふむ…最近思い始めたのだが、俺というキャラが崩壊してきてはなにか？

平気ですから安心してください。

… 本当かね？

ええ。多分。

… まあ良い。

先ずはこの状況だ。

「ふむ。お二方。俺の連れが失礼した。此方に戦闘する意思は無い。故に刃を向けないで欲しい。」

「… まずはそのお連れの方をどうにかしてもらえますか？」

… 霊美から大量の殺気が… 特に女に向けている。先程、俺の話に応答してくれたのが女だ。

「その少女を此方に渡してもらえれば、戦闘はしないんだけど…」

「

「… 断る… とでも言ったらどうなるのだ？」

「… それは当然… 灰になってもらうよ。」

煙草の少年？は殺気を俺に飛ばしてくる…。こいつは… 戦いに慣れている。

… ちょっと待てよ？俺… 自分から戦闘しましょうと言っているようなものではないか？まあ、とにかくこれで最後である。

「… すまないが、こちらが保護させてもらおう。霊美、その子を俺

と小萌の家へ。」

「はい！気をつけてください！今の貴方は人外ではないので、特に女の方は気をつけてください！」

分厚く、そしてでかい氷の壁をつくり、霊美は少女を連れて去った。

「…俺が相手になろう。」

「…へえ？それじゃあ、相手になってもらうよ！」

炎が放たれる。…能力発動！

パキンッ！

「な、なに！？」

「！？」

驚くのは仕方がない…か。炎は跡形もなく消滅。俺は無傷のまま立っている。

「…ふん。餓鬼が。ならば次はこちらからいこつ。」

右手を構え、そして氣弾を放つ。

「ぐわっ！？」

爆発し、男は吹き飛ぶ。ふむ。氣絶しているな。呆気ない。

「…貴方は何者ですか？ステイルを一撃で倒すなんて…」

ステイル？ああ、男の事だな。

「ふむ。その台詞は此方からも言いたいな。それに…何故彼女を狙う？」

「……………」

沈黙…答えられぬか。

「無理に答えろとは言わん。…頭が筋肉でいっぱいな者ではないが、学園都市は超能力という科学で生んだ能力をもつ者が多く、自分の力で戦う者がいない…。俺は正直嬉しい…。それに…君は美しい（武や内側の事）。」

「な！？／／／／／、そそそんな事は…／／／／」

…むう。なんだ？急に女の闘気が消えた…。

「…まあ、なんだ。とにかくやり合おう。」

「ふえ！？／／／／／い、いいいきなりそんな！／／／／／ま、まだお互いの事も知ってませんし…／／／／」

…やり合おうとやり合おう…それを勘違いしたのか？誰が名も知らぬ人物と…そもそも俺は変態ではない。

「…まあ、そのなんだ…取り敢えず構えよ。」

氣で戟を作り、構える。俺は相手が武器を使用している時、戟で戦

う事が多い。

「…！？それが…貴方の能力ちからですか？」

戟を作り出した途端、相手は急に真剣な目付きをする。

「…いや。ここでは超能力というものを使うのだが、これは誰にでも持っている氣というのを使う。」

「…氣…ですか？」

「ふむ。氣というのも武術の一部に入るのだが、扱い方が難しい。故に…ここでは誰も氣を扱える者はいないであろうな。」

相手に殺氣は無い。が、学園都市では有り得ない闘氣いっけと覇氣が感じられる…まさにそれは戦い、本当の戦いを経験した者にしかない闘氣と覇氣だ。だが、殺氣はいつさい感じられない。氣絶させる氣であろう。

「…私は戦いがあまり好きではない…ですが、貴方を見ると何故か無償に貴方と戦ってみたい…そう感じてしまう…」

戦いが好きではない。誰でもそうは思うが、ここで暴露する奴は珍しい。

「…戦いが好きではない…それを人前で言ったのは貴方が初めてですね…不思議です…。貴方には本当に不思議な魅力が感じられます…。」

相手は刀の柄を持ち、構える。長い刀をどう使うのだろうか…楽し

みだ。

「…私の名は神裂火織…。」

「我が名は黒崎霊牙だ…。……………来い…。」

「いきます…！」

相手…神裂は刀を振るう。が、刀の鞘を抜いていない。鞘を持ち、そしてそれを何かを動かしているかのように…！？

刹那、俺の体に七つの何かに斬られた傷ができた。

「……………“七閃”…一瞬という時間で七回、相手を斬る技…つまり、今で貴方は七回死んでいます…。」

…強いな。只者ではない。いや、ある筈がない。

一瞬で七回…こやつも氣を？いや、だが氣を知らない…ならば、知らず知らずのうちに使っているのでは？

そして、ふと気になった事がある。何故神裂は鞘をはずさないのだ？ならば、あれに何かがある…。

…ワイヤー？成る程…ワイヤーを操っているのか…。成る程だ。ま
すます面白い！

「…降参します？。」

「…戯れ言を。」

「…そうだろうと思いました。貴方とは…味方であってほしかったですね…。」

「…同感だ。俺も味方として相手をしたかった…敵では無く、味方として…友として…。」

「…では、参ります。」

“七閃”と言ったな。ワイヤーが俺の方に来る。

戟を構え、そしてワイヤーを斬る。

「…看破させてもらった。」

「…やはり、貴方は強いですね。」

そこで、携帯に振動が走る。…なんだね？こんな時に…。メールが一件。携帯電話を取り出し、そして覗くとこのような事が書かれていた。

“物語の鍵、無事保護出来ました！”

…ふむ。良いところではあったが…仕方無い。

「…運命というのは最悪なものだな…悪いが、今回は俺の勝ちだ。ふむ…神裂とやらよ。これからは俺の事を霊牙と呼べ。では…さらばだ。火織。」

「あー！」

身体能力を強化し、そしてその場を去る。さて…霊美の元へ行こう。

〈神裂side〉

…黒崎霊牙…。

今日私と対峙した者の名前。

不思議な魅力を感じた。…彼と対峙していた時、彼と一戦してみた
い…そう感じてしまった。

…今まで、こんな事があっただろうか？“氣”という私の知らない
ものを使い戦う青年。

「…まさか君の技を看破する程の力を持っていたなんて…彼は何者
なんだろうね。」

ステイル…先程彼に気絶させられた者。いつ気絶から立ち直ったか
は知らないが、私の隣にいつの間にかいて、彼の事を話していた。

「…何者なんでしょうね。」

「“不思議”としか言い様が無い…はあ。聖人の君と互角以上の戦
いをするかもね。」

「…霊牙…。」

「ん？それはあいつの名かい？」

私が彼、黒崎靈牙の名を呟く。

不思議な魅力と力を持った彼…。

「彼なら…彼女をなんとかしてもらえるかもしれない…。」

「…確かに。何故かそう感じてしまうね。」

はあ、とため息を吐きながら煙草を取り出し、口にくわえる。

…もう後には戻れない…。彼とは、もう一度対峙するかもしれない…。
彼女を救うためにも…。

…美しい…か。

言われて嫌な感じはしない。寧ろ…／／／

「ん？」

煙草を吸いながら、ステイルが不思議そうに此方を向いてくる。

…靈牙…もう一度、今度は普通に話をしてみたい…。

〈靈美 side〉

物語というのはその物語が進む鍵となる人物が絶対に存在します。

私は、一応元神なのでこの世界の鍵の存在は知っています。今、この物語の主人公は霊牙さん。あ、一応言っておきますが、普通の場合は霊牙さんと呼び、学校の際は霊牙兄様と呼びます。

で、今気になっている事は、物語の鍵となる人物の登場が若干早い気がするのです。もう少し後に来ると思っていましたが…まさか早めの登場とは…。

そして問題がもう一つ発生しました。それは…

「美味しいよこれ！今まで食べた中で一番美味しいかも！」

…霊牙さんが作ってあった、憎たらしいですが小萌さんの疲れを癒すために作ったチョコレートケーキを勝手に食べてしまったんですよ…。どうしましょう…。そして家の鍵は郵便箱に入っていました…警戒心薄すぎませんか？

それはともかく、これをどうにか…あ…。

「はぁ〜♪もつと食べ物があると嬉しいな♪」

私に期待の眼差しを向けないでください。

は、早く帰ってきてくださいいい！！霊牙さあああああん！！

禁書目録（前書き）

インデックスのキャラがなかなか難しい…。

申し訳ないです。はあ…インデックスの口調が難しいですよ…。

それと次話はオリジナルでいきたいと思います。

まあ、その…頑張ります。

では、ご覧ください。

禁書目録

ふむ。読者の皆様よ。

いきなりで悪いが、俺はピンチである。

それは、人生でトップ10に入るレベルに到達している。

「がつつがつ…」

「兄様…美味しいんですけど…これって…」

「言つな…分かっている…。これが…絶望というやつなのか…。」

ちやぶ台を囲むように俺、霊美、そして少女。ちやぶ台に乗っているのは大量の食べ物…まさに山ができている…。その量を少女は軽く、そして満面の笑みで食いついている。霊美よ…お前も食べているが、これではゆっくり味わえないのではないか？

「ふ〜〜」

つて早い！もう食い終わったというのか！？先程まで小萌が出すゴミの量よりも多いと思われた食い物を一瞬目を離しただけで皿のみとなっていた。…買い出しにいかなくては…だな。

「ふむ。ではまずは君の名を聞こう。改めて…俺は黒崎霊牙という。お前の名は？」

「インデックスっていうんだよ！」

「……………そうかあ。」

「な、なんで遠い目をして言うのかな！？なんかわからないけど凄くショックかも！」

「偽名は聞きたくないのでな。」

「兄様。偽名ではありませんよ？」

…インデックスとほざいた少女にサポートをいれたのは霊美であった。まあ、霊美はこの世界の外史ものがたりを知っている故、登場人物の名くらは把握しているか…という事は本当に少女はインデックスという名なのか…呼びづらい。

「…まあ良い。とにかく霊美よ。お前も自己紹介をするがいい。」

「はい、私は黒崎霊美と申します、以後、霊美と気軽に呼びください。」

言葉は丁寧であるが、軽い口調で自己紹介をする。

では…本題といこう。

「俺のことも霊牙で構わん。さて…まずはあれはなんなのだ？それとインデックスよ。お前の着ている服…なにやら特別な力を感じるが…。」

「あ、彼女は学園都市に存在する筈がない魔術師という存在に追われています。彼女はインデックス…その意味を禁書目録…彼女は完

全記憶能力の持ち主で、兄様の知っているように魔法を覚えるためには魔導書が必要…その魔術師にはかせない魔導書が記憶されている存在なのです。」

「…何故お前が説明するのだ？」

「最近出番が欲しかったからです。」

「…射抜くぞ？」

「まあいいじゃないですか…ごめんなさい！調子にのってました！ですのでその氣でつくった弩を構えないでください！」

「…まあ良い。武器を消滅させ、そして再び話にもどす。」

「彼女の頭の中には10万3000冊の魔導書が入っており…記憶ですからね？魔導書が頭の中に入っているわけではありませんからね？そしてその魔導書にはあらゆる魔術…危険であるものも記憶されています。彼女を追ってきたあの二人…いや、言わないでおきましょう。」

「…何故教えぬ？」

「答えは自分で探すものです。」

「はあ。」

まあ良い。答えを導き出すのもまた一興…でもないな。さて…次は…

「インデックスよ。君のこの服は防具とみた。大抵の攻撃はとおさ

ない、かなり頑丈なものを見た。」

「……………」

口をあんぐりと開け、呆然と俺を見ている。なんか変だったのか？

「…？」

「……は！あ、うん！これだね？確かにこれはどんな攻撃も通さないよー！」

気がついたのか、少々あわてた口調で言った。

「ふむ。だがこれは…魔力か？なら能力を使つては駄目だな。」

「そ、それは聞き捨てならないかも！」

ぱつと立ち上がり、インデックスは両手をガオーと上げながら俺の発言に批判する。

「俺はありとあらゆる異能を打ち消す力を持っている。故にその能力にぶつかれば、その服は粉々になり…素っ裸になるであろう。」

「！！！！／／／／／」

途端、インデックスは屈み、服を守るかのような形をとる。

「…まあ、能力はともかくだ。俺は基本的に格闘、または氣による放出系での戦いをする。」

右手をインデックスに向ける。右手に水色のオーラが溢れてる。

「…では、試そうか。」

顔を若干青くするインデックス。くらったらヤバイなと本能が告げているのだろう。まあ、やる気はないがな。

演技をしているとインターホンが鳴る。…誰かね？こんな時に…。

誰から見ても今の俺は気だるそうだろう。

玄関を開けると、頭がツンツンの黒髪と金髪でサングラスをかけた危ない奴等がいた。わかるであろう。土御門と当麻だ。

何故この二人が来ているのかは心当たりがある。

「…ではさらばだ。」

扉を閉めて放置し…

「ちよつと待ったニヤ〜。」

「な〜に現実逃避をしようとしてるんだ？霊牙君？」

扉を二人で掴み、扉を閉めさせまいと二人は無理矢理扉を開ける。当麻よ。お前は完全にキャラが変わった。疲れきった目はしておらず、リア充してますよという目をしている。

リアはお前もな。霊牙。

「俺たちが毎日の補習で苦しんでるのに霊牙君はいいいいつにな

「… っ たら補習に来るのかな？」

「… ふむ。覚えているであろうか。俺は超能力関係以外ならば満点、または一問程度のうっかりミスで95点以上は確実にとれる。が、超能力関係は別だ。筆記問題で一桁をとってしまったのだ。… 0でないだけマシだろう。まあ、それで補習があつたのだが、虚空爆破事件で補習に行く暇がなかった。だが、虚空爆破事件は解決した。つまり、今の俺には補習に行けない理由がない。行けないと言っているが、実際は行きたくないのだが…。暑苦しい教室に行けと？無理だな。何故なら「長つたらしい説明はおしまいにして…」さあ、上条さんと補習に行きましょうか。」

「… 読心術… だと…？」

「な、何かないか！何か理由を！理由を…！！！」

「そ、そうであつた！お前達、レベルアップーとやらの都市伝説を知っているか？」

「… レベルアップー？」

「確かレベルを無条件で上げる事が出来る物だつたニヤ。」

「ふむ。そうだ。実はだな、そのレベルアップーとやらの調査をしているのだ。虚空爆破事件を覚えているな？そやつはlevel2らしいのだ。だがlevel2程度の者が… 当麻は知っているであろう？あの破壊力。つまり、我々風紀委員はレベルアップーが本当に存在するのであるとと推測。レベルアップーの調査に入っているのだ。」

「……。」

ち、助かったな。これが今の二人が思っている事だろう。そのような顔をして睨んでいる。まあ、放置という方針でいこうか。

玄関を閉め、そして再びインデックスの元へと歩く。

「ふむ。まあよい。インデックスよ。暫くここに居るがよい。魔術側が何故お前を狙うかも聞きたい。」

「ううん。いいよ。ここにも迷惑がかかる「誰が迷惑だど?」へ?」

インデックスが首を傾げ、何故かと理由を求める。

「邪魔だとも言っていない。さらに俺はお前を使ってあいつらが何を目的かを掴もうとしている。つまり、悪く言えばお前を利用してると言っているようなもの。それに…神裂火織…奴ともう一度刃を交えたい…。」

…暫くの沈黙が走る。そして、その沈黙を破るが如く、インデックスは口を開く。

「…わかった。ここに残るよ。」

「ふむ。良き決断だ。という訳だ。霊美よ。暫くここに泊まってはくれぬか?俺が留守の時に狙われては困る。さらにお前なら赤毛の煙草の餓鬼なら倒せるだろう。」

「え!?!?!わ、わわわわわ!?!?!ま、まあ良いで

すけど…その…よ…夜の相手も「するわけなかるう。」……。」

…何故orzのポーズをとっているのだ？ま、まあ良い。

そこで俺の携帯電話に着信音がなされる。電話のようだ。通話のボタンを押し、そして通話の相手と話す。

「…もしもし？」

《風紀委員の霊牙さんですか！？》

「あ、ふむ。まあそうだがどうしたのだ？というより何故俺の電話番号を…。」

相手は知らない女だった。だが声がいかにも焦っている。ただならぬことなのだろう。

《男の人が！男の人が男の人に襲われています！！》

意味がわからん。とにかくだ。駆けつけねばならんのだろうな。

「ふむ。とにかく落ち着け。場所を言ってくれ。」

《はい！——の河原です！》

「了解した。」

携帯電話を切り、そして真剣な表情で二人に話す。

「…仕事だ。どうやら今回は戦闘になる。インデックスを頼む。」

「はい♪まず相手が来ましたら凍死させますので♪」

「…殺すなよ？」

「殺さないので安心してください♪精々両手両足が使い物にならないくらいでよしくまいますので♪」

「……………」

神裂火織、それからスタイルとやらよ…。来ない方が良い。死ぬぞ？

「…さて。ではインデックスよ。家から出るなよ？行く必要があるならば霊美と行動せよ。良いな？」

こくりと頷くインデックス。

「ふむ。良い子だ。」

頭をポンポンと撫でるように軽く叩き、そして微笑む。

「！？／／／／こ、こ子供扱いは禁止だよ！／／／」

赤くなりながらガオーと両手を上げて怒る。…ふふ。これは微笑ましい怒り方だ。

「…では、行くか。」

玄関を開け、そして氣で身体能力を強化し、一気にスピードを上げ、現場へと向かった。

…食材はどつすれば良いのだ？

転生者（前書き）

はい。高祖です。

題名通り、転生者が出てきます。

転生者はチートのつもりですが…まあ、その…チートでは無いのでは？と疑問に思つかもしれません。申し訳ございません。

では、ご覧ください。

転生者

ふむ。霊牙だ。

何故俺の電話番号を知っているのかは謎だが知らない女からの急な知らせ。現場に急行。

そして今、現場に到着しているのだが、魔力が感じられた。人払いの結果だろう。人払いの結果とは、その空間にいると何故かここに居たくなり、その場から結界の外へと去る。多分その女はたまたま結界の外に出ている途中に見つけたのだろう。

現場には女がいない。いや、駄目だろ。だが…まあ良いか。そして現場にいたのは肌が白く、髪も白い。手足は細く、いかにも弱者であるう体つきの青年が倒れ、そしてそれを見下すかのように銀色の長い髪の毛をし、細くもなければ太くもなく、必要な部分のみ筋力を上げている体つき。瞳は青、顔立ちは整っており、黒いマントを羽織った男がいた。

…直ぐにわかった。こいつは強大な魔力、そして僅かながらも神力も混じっていた。これは神から能力を貰った証拠。決定だ。こいつは転生者。

取り敢えず二人の間に割り込む。

「ふむ。いつたいここでなにをしているのだ？」

「ちい！なんで人払いの結界を張ってんのに人がいるんだあ？」

ぼそりと言ったつもりだが、銀の髪の者の言葉は聞こえた。

「ほう？人払いの結界…と？成る程。これはやはり貴様が張ったのだな？」

「！？モブキャラだと思ってたが魔術の事に関して知識がある…お前も転生者か。」

「否定はせん。確かに転生者だが俺は人であって人では非ずだ。」

「…何が言いたいんだ？まあ、いいか。てかお前邪魔だ。早くどこか行けよ。俺は早くこいつを殺して俺の嫁、御坂タンフラグを立てんだよ。」

…いつたいなにを言っているのだ？

「…御坂が喜ぶ？何を言っているのだ？」

「へ？」

途端、転生者は固まった。いや何故？

「…マジかあああああ！！まさかまさかの原作介入の時期を間違えたのかああああ！！じゃあ一方さん倒しても無意味じゃねええかああああ！！！！」

一方さん？そこに倒れている奴の事か？気絶しているようだが…まあよい。

「…とにかく貴様が転生者だという事はわかった。この外史を守る

ためにも貴様には…死んでもらう。」

氣で戟をつくり、それを構える。能力も発動させている。

「はあ？俺と戦う気か？はん。ならこいつでもくらっとけよ。」

転生者はコインを取り出し、そして俺の友が使う技の形をとる。

「俺の超電磁砲は…原作と違って甘くねえ！！」

放たれたコインは、もはや電流にしか見えない。御坂のと比べると10倍程威力が大きいだろう。

能力で打ち消し、コインはキャッチ。

「…さて。次は何かね？」

「！？お前…イマジンプレイカートレス・オンを持つてんのかよ！なんならこいつはどうだ？投影開始！」

転生者の手に現れたのは二つの剣。それを持ち、俺に駆けてくる。

「イマジンプレイカーは右手だけ！ならこの二つのエクスカリバーでぶったぎればいい話だ！」

エクスカリバーという剣が俺に振り下ろされる。が、その剣は俺の目の前で消滅。

「な…な…！」

「…次は此方から行こう。」

戟を持つ手に力を込め、そして縦に一閃。が、流石は転生者。分か
りきつてはいたがやはり力は強大。反射神経も何もかも普通の人間
とは違う。驚いてはいたが、後ろに跳躍し、俺の攻撃をかわす。

戟には、透き通る水色に少し赤い色の液体、相手の血がついていた。
相手を見ると腕に傷が一つあった。

「…何者なんだよ…あんた…チートで無双できるかと思ったんだが
…あんたはどんだけ強い力を神から貰ったんだよ…。」

若干声が震えている。まあそうであろう。神から貰った力なのにあ
っさりと防がれ、更には傷をもつけた。

「ふむ。…これは神からの力に非ず。これは元々の俺の力だ。更に
は俺は唯一神と戦う事ができる力を持っている者…いや、持ってい
た者と言った方が良いでしょうな。」

「な！？…じ、じゃああんたは…あの神が言ってた…あの“最教の
管理者”とかいう奴なのか…？」

「…そのような異名が…。というか“きょう”の字が違うぞ。多分説
教の“教”からきているのだろうが…あれでは別の意味に聞こえる
…最も教える…意味がわからんな…。」

「…因みに神の名を覚えてくれぬか？」

「アテネ。」

.....。

アテネ様…この外史が完結したら説教だな。ふむ…1年ぐらいが良
いな。あと書類仕事を霊美に頼み、通常の50000倍を出すよう
頼もうか。

そういえば、ヘラクレス將軍は何をしているだろうか…。1度、俺
の説教を受けたら攪乱し、霊牙が苛めたああ！とか言いながら書
類仕事をほっぽりだして逃げてそれから行方不明なのだが…。最高
神ゼウス様にも探索は出さないでくださいと、右手にチェーンソー、
左手に鞭を、そして満面の笑みで言ったら顔を青くし、半泣きで了
承した。しかし…俺より力が強いのに何故あれだけの事で半泣きす
るのだ？

ゼウスも一度、霊牙の説教を受けました。

まあ良い。今は転生者を片付ける。

「…では行くぞ。少々痛いが…我慢してくれ…。」

そうして、右手を構えて氣弾を放つ。相手は当麻と同じ力を使おう
としたのか、右手を氣に向けた。が、氣は異能ではない。誰にでも
ある生命力。転生者は爆発し、そして跡形もなく消えた。

……辛い。が、霊美に連絡しておこう。メールで転生者の事を書き、
そして処理を頼んだ。

（転生者 side）

何なんだ…何なんだよあの男！しかも無駄に格好良いし！口調は変だし！

それはいい…だけどよお、神から貰ったチート能力だぜ！？全体的に身体能力を上昇させて、さらに魔力をEXにして、俺の知ってるアニメの技が使えるようにしてもらったのに…何なんだよ！

エクスカリバーは一瞬にして消滅させられて…更には俺に傷をつける…！

だ、だがまだあるじゃないか。あいつも当麻みたいにイマジンプレイカー、それを体全体、いや、結界だろう。触れてないのに消滅したんだ。なら俺もイマジンプレイカーを使って、あいつの能力を無効にした時に倒す！

右手にイマジンプレイカーを発動させた時、相手がなにやら水色の弾を放ってきた。どうやら魔法弾かなんかだろう。異能は右手で打ち消せる！

右手を構え、打ち消せそうとしたらそれは俺に当たり、爆発した。

…熱い…熱い…アツイ…アツイ…イタイ！

…辺りが一瞬暗くなり、そして目をあけた。

…俺の部屋？

床にはDVDソフトやらゲームソフトやらが散らばっていた。俺はベッドの上で寝ていた。

…あれ？俺って…何してたんだ？あれ？あれ？

ベッドから起き上がり、そして鏡を見た。…いつもの俺だ。黒い髪、
冴えない目、眼鏡もついてる…いつもの俺だ。なんで鏡なんか見て
んだろう…。

…まあ、今日は休日だ。さあて、昨日ゲ○から借りたとあるシリ
ーズでも見るか！

（霊牙side）

…転生者は一度殺して、その魂を死ぬ前のその転生者のいた世界に
戻す。記憶も無くし、ここで過ごしてきた日々も思い出せなくなる。

そして、転生者の家族。その家族の記憶を修正し、さらに転生者と
関わった者の記憶も修正する。

…あまりこの仕事はやりたくない。結局は殺すのだ。殺す事には慣
れてはいけない。いずれか慣れたと言ってしまいそうで怖い…。

…まあこの話はここまでにしようか。さて…こやつをどうするか。

能力を解除し、そして倒れている者の手当てをする。

触れようとした時だ。

何故か触れられない。倒れている者に触れようと手を伸ばしたらそ
の手が跳ね返った。超能力か？

能力を発動し、やはり能力であつたのだろう。氣を流し、傷の当てをする。傷は全て塞がったが、氣絶からは回復していない。

：取り敢えず移動しよう。氣絶している者を担ぎ、氣で身体能力を強化し、ここをジャンプして公園へと向かった。

一方通行（前書き）

注意

キヤラ崩壊がおきます。申し訳ございません。

ではでは...どうぞ。

一方通行

ふむ。霊牙だ。

とある公園にて、白い肌に白い髪、今は亡き転生者に襲われていたものだ。見るからにして体つきが弱者そのもので、下手をすればそこらの女子の方が力が合ったりするかなのような体つき。

ベンチに寝かせ、暫く安静にさせている。

俺の片手には缶ジュース、天然サイダーとやらがある。どうやら天然水を使ったサイダーのようだが…はつきり言って不安しか無い。

俺もベンチに座り、そして缶ジュースのふたを開ける。プシュツという音になる。ふむ。炭酸水ではあるな…まあ当たり前か。

香りは…悪くはない。かと言って良くもない。というより香りがしない。不思議だ…。

恐る恐る缶ジュースを飲む。

………。

「ぶはっ！？な、なんだこれは！？あ、甘すぎるではないか！？このようなものが良く缶で…更には自動販売機で売られていたものだ…。」

ついつい口に出してしまった。

味は俺の台詞で分かっただろう。甘すぎるのだ。

ソーダ水に砂糖をかなりの量を入れた感じだ。とても飲めるものではない…何故か口の中には粘りが…。

言い忘れていたが、今は夕方だ。空は紅く、オレンジに染まっている。

「……………ンあ？」

隣からなんとも腑抜けというか、独特な話し方をする声が聞こえた。…ふむ。人の事を言えたものでないか…。

ベンチで寝ている俺が運んだ青年。そいつが起き上がり、俺を見た。いや、睨んでいた。

「ふむ。起きたかね？」

「なんだ？あんたは誰だ？」

ベンチに座ってはいるが、かなり睨まれている。殺気は…若干あるが、この程度ならば気にする価値すらない。

「ふむ。俺は黒崎霊牙だ。河原で倒れていた故、ここまで運んできたのだが…ふむ。これで良いか？好みが分からん故、これで我慢して貰いたいのだが…。」

もうひとつ買っておいたブラックの缶コーヒー。何となくだが、コーヒーが好きではないかと思った故に買った。

缶コーヒーを投げると男はそれを受け取り、不機嫌そうに頭をかきながらふたを開けて飲む。

「……一応言っておくが、コーヒーも依存性があるのだぞ？」

「だからつつたつて害になる訳じゃねえんだろオ？」

独特な話し方だ。

「しかし…独特な話し方だな。」

「ンあ？お前も人ン事言えたもンじゃねえだろオ？」

…。バンクとやらで見た事がある気がする…。確かLevel5にそのような感じの男がいたような…。

………。

「ああ、一方通行か。確か学園都市のトップとやらの…。」

「…“アクセラレータ”じゃなく“いっぽうつつこつ”と言っあんたもおかしいだろオが。」

「ふふ…まあ仕方ないではないか。俺はこのような読み方は好まんし…努力はしよう。“アクセータ”。」

「……………」。

…む？無言とな？さらに睨んでいると？ちゃんと発音したよな？アクセラータ…？アクセルータ…アクセ…ロリータ？

「あん？」

む、無言の殺気とな…読心術なのか!?

〈一方通行side〉

ツたく何なンですかア?

目が覚めたら男がいた…が、何なンだ…こいつといると調子狂う。

「ふふ…まあ仕方ないではないか。俺はこのような読み方は好まんし…努力はしよう。“アクセータ”。」

……………。

ンだがこいつといると…妙に落ち着く…ケツ!!

何だ何だ何ですかア?この気分は胸くそ悪ィ…今までンな事があったか?

〈霊牙side〉

…暫くの沈黙が続く。アクセラレータ…おう…出来た…。アクセラレータは空となった缶を右手の親指と中指でぶら下げるように持ち、無言で太陽の光を見ている。

…妙に落ち着く。

「なァ、あんたはどうして俺に構うンだァ？」

ふと、アクセラレータが口を開いた。そして独特な話し方で俺に聞いてきた。人の事を言えたもの（ry

「では此方からも聞こう。構っては駄目なのか？」

「あン？」

予想外だったのか、アクセラレータは持っていた缶を落とし、俺の方に向いてきた。

「何故構ってはいけないのだ？質問を質問で返すのは悪いが、何故だ？」

「危険だつてのが分かんねエのかァ？学園都市で第一位の「第一位が何だ？」…。」

「第一位だろうが結局は人だ。」

強さ故の孤独…。

多分アクセラレータはそれに慣れてしまっているのだろう。

「…話は変わるが、お前はその力を何に使うのだ？いくら強くしたとしても、いったいなんのために力を求める？」

「じゃああんたはどんなンだア？」

「ふむ。それは当然、この身を守るためだ。」

「チー！ンだよその答えは…「それともう一つ。」「…。」」

「友を守るためだ。」

俺は力の無い人や困っている人を守る、助けるためではない。ただ友を守るため。酷いように聞こえるが、だからと言って全てを助ける、守るような正義の味方は御免だ。

「ガツカリか？皆を助けるためだの、世界の平和を守るためだとそのらのヒーローを気取って欲しかったかね？」

「ンな事言ったら俺がぶっ殺してたとこだア。」

「ふふ…お前も冗談が言えたのか…驚きだ…くく…。」

我ながらこの笑いかたは不気味だろう…。だが…こいつは面白い…。

「強さ故の孤独か…。ふむ…お前は結局、人との接触を拒んでいただけではないのか？お前が一番恐ろしいと思っているのは自分の能力^{ちから}ではないのか？」

そろそろ日が沈む。

スツとベンチから立ち上がり、アクセラレータの方を向く。

「さぞくだらない夢^{げんそう}を見ていたのだな…。そのくだらない夢^{げんそう}は捨て

よ。捨てられぬなら俺が破壊してやろう。」

アクセラレータに手を差しのべる。能力を使ってアクセラレータのあの時の能力を無力化して…な。

「…お前は何したんだア？俺の能力が使えねエンだが…。」

「これが俺の能力だ。」

「迷惑以外なにもねエ能力だなア。」

「お前にとっては…だろう？お前のくだらない夢はあっさり散った。お前が俺を拒む理由が無くなった。故に…」

お前も今日から“友”だな。アクセラレータ。」

俺を睨む。が、俺にはそうには見えない。周りから見れば睨んでいるように見えるが、俺にはアクセラレータが泣いているように見えた。…遂に頭が逝ったか…などと思っている者よ。俺はMには目覚めていない。さらに頭も逝ってない。

「はア…。んな手はいらねエよ、“霊牙”。俺一人で立てっから。」

話し方がだんだんと軟らかくなっている。確実にそうだろう。

俺の手をどかし、アクセラレータも立ち上がる。

「さて…帰るとしよう。家まで送ろう。」

「“着いてくる”の間違いじゃねエのかア？」

「はは…酷いな。」

そして俺と一方通行は日^{アクセラレータ}が沈み、夜道を雑談しながら歩いていった。

ふむ。メールアドレス等を交換したのだが…まさか一方通行の方がらくるとはなあ。一方通行の家も分かったし…たまには遊びに行くのも良いかな。

一方通行…楽しい奴であった。さりげなく…自分に似ていたような…気のせいかな。

黒崎靈牙 vs 神裂火織（前書き）

ご都合主義はつくもの。

故に我有り。

…意味が分かりませんね…。

とある科学の超電磁砲でのレベルアップものがたりに関しての外史を楽しみにしていた皆様、申し訳ございません。

主人公の能力では、なんか…一瞬にして終了してしまうのではないだろうか？と思い、スキップさせていただきました。

あと、今回はまさに題名通りですが、まあこころへんの内容があまり理解出来ないというか…なんか難しいというか…故にこれはないだろ？という部分が出るかもしれません。

僕的には…頑張って調べたつもりです…。

では、ご覧ください。

黒崎霊牙 vs 神裂火織

ふむ。 霊牙だ。

突然ではあるが、レベルアップの件はどうやら解決されたらしいのだ。インデックスの影響により、仕事という仕事も出来ず見張りの毎日である。食費もかなり費やす様になり（主な原因はインデックスにあり）、俺もアルバイトにて金を稼いでいる。その時は霊美に見張りを頼む。そして当麻、土御門からには補習に出やがれと襲われたりした。

この際である。はつきり言おう。ストレスが爆発寸前だ。

だが仕方がない事である。彼女は狙われているのだ。悪に狙われているというヒーローに存在するヒロインの様ではなく、悪にあたるあの二人は何らかの理由があるのだろう。

因みに小萌にこの事は話した。話したら小萌は了承の答えが返ってきた。故に小萌に何か礼をしたいのだが…何も出来ないでいる。

皆で銭湯へ行こう。

もう毎回行っている。インデックスはその度に片手を腰に当て、小萌と共にグビグビとコーヒー牛乳を飲んでいるそうだ。霊美が言っていた。

何か奢ろう。

その奢る程金に余裕は無い。更には俺までアルバイトをして稼いで

いる程なのだ。その様な事など出来る筈もない。

言うことを一つ聞こう。

無理に決まっているであろう。此方もストレスが溜まっているのだ。

という事により一日、二日、三日と日は経っていく。

「小萌、インデックスよ。行くぞ。」

バッグを二つ担ぎ、俺は基本は制服姿故、今日も制服姿でいる。…
何故かこちらの方が落ち着くのだ。

玄関にて靴をはき、二人を呼ぶ。二人はテクテクと玄関へと走ってくる。

「れいが、大丈夫？」

「心配無用だ。お前が心配する必要は皆無だ。」

心配をかけたくない。笑顔で頭を撫で、安心させようとしたが不安な表情は変わりなし。

「嘘です！霊牙ちゃんはアルバイトだけでなく、風紀委員の仕事で夜遅くまで仕事をしてるじゃありませんか！」

心配するのは無理ないであろうか…。

アルバイトが終わると風紀委員へと立ち寄り、事件の書類を貰い、その情報にて整理をする。分かった情報は飾利か黒子へと連絡をす

る。主に飾利であるが…。

そしてその事件が解決したら次の日にて新しい書類をもってくる。
動けない分、情報にての仕事だけはしたい。

「その心配してくれている言葉のみで充分だ。いや、充分過ぎるくらいだ。心配はいらない。その心遣いを有り難く頂戴しよう。」

今度はインデックスにのせていた手を小萌へと移し、頭を撫でる。
…が、インデックスと同様、不安で心配でいっぱいだという表情をしている。

「さあ、行くぞ。」

二人を率い、玄関の扉を開け、外へ出た。

夜道にて、銭湯へと向かう俺、インデックス、小萌。やはり俺が悪いのだろう。因みに霊美は今日はいない。

途中、人通りがやけに少なくなった。…魔力？

氣は…二つ。この氣の流れ…火織とスタイルとやらか。

足を止め、二人へと振り向く。

「すまない、二人とも。先に銭湯へと行っていてくれ。忘れ物をした故、一旦家へと戻る。」

「うん。分かったよれいが。」

「ほら、これでコーヒー牛乳を買いな。ほれ。小萌の分もあるからな。落とすなよインデックス。」

300円と小萌達用のバッグを渡した。

「ほれ。先に向かえ。な。」

にこりと微笑み、頭を撫でる。

インデックスは俯きながら小萌を連れて走っていった。若干小萌が不機嫌そうであったが…。

さて…。

「もう出てきて良いのではないだろうか？ステイル…それから火織よ…。」

二人は物陰から出てきた。ただ、ステイルは隠れてはいないがその場にとどまっている。

「お心遣い、感謝します。」

「抵抗する力の無い者を戦いに巻き込ませるわけにはいかん。戦うのは…我らのみで充分だ。そして…ステイルは何をしているのだ？」
ステイルは頭をかきながら煙草を吸い、俺の問いに答える。

「神裂が一对一で戦わせろって言うものだから、僕はここで待機っていう事だよ。」

「…火織、やはりお前とは味方同士で戦いたかったな。」

「ええ。ですがそれは叶わぬ夢…ではないでしょうか？彼女を渡してくれば、貴方の敵でなく済むのですが…。」

「ふ…。それこそ戯れ言だ。」

氣で戟を作る。水色にて透き通る綺麗な戟。だがその戟はとてつもなく頑丈であろう。

道路へと出る。

火織は長い刀をもち、鞘からはまだ抜いていないが構えている。

「出来れば抜きたくないのですが…貴方が相手となるとそうはいかないでしょう…。」

「…本気の勝負…を望むと…？願わくは鞘を抜かないで欲しいものだ。俺も本気を出さねばならなくなる。」

「私の“七閃”を看破しながらもまだ本気ではなかったと…？」

「ふむ…。思えば本気の戦いなどした事がなかった。」

…俺の台詞で一旦会話が途切れる。そして両者が構える。

火織は剣の鞘を抜いた。鞘は左手に持ち、右手に刀を持っている。

…両者互いに動かない。いや、動けないのだ。隙を一切見せず、少しでも、ほんの少しでも気がそれれば刀、もしくは俺の戟でどちらかがぐさりであろう。

火織も隙を見せるものの、それは俺を誘うための罠であろう。基本、こういうのは隙をつく。だが隙をつくからこそそこに攻撃がくるのを予測出来てしまう。

…らちがあかないな。ならば…。

「…！？」

火織は驚いてはいた。それはそうだ。今の俺は隙しかない、ただ構えているのみ。隙をつくのが基本であろう。ならば隙のみしかなければどうするであろうか？

そこらの…特に黒子辺りならば背後をつくであろうが、それが狙いでもある。寧ろ背後について欲しかったのだが…無意味だったようだ。仕方がない。

「…俺から行こう…！」

戟を構え、そして氣で身体強化をし、一気に駆ける。先手は俺であるが、有利なのは火織であろう。むやみに攻撃すればカウンターに

て斬られる。それを覚悟の上で駆けたのだ。対策はあるのだが効くかどうか…。

ガキンツというもはや轟音に近い音が鳴り響く。やはり火織はカウンターときた。刀は俺の戟を受け流し、そして横に一閃くる。

俺は余った手に氣で硬化をして防ぐ。

「…！？」

「氣というのは便利だな。氣にて体を硬くする事もできるのだが…。

」

受け止めた手には血が流れていた。

「…これ程の力とは…な。次は此方からだ…！」

「あぐっ！？」

腹を蹴り上げ、空中へと飛ばす。

だが流石は火織だ。空中で体勢を取り直す。俺は空中にて戟を思いつきり力を込め、振るう。

振るうと同時に戟に氣を込め、そして放出。かまいたちのようになる。

火織はそれに気づき、空中にてかわして地面へとおりる。空中でかわすとは…本当にこやつは人間なのか？人の事を言えたものでないが、人外だな。

再び両者構える。

「…Salvare000…“唯閃”！」

！？

刹那、氣にての硬化で傷は浅いが、まさに神速の如くの速さの一閃であつた。

…が、腹から血が出ている。ダメージは小さくない。腹を押さえ、氣で回復させる。

「…貴方は…今が見えましたか？」

背後にて余裕であろう表情の火織。

「貴方を殺したくない…。特に貴方は…殺したくない…。ですので…彼女を此方に渡して「戯れ言を言うな。」「…何度でも問います。」

戯れ言…まさに戯れ言であつた。

（インデックスside）

れいがの様子がおかしかった。だから先にせんとっへは行かず、れいがを隠れながら様子を見た。

そしたらやはりれいがは私を追っていた人達と戦ってた。れいが…
あとでおはなしだよ？

因みにこもえも一緒にいる。

女の人とれいがの戦いは私たちの目に追えるものじゃなく、そして
気がついてたられいががお腹に手を当てて膝をついていた。

私は思わず飛び出しそうになった。これ以上れいがを傷つけたくない…。
けどこもえの手によって止められる。

目で訴えるこもえ。行つては駄目と訴えてる。けど…れいがが…！！

その時、れいがの声が聞こえた。女の人と話し始めた。

「その言葉こそ正に戯れ言。」

れいがは立ち上がって、武器？を手に持って話す。あれ？傷が治つ
てる。

「これは俺が示した道。今している事に後悔はない。」

「…何故…そこまでして…。」

「では此方からも聞こう。何故そこまでしてインデックスを狙うの
だ？」

れいがは武器？を構える。

「お前はインデックスの記憶を消すために来ているのだな？」

「!？」

「その反応は肯定と受け取ろう。そして魔導書の知識が危険故、仕方なしに記憶をちよくちよく消している…それで良いかね？インデックスは記憶が無いと聞いている故、それから推測したのだが…。」

「……………!？」

女の人は何かに気づいたかのような表情をしてる。って事は…私の記憶が無いのは…あの人達が原因…。

「…私が…私達がしてきた事は…間違이었다のでしょうか…。」

く神裂sideく

ようやく気づいた。

…ようやく気づいた。

彼、黒崎靈牙の言葉をもとに考えてようやく気づいた。

『組織』…それが彼女のために何かするとは思えない…。

という事は、記憶を奪わなくては彼女は死ぬ…。それは嘘であって、本当はなんらかの魔術にかかっている…。

私は…間違이었다のか…？

「…何かに気づいたのかは分らんが、今更自信のしている事に後悔はするな。」

彼…黒崎霊牙は武器を構える。

！？

ふと彼を見る。それは赤いなにかが溢れ出ている。良く見ると武器が赤い色に変わり、彼の体からは…あれも氣だろうか？霧のような…つまりオーラのようなものが出ている…。

…不味い…。

勝機は私に向いていた。が、私の考え、更には彼の何らかの力により、今の私では彼には勝てない…。

危険…危険すぎる…！

私がこう感じたのも初めてだろうか…？

私の頭の中には、敗北という二文字が浮かんた。

「…火織よ。何度でも問うと言うのならば…“我”は何度でも答えよう。」

（霊牙side）

火織は何か気づいたのか、戦意が下がった気がした。だが…イン

デックスを拐う事には変わりなし…なのだろう。

“唯閃”…恐ろしい技だ…。見えない速度ではなかった…が、体がついていけなかったのだ…。

あの一閃に勝るためには…これを使うしかないであろう。

氣をほぼ全て身体強化へもっていく。

ぐ…！

体が…！

氣の色が赤色となる。

「…さあ、くるがいい！“我”の本気を…とくと味わえ…！」

「…“唯閃”！」

同じ技だ。だが…今の“我”ならばその程度など…容易い…！

武器と体を使い、武器で攻撃を防ぎ、体を壁として動きを止める。

「な！？」

「弱い…弱いぞ！」

右手に武器、片手の俺と火織は両手。その力比べで互角…。やはりこれ程の力とは…。

左手で火織を殴る。

「あぐつ！？」

前へと吹き飛ぶ。俺はそのスピードを追い抜く、さらに速いスピードで火織の後ろへ回り込む。

「ぐつ！？」

肘で火織を止める。

火織は…気絶したか。

気絶した火織を受け止める。

氣の強化を解除…くつ！氣の消費が…！

かなりの眠氣が俺を襲う…これはかなり氣の量が少ない証拠であるう。

「れいが…！」

…インデックス？

「靈牙ちゃん！」

…小萌？

二人は俺に駆け寄ってくる。インデックスは俺に飛び付いてきた。今の俺ではインデックスの勢いも止める力も残っていないのか、イ

ンデックスを抱えるようにして倒れる。

火織は…ステイルが受け止めていた。

「れいが…れいがあ…！」

「………… インデックス、すまない。」

俺の胸で泣きついてる。

ふう…。

「…黒崎とか言ったね？ インデックスをもう狙うような真似はしないよ。」

ステイルが火織を受け止めながら俺に話してくる。

「…何故かは…聞きたいが…俺の体力がもう限界のようだ…。ステイル…すまないが…暫く眠る。もう襲わないのならば…小萌よ…ステイルを家へ案内してやってくれ。すまないステイルよ…火織のついでに俺も運んでく……………れ……………」

はあ、まったく疲れるねという愚痴が聞こえた。 まあ良い。

俺は眠気に負け、そして路上にてインデックスを抱き締めながら眠った。

呪い解放、そして狙われる（前書き）

激強そうな敵を出してみました…。

一応主人公は油断をしていた、という事です。

なんか…あれですね。主人公は油断していたというかたちです。

気がついたらお気に入り登録者が100人突破しました！有り難うございます！

駄文ですが、これからも宜しくお願いします！！

呪い解放、そして狙われる

む、むう…。

何かね…無駄に重い…。

寝苦しい…。

寝かせてくれぬかね…。

今もの凄く眠いのだ…。

「ムニヤ〜…れいが〜…」

「むう〜…れいがちゃん…」

「んん…兄様あ〜…」

…聞いたことのある三人の声が聞こえた。嫌な予感しかせぬな…。

恐る恐る…目を開けて起き上がろうとしたが…なにかねこれは…？

布団に寝ていた俺…だが左手には霊美、右手には小萌が引っ付いており、更にインデックスは乗っかっている。俺の上で寝ているインデックス…なんというか…ある意味才能であるよな？

だが…足も動かぬ…。

動かしてみると…

「ん……あん……」

嫌な声が聞こえるのだが…。

恐る恐る足を見てみると…何故火織まで引っ付いているのかね…？
お前は相当関係無いと思うのだが…？

「れいが…いただきま…しゅ…」

首筋に口をつけてきた…いや、噛んできた。かといつても…犬の甘噛み程度…いや、それも充分痛いのだがな…更に首故苦しいのだが…？

「んん……んにゃ？」

「……インデックスよ…苦しいのだが…」

「………！?!／／キヤアアアアアア！！／／／」

ガブツ！

「…インデックスよ…この仕打ちは無いと思うのだが…？」

「う、ごめんれいが…」

小萌の部屋にてインデックスにより噛まれたところに氣を流して治療をしている。インデックスの暴走により、皆は起きたのだが…

「……ッ！／／／／わ、私は…なんという事を…／／／」

部屋の隅にて火織は何かをぶつぶつと言っている。これは…どうすれば良いのだ？

「火織よ…お、俺は氣にしている…故にお前も…いい加減それは止してほしいのだが…？」

「……わかりま…！！／／／／」

俺の顔を見た瞬間にまた同じ行動が始まった。

「ん／／／靈牙ちゃんの匂いですう／／／」

「はふ／／／最高ですう／／／」

一方小萌と霊美は俺の寝ていた布団と枕を抱いたり纏ったり…小萌が布団で霊美が枕だ。

…読者の皆よ、質問をしたいのだが…。こついつのを混沌カオスといつかね…？

暫くこの状態が続いたが、ステイルの登場にてこの場は収拾カオスされた。

ちやぶ台の上にはちやぶ台を囲むように座り、右から順に俺、小萌、火織、ステイル、霊美となっている。因みにインデックスは俺の膝の上にてポリポリとせんべいを食っている。せんべいは醤油に限る。そうだと思わぬか？インデックスよ。

「
」

…無駄に上機嫌だな。

「さて…ではインデックスの事について話し合おう。あ、そのせんべいは食べても良いぞ？一応俺が作ったのでな。」

「せんべいまで作れますか…。ある意味凄い才能ですね。超能力関

係以外は。」

「そうです。霊牙ちゃんはとても優秀でいつも満点、または満点近い点をとってます。超能力関係以外で。」

霊美と、更には小萌も追い討ちをかける。

お前ら…

「…霊美よ、お前にはもう馳走せん。小萌よ。お前は今日飯抜きだ。」

「「しよれだけは〜!!」」

泣きついて俺に許しをこいてくる。

「…黒崎霊牙…彼は力は異常でもごく一般的に過ごしているのですね…。」

「だね…。君もあの輪の中に入りたくないんじゃないのかい？」

「いや、そんなことは…／＼／」

「はあ〜…」

そしてステイルには呆れられている。…火織よ。俺の呼び方…もう少し気軽に言ってくれぬかね？

「さて…本題に入ろう。俺の膝の上にて未だにポロポロとこぼしながらせんべいを食べているインデックスの事についてだが「もう食

「べ終わつたよ?」…。」

「…なんか馬鹿にされたかも。」

「そのような事あるわけじゃないか。インデックスよ。」

膝に乗っているインデックスを撫でてやる。

「／／／」

「さて、本題だ。インデックスとやらは脳に影響する何かしらの魔術がかかっているのだな?」

我ながら早い適応力。どうでもいいがな。

「何かしらの魔術がかかっているのならば、それを解除する方法がある。」

「それは本当ですか(かい)!?!」

ちやぶ台から乗りだし、俺にずっと顔を近づけるスタイルと火織。

「ふむ。可能だ。可能なのだが…一つ、かなりの問題がある。」

「問題とは…なんでしょう?」

火織の質問。これが一番困るのだ。皆はもう分かっているであろう。俺の能力はあらゆる異能を打ち消す事が出来る力。すなわち能力を発動し、今すぐにでも体全体に俺の力を通す故、体全体を俺の能力の中に入れば問題解決。だが今のインデックスの服に注目してほ

しい。この服は確か魔術を通しての防具。つまり、それは異能。その異能を打ち消すのだから…服が消滅し、素っ裸になるのだ。

だが…

「その問題とは、何かしらの生け贄のようなものは必要という事ですか？」

「いや、そうではないのだが…」ならば、今すぐにも実行してください！」「……。」

早くしろ。せねば殺す。俺には火織の目はそれを訴えているように見えた。ええい…やむを得ない！

「？ れいが？」

膝に乗っているインデックスを下ろし、そして立ち上がり、インデックスとは逆の方向を向く。

「ステイルよ…今すぐに外へ出よ！」

「どうしてだい？」

「…後悔したいかね？」

「…外に出てるよ。」

ステイルは一旦外に出る。玄関の扉をしまった事を確認する。

「小萌よ！身を隠せるものをなんでもよい！準備をせよ！」

「ひゃわわ！？な、ならこれです！」

取り出した…というより持ってきたのは俺の布団。…まあよい。

「すまない…インデックスよ！恨むでないぞ！」

目を瞑り、そして離れない程度に背後に向く。

すまない…インデックスよ…。すまない…読者の皆よ！目を瞑りたまええええ！！

能力発動！

ビリッ！！

「……………？れいが？どうしたの？」

…まだだ。目を開けてはいけない。

「…れいが？」

上を向け…向くのだ。

「か…火織よ…インデックスを…！」

更にトラブルが発生したのだ。インデックスが左右に揺るがしてきたのだ。その行動にて倒れてしまったのだ。仰向けに。

「れいが？」

いい加減気づけ！インデックスよ！！

「インデックス！自分の体を見よ！！」

「？……………キヤアアアアア！！！」

ガブツ！

「…この仕打ちは無いであろう…」

「…外に出てて良かった…」

本日二回目のこの言葉である。ステイルはもう戻ってきている。内

容を説明すると素直に従ってて良かったと呟いている。

一方インデックスはというと…

「…インデックスよ…すまなかったと言ってるではないか…。」

「……………／／／／／」

目を合わせると布団に潜ってしまうのだ。因みに今のインデックスの服装はビリビリに破れた服をでかいクリップでとめている。一応服は治っている。

はあ…まあ何にせよ、もうインデックスの記憶を消す必要は皆無である。

「ステイル、火織よ。もうインデックスの記憶を消す必要性は無い。故に安心しろ。多分だがインデックスも魔術が使えるようになってるだろう。ふむ…まだゆっくりしていくといい。俺は買い出しに行ってくる。それとステイルと火織よ。…火織は二回目だが、これからは俺の事を名で呼べ。では小萌、買い出しに行ってくる故ここを頼む。」

そして立ち上がり、玄関へ向かった。小さいながらも外へ出る瞬間に有り難うございます…と呟いた火織の声が聞こえた。

そしてオンボロアパートの駐車場にて、だ。

パツと見女だが、金色の髪を腰辺りまで伸ばし、水色の瞳。顔立ち等が女であったが、体つきからして違うであろう。姿はとてつもなく怪しく、黒いコート、黒い靴、黒いズボンと黒づくめであった。

しかも夏なのに長袖：大丈夫なのかね？

「…君が黒崎靈牙君かい？」

謎の男の娘の前に立ち、そして返された質問に答えた。

「ふむ。そうだが…お前は何者かね？」

「僕？僕は如月燕也。きさらぎ えんや…一応言っとくけど男だよ？」

「見ればわかるが…っと、どうしたのだ？」

如月が急に涙目となった。

「ヒック…ぼ、僕…ヒック…を男として見てくれたの…君が初めてだよ…うわ…ん…！」

更には泣き出した。確かに中性的な声、男にも聞こえるが女にも聞こえる。更には身長が160ぐらい故、一見本当に女。顔しか肌が見えぬが、その顔もとて綺麗で男にするのが勿体ないぐらいの美しさ…だが男だ。いや、男の娘だ。

「男の娘っていうな…！！」

今度は両腕をバタバタとさせ、泣きながら俺に話す。この行動が更に女々しい…。こやつ…本当に男かね？更にはこやつは読心術も使えるのかね？

試しに…

如月は男の娘だ。

「男の娘っていうな〜〜〜〜!!」

…如月は男だ。

「やっと僕が男って理解してくれたんだね。」

綺麗な笑みで返してきた。

…如月は男の子だ。

「男の子っていうな〜〜〜〜!!」

「では男の娘決定だ。男の子を否定したのだ。ならば男の娘だ。」

「む〜〜!! 騙したな〜〜!!」

…頬を膨らませて怒っている状態をアピールする如月。…動作が女々しい…というより子供…蹴り飛ばしたい衝動が込み上げてきた。

だが…ここは堪えよ、俺。

「さて本題に戻そう。如月は俺に何か用なのかね？」

「うん。用が無かったらここに来ないよ。」

急に真面目モードになる如月。

「僕の用事は…君を倒しに、正確には殺しに来たんだよ。」

！！？

いきなりなんなのだ？こやつは…。

「学園都市に、Level 16に匹敵する超能力の持ち主を殺せば、僕がLevel 16だって認めて貰えるじゃないか。因みに僕はLevel 14だよ。だけど実際はLevel 15に匹敵する持ち主らしいんだ。」

「らしい…とは…曖昧だな。」

「だって、研究員がそう教えてくれたんだもん。Level 16の事は、僕自身が望んでやってる事だから。」

「…俺を殺して最強になりたいと？」

「半分ね。あと半分は…君と本気で殺し合いたいんだよ。じゃあ、まずは小手調べだね。」

何か出す。

身構え、戦闘体勢をとる。

氣で身体能力を強化する。

「じゃあ、君の精神力どれくらいもつかなく？」

なんだ？こいつは…。

一向に戦闘体勢をとらない。更には殺す気なのならば殺気、戦う気

にても闘気は出る筈。だがこやつからはそれが一切感じられないのだ。まるで余裕と言わんばかりに。

「ねえ、黒崎君。」

いきなり話しかけてきた。が…無視だ。

「ちゃんと呼吸してるよね？呼吸の仕方？いいかい？黒崎君。」「息を吐いたら吸う」んだよ？」

なんだ？いきなり…

途端…

「！？ ガツ…………グツ…………あ…ああ…ア…」

息を吐いた時、息が吸えないのだ。

どうした…いったい何が…？

苦しい…苦しい…！！

「…なんだ。弱いや。こんなんじやつまんないや。やつぱり一方通行の方がいいのかなあ？まあいいや。黒崎君。君全然駄目だね。人が多いし殺せない。またいつか会おうね？その時は…本当に殺すよ？あ、因みにそれは気絶したら治るから安心してね？じゃあね。」

そして如月はその場をかなりの速さで去った。

息が…出来ない…！

苦しきのあまり、膝をつきもがく。

そして俺の意識は途絶えた。

如月燕也（前書き）

チートの気配…如月燕也…！

主人公最強な筈なのに…！！

ではどうぞご覧ください。御坂さんが多分輝きます。

如月燕也

目が覚める。

ここは…病院か？

目の前に見えるのは白い天井。頭がかなりボォーっとする。

…覚えている…覚えているぞ…。

如月燕也…。

奴のわけのわからない能力にて俺の呼吸ができなくなつて…気絶したのだ。正直言つて恐ろしい…あの力は初めてだ。奴の力は恐らく…言つた事の反対の事がおこるのだろう。だが…最後の言葉でつかえる。

気絶したら治る…？どういう事なのだ？

これが謎なのだ。もし先程の推測が正しければ、気絶したら治るとは変だ。例えば大胆だが、“死ぬな”と発言したら俺は“死ぬ”。では死んでは気絶もなにも死ぬのだ。なのに気絶したら治るとは…？

そうなると俺の推測は違うという事になる。だが…あれは確か…“息を吐いたら吸う”という感じだった。そしたら呼吸が出来なくなつた。それは確か…だが気絶したら治つたのだろう。故に今、俺は生きているのだろう。

…だがやけにダルい。なんというか…病気になるつた時の様なダルさ

ではない。かと言って、授業中によくあるダルさとかでもない。

…精神的にダルい…。学校で言うダルいなどと比にならない。何もしたくないのだ…。頭はボーっとする上、この精神的な疲れの様なものとは…？

…やめだ。いつもの俺なら敗因を考え、対策等をするのだが…する気がおきん。

…寝よう。折角のベッドだ。敷き布団よりも違う感覚が味わえる。

寝ようとした時だ。何処からか寝息が聞こえる。

…ん？

「すう……すう……」

御坂がいたのだ。俺のすぐ近くにある、というより真横にある椅子に座り、寝ている御坂がいた。

…心配してくれたのだろうか？

「……ん……く、黒……崎……？」

「ああ。御坂よ。心配させ《ガバツ！》ぬ！？お、お前……何を……！」

いきなり御坂が抱きついてきたのだ。胸あたりに水滴……御坂の涙で服の胸辺りが濡れている。

「あんたは…あんたは…！！どんだけ心配したと思ってんのよ…！！」

涙を流しながら声を出す御坂。…俺はこうしか答えられない。

「…すまない…御坂よ…。」

「ウツグ……う……うあ……」

泣き声を堪えながらただただ俺に抱きついて泣いていた。俺は…すまないとしか答えられなかった。ただ…頭を撫でて、すまないと繰り返すばかりであった。

「…御坂よ。もう平気かね？」

暫くその状態が続き、そして30分程度経った時だ。御坂は30分程も声を殺して泣き続けていたのだ。俺をこれ程心配してくれていたのか…。

故に寝間着は胸元辺りが涙にてビショビショである。泣き声が聞こえなくなり、俺を抱き締めている状態にいる。

「すう……すう……」

寝息が聞こえる。また寝たのかね……はは……。

……。

どれ程心配させてしまったのだろうか。最近会っていない上に久々に会った場所が病院の中……更には俺が寝ている時に……。

……如月燕也……奴はまた必ず俺の前に現れるであろう。次は……俺を殺しに……。

……御坂の頭を撫でてやる。不安にさせてすまないと謝罪でもあるが有り難うという感謝の気持ちも込めている。

……無防備な。窓の外を見ると夕方であった。

オレンジ色の太陽の光が差す。幻想的だな。

だが正に俺の能力ちからの様にその儚き幻想を破壊するかの如く、扉が強引に開かれる音が聞こえた。

その音に御坂も起き、扉の方を見つめる。するとそこには……

「れいが……!!」

「靈牙ちゃん!!」

「兄様……!!」

ロリキャラ2名に変態が1名入ってきた。つまり、インデックスと小萌と霊美であった。

「がはっ!!?」

三人は勢いを止めずに俺に飛び込んできた。

「兄様!! 誰にやられたんですか!?! 異端物質ですか!?! はたまた転生者ですか!?!」

因みに説明しよう。異端物質イレギュラーとは、転生者とは違い外史のみに発生する。本来存在しない者の事を言う。何故物質と言うのかは不明だ。

多分如月は異端物質イレギュラーになる者と考えられる。

さて、今の状況に戻る。

「れいが!! 心配したんだよ!?! もしかしてせんべいっていうのを食べたからいけないの!?!」

「霊牙ちゃ〜ん! ぜんぜえは… ぜんぜいは…!」

霊美は俺の体をペタペタと触り、インデックスは何故かせんべいが悪いのかと語り始め、小萌は泣いた。何だかんだで心配してくれているのはわかる。分かるのだが小萌だけだ。まともな反応しているのは。

いや霊美もわからなくはないが… 何故俺の体をペタペタと触るのだ?

「ちょ… ちよつと! あんた達はなんなのよ!」

…御坂が怒り出した。

「れいが！何この短髪は！私というものがありながら！」

インデックスが…インデックスでなくなった…。

「あんた…こいつとどんな関係なのよ！」

どういう関係と言われても…保護者？

「あんた！こいつから退きなさい！！」

「それは無理な話なんだよ！！」

…火花を散らしている二人…もうやめてくれないか…。ここは…病院なのだが…。

黒崎靈牙のやる気が下がった。

黒崎靈牙の体力が下がった。

…自分でやっというて…何処のゲームかね…これは…。

「ふう……。」

気絶から目覚めた俺。病院内にて少々厄介事がおき、その後御坂に時間を教えると顔を青くして帰っていった。

病院内にて私服…小萌が持ってきたものだが、今俺の格好とはジーパン、そしてコーンのポロシャツ。勿論半袖の。

俺は基本私服ならば何処へ行こうがこの格好だ。無駄にオシャレする気など無い。

病院はあの後に退院。一応検査をしたが、問題無し。そして今現在は夜道を小萌、インデックス、霊美と共に歩いている。

「どうしたんですか？ 霊牙ちゃん。」

「ああ…すまない…何故か胸騒ぎがするのだ…。」

「それよりれいが、お腹が空いたんだよ？」

「はは…では帰ったら直ぐに飯にしよう。」

小萌の心配の声に答え、インデックスの声に答える。

…俺の考えすぎかね…？

一歩一歩足を進める速度が段々と遅くなってしまっ…。

そして…携帯電話が音を鳴らす…着信音だ。

足を止め、携帯電話を開き、そして通話ボタンを押す。

「…もしもし？」

《ああ、黒崎君だね？君の友達らしい人とおまけの人が河原にいるから早く着た方がいいよ？》

「…貴様…！！」

俺のトーンの低く、そして明らかに怒っている声に皆が俺の方を向く。

《だから黒崎君が来てくれれば何もしないって。》

「…因みにそやつは誰だ？」

《うゝん…一人は茶髪の短髪。》

「御坂か…。」

《もう一人はその子をお姉様って言ってたよ。》

「黒子…。」

まさかLevel5とLevel4二人を相手して勝つとは…更に人質とは…。

《あ、あと君は2日間寝てたね。その間に僕は弱点を克服するため

にその弱点を無くす対策したから。前の僕って思わないでね?」

携帯電話を切る。

「…小萌、インデックス、霊美。…すまないが…俺は行かなくてはならない…霊美…任せた。」

「ちょ!兄様!!」

霊美の声を無視し、氣で高く跳躍する。目指すは…河原…多分あそこであろうな。

空中にて、俺は考えていた。如月燕也は弱点を克服する対策…すなわち克服したと受け取るう。ならば…その弱点とはなんだ?

その弱点とは…僅かだが、その話している時に攻撃される事であるう。確かに油断、または初めて戦うのならば敗北は必然であろう。だが二度目はどうだ?

立っている。この言葉を言い切る間に攻撃がぶつけられたら向こうとなる。どれ程に話す時間を縮めても、必ず隙はある。多分弱点とはこの事であろう。

ならば…これをどう無くす?どうしようもないのでは?

それを無くしたとなると…どうなるのだ?

そう考えているともう河原が真下である。そしてその場所に着地をする。

「…御坂…黒子…」

「ああ。この二人は大丈夫だよ？ただ寝てるだけだから。」

…二人の間に黒い服装、その怪しさとは逆に、金髪のロングで蒼い目という男の娘「だから男の娘って言うな……！」…のような顔をしている。

「…まあ良いか。」

「まあいいよね。じゃあ、ここに来たって事は彼女達の前で正義を演じてヒーローが殺される悲しいビターエンドを望んだのかな？」

「ヒーローなぞ正に餓鬼がする事。俺は正義があるからこそ戦いは起こるのだと思う。そして俺は…友を助けるために来ただけだ。友のついでのビターエンドはいらぬ。」

「へ…？面白い考えだね。正義は悪と同じって考えるんだね？」

「悪は悪なりの正義はある。正義の対立こそが争いを生む。まあ…今は無関係だが…もし俺がヒーローとなってしまう運命ならば…友の間のみだけで満足だ。」

氣にて戟をつくり、それを構える。

「さあ…戦いの始まりだ。儚き幻想と共に散れ。」

「無理だね。君はその儚き幻想に吞まれる運命だからね。」

そして俺と如月の戦いが始まろうとしていた。

精神操作（前書き）

はいはい。ちょっと遅くなっていました。

…うん…如月君がチートっちゃってます。では、どうぞ。

精神操作

戟を構える。

奴、対峙する如月燕也…奴は能力を必ず使ってくるであろう…。では…能力を発動させ「*@!…」…!?なんだ…?俺が能力を発動させようとした瞬間、奴がいきなり何語か分からない言葉を言った。そしたら能力が使えなくなっていた…。

「…何をした…?」

「僕は“能力を使え”って言ったただだよ?」

今の言葉が…か…?

今のはどう聞いても日本語では…というよりあれは何処の言葉だ?

「ちい…ならば直ぐに片を付ける!」

戟を構え、かなりの速さで斬りかかろうとした。が…

「£*!」

「ぐっ!」

まただ…今度は攻撃する寸前に動きが…ならば…賭けだ!!

「むん!」

「うわっ!？」

戟を地面にかなりの力で叩く。如月の横には小さなクレーターができていた。如月はというとバックステップでかわしていた…身体能力も高そうだ。

「いったい何がしたかったんだい？」

それもそうだ。攻撃の手段が無くなった。それなのに地面を無駄に強く叩いたのだ。クレーターをつくる程の。

だが、ここで気づいて欲しい。“俺には”攻撃手段が無いのだ。そう、“俺には”だ。

「ふふ…ははは！貴様はやはりただの馬鹿だった様だ！御坂よ！好機だ！」

「言われなくなつてやるっつーの！」

御坂が電流を右手に溜めて構えていた。

そうだ。御坂は寝ていたのだ。寝ていたのならば起こせばいい。

そして御坂の電撃は如月へと向かう。が、如月は立ち止まっている。寧ろにやけているぐらいだ。

そして電撃が如月に当たる寸前に如月は…避けた。

「な!？」

御坂は驚きで怯み、隙が出来る。その隙を逃さずに如月は御坂の腹

を殴る。

「カハッ！！」

…半端でない力…ドーピングというレベルではない…。

「お姉様ああ！！」

「く、黒子！相手を見よ！…ちい！！」

が、間に合わない。氣で如月の動きを阻もうとするが…出来ない…。
氣を放とうとするが放とうとした瞬間に強制的に動きが止められる…。

成す術もなく如月の拳は黒子の腹へとぶつけられる。

「黒子おお！！！」

黒子は吹き飛ばされ、御坂同様、気絶する。

「貴様…貴様ああ！！！」

どれ程叫んでもなにも出来ない。無力…なのか…？俺は…何も出来ずに終わるのか…？

「うん♪ 詰みだね♪ 黒崎君♪」

…どうする…？ここは科学の都市…ならば体が科学の力により強化出来ても不思議でない…のか…？

ナイフを構え、ゆつくりと近づいてくる。

「黒崎君♪僕がナイフを持って近づいてるんだよ？僕は君を殺す気満々だよ？早くその場から“動きな”よ？」

…く！！

能力が使えず…そして攻撃出来ない…移動も出来ん…所謂サンドバツグ状態ではないか…！

俺は…御坂、黒子をも救えずにして負けるのか…？まさか…俺も人間の状態で力だが…まさか元から人間の者に敗れるとはな…。

そして如月は俺の目の前で止まる。

「ふふふ♪さあ…今から殴るからちゃんと“防ぎな”よ？」

…氣での防御も塞がれた…。

殴られ…蹴られ…そして踏まれる…。

「ガハッ…ぎ…ぐ…く…！！」

「アハハハハ♪君を殴ると興奮しちゃうなあ♪なんか殺すのが勿体ないよ！」

ガシッ！ゲシッ！

何度も何度も踏まれ踏まれ…ふむ…如月よ…SMではない故…止めてくれぬか…？せめて…笑い声だけは…。

「ハア、ハア、アアアアアア〜！！これは興奮するううう！ゾクゾクするよ〜！！」

「カハア！…お…おま…ぐ…え…や…やめ…ぐ！…よ…！」

蹴られ蹴られ踏まれと、俺が言おうとしてもまともに話せない…。ただ俺は思った。こやつは…絶対に…殺す…。

「ふう〜…じゃあ遊びもこれまでだね♪うん♪じゃあ記念として僕の超能力を教えてあげるよ♪」

蹴るのをやめて自身の持つ能力を話し出す如月。

「僕の能力は精神操作…マインドコントロールって読むんだよ。君は確かこういう読み方は苦手だったよね。」

マインド…コントロール…これくらいならば俺でも言える。というよりそのままではないか。

「僕の能力って不思議でね、元々の力が強すぎるんだよ。因みに能力のON、OFFは出来るよ。だって普通の会話の中に能力を発動させるからね。だから本当に普通の会話がしたい時とか不便だしね。因みにLevel5になると複数の人を同時に操作できるよ。あ、けど正確には命令かな？」

命令…これで分かった…。奴の…如月の能力は精神を操作する…精神…脳ととらえても良いな。それに命令をする。ただし…気絶すると治る故、“死ぬ”などの言葉は不可。ただ死ぬなど出来はしない…と思う。

そして…弱点は分かった。一対一ならば勝ちとは同然だが、複数いたならば一人ずつしか能力を発動できない。

「あと、さっきのあの早い言葉は戦闘用語って言って、僕の場合は会話の中に能力を発動させるでしょ？それだと時間がかかるし、戦ってる時に会話なんてしてる暇無いしね。あ、それとこれは気絶だけじゃなくて一時間経っても治るから。」

…弱点を補ったのはこれが。あの短く、一秒ともかからずに言う事で隙を無くす…。

「あ、言い忘れてた。僕の場合は扱い辛くてね。言ってる言葉の反対の意味を相手に命令出来るんだよ。だから…コンビニとかに行く時なんかとっても便利♪今お金あるから“奢らないで”いいよって言うとなんで商品ゲットだよ♪」

こやつは…その様な生活をしていたのか…？こやつ…一発本気で殴りたい。しかもゲットだよ♪の台詞で舌をペロツと出して…男の娘…しかも最悪な男の娘だ…。頬を若干染めながら放った言葉…そこらの男ならばこやつに惚れてしまっただろうな…。

だが…本気で殴りたい…。

「じゃあ…もうおしまいだね♪あ…けど君ってなんか良いから…どうしょ…襲っちゃおうかな…？性的に…は！？駄目駄目！僕は男の娘！って違うよ！男の子！男の子だよ！そう！だから…ああもう！もう殺しちゃおう！」

………ナイフを振り上げておろそうとする姿が見える。ただ、俺は

思う。こやつに殺されるぐらいならば…命乞いをして生き恥をさらし、一生奴隷として下僕で不幸な人生を歩んだ方がましな気がする…。

ナイフが振り下ろされ、そして胸とナイフとの距離が10cmくらいとなった時だ。

「俺の友に手エ出すとはア…覚悟は出来てンだろオナア？」

如月が吹き飛ばされる。

そして一人…髪は白く、体つきはとてもほっそりしている青年…

「アクセラレータ一方通行…。」

「あア？テメエはなんで友を頼らないんですかア？俺の前で友を頼れと恥ずかしい台詞を言つときながらナンであンたが俺を頼らねンだア？」

「…すまない…一方通行…。」

謝る事しか出来なかった。

「く…ん？黒崎君のお友達？へえ？黒崎君凄いな。一方通行君とお友達なんだね。」

如月は…ゆると立ち上がり、綺麗な笑みをする…が、その笑みは綺麗ではあるのだが…恐怖を覚えさせられる様な笑みを浮かべた。

「最強のLevel4と最強のLevel5…どっちが勝つか？」

とても余裕な笑みであった。如月は勝つ気でいるのか？一方通行は相手の動き…ベクトルを操作する力。攻撃方法は皆無に等しい。

…いや、待て？奴の能力は精神操作…精神〃脳ととらえて考える…
もしや…！！

「一方通行！！逃げよ！お前では奴には勝てん！！」

「はア？学園都市一位の俺がかア？」

駄目だ…奴は自身の力に慢心している…！！能力は確かに強い！攻撃方法は確かに皆無と言っても良い。だが…

直接干渉されてはどうなる？

ベクトル操作だろうがあやつの能力は多分精神そのものに干渉し、命令している。故に一人一人しか発動出来んのだろう…。更には初の戦いならば確実に勝利するのは如月であろう。更に…今は戦闘用語というものがある…。隙が無く、一秒たたないで言い終わるであろう。

「ほら？早く来なよ？最強君？それとも負けるのが怖いのかな？はは、そくだよね、最強という名を離したくないんだもんね、うん、仕方ないと思うよ」

こやつ…挑発が上手い…。

「あア？後悔すんなよ…格下がアア！！」

一方通行は挑発にかかり、如月にかなりの速さで突進する。が…

「@*!!」

「!？」

如月の目の前で拳を当てようとした瞬間に…その拳は当たってはいるが、その拳の威力は弱い。腹に当てられたが、如月は全然余裕な表情をしている。

「…はア？」

「…ぷふ…くく…よ、弱いね君…くく…全然痛くないよ…くくく…」

笑いを堪えているのがよくわかる。一方通行は何が起こったのか理解出来ぬのだろう。そう、あれは俺と同じパターンだ。能力を封じられたのだ。

「じゃあ、次はこっちだね？*§*!!」

「!？」

今度は一方通行が倒れ、そして苦しんでいる。

「&*£!!」

「が…ガ…グ…!!」

一方通行は喉を押さえて苦しんでいる。やめよ…やめよ!!？

そして更に同様する事がおきた。黒崎君は…

起き上がっていた…。

嘘…だよ…？まだ一時間経ってない筈だよ？気絶もしてない筈だよ？どうして…？

あまりの事にナイフを刺そうとしたのをやめて、黒崎君の方に向け

た。

僕は努力し続けた。超能力の才能が無かった僕は…研究所へ自ら頼って研究された…。

そして手に入れた…。この能力を…ちから。

なにもかも捨てて…すべてを能力のために捧げた。

そして16歳になった時…僕はとある人を見かけた。

…黒崎霊牙君だ…。

研究所で聞いてみたけど…彼は能力に頼らなくても能力に対抗する力があつた。更に黒崎君も研究所で人形扱いモルモットを受けてた事があつたそうだ。

なのに…なんで彼は何も失ってないの…？

回りには友達？がいっぱいいるし、いつも楽しそう？にしてるし…じゃあ僕はなに…？

…ここからだつた。黒崎君は…Level 16にも匹敵する能力を持つてる事が分かった。ここから…黒崎君を狙い始めた。

「■■■■■！！」

黒崎君は水色で透き通る戟を構えてこっちにくる。

「£、£*（来ないで）！！」

けど…黒崎君は…普通に歩みよってくる。

そして目の前に…黒崎君が来た…。

「うわあああー！」

ナイフを黒崎君のお腹に刺した。けど…

「……え？」

黒崎君は…それを無視して僕の首をつかんで持ち上げる。

「が………ガ……！」

苦しい…苦しい…！！

恐い…恐いよお…！

ああ、今更後悔した。もう僕…死んだね…。

やっと分かった…僕は…黒崎君が羨ましかったんだ…そして妬ましかったんだ…。

今になって僕は分かった。下らない事で…なんで人殺しをしようって決意したんだろう…？

今は…その感情が全くない。

僕は…

黒崎君みたいに…生きてみたいなあ…。

けど、もう無理だね。もう…死ぬんだから…。

死を覚悟した時だった。

「…ゴホッ！ゴホッ！…？」

掴まれていた手を離された。そして黒崎君を見ようとした時だった。

「うわ！？」

黒崎君が…倒れた。ナイフは更に食い込んで、血はドロドロと流れる。

「ん…いたた…」

辺りを見回すとさっき僕に殴られて気絶した子が目を覚ました。

短髪の子だ。

「く、黒崎!! しっかりして!!」

茶髪で短髪の子は僕の上にいる黒崎君を揺さぶる。

「ねえ…君…黒崎君をさ…助けてあげて…」

…疲れなのか分からない。けど…そのどつとした何かで急激な睡魔に襲われて…僕は眠ってしまった。

今までの…苦勞なのかな…?

茶髪の子が何か言ってるけど…眠気に負けて眠った…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8574w/>

とある管理者の外史物語

2011年12月19日23時01分発行